

※句読点、濁点等を補う。

※行替えは原本通り。ただし割書については〈 〉内に記し、スラッシュ（／）で行替えを示す。

※殊更に用いられたもの以外、カタカナはひらがなに改めた。

※ルビは直後の（ ）内に、細字は〈 〉内に示す。

※「事」「時（寸）」などの略字は「こと」「とき」のように示す。

※漢文の訓点は〔 〕内に示した。送り仮名と返り点の別は「／」で示し、〔 〕内に〔送り仮名／返り点〕のように記す。

※平点は◇、長点は◆で示す。

かさね草子

こじたの薬の事、みのゝ国かんのこうりの

ふしみと云里に甚五郎と申者日本一の薬を

もち申候。白きさんやくの由にて候。九郎五郎と

申もののまご也。相伝申可。

△ 齒の日本一妙薬、山田の中座の太郎衛門殿に相伝申可候。

△ そねの彦五郎殿、小便不通の薬相伝。

△ 信濃殿の神仙丸相伝。（前表紙見返）

是は目出度御事也。薬を以長命なる義

○獣の雲に吠のことに云は、くすりをせんじたるなべをねぶりて、犬の雲にあがりたることあり。まれなることなるに依て、うたいにも春永ののうたいにうたふ。しかれば、

唐の淮（わい）南国にてのことに、則淮（わい）南王と云。御門の御ねり給薬と云々。

○嘉辰令月（かしんれいげつ）のことに云ことは、よきとき、よきつき云こと也。これも春永のうたいにうたふ也。

○しらぬひのことに、天智天皇筑紫へ下り給ひし時、海上にて未筑紫へ

下着し給はぬさきに筑紫の方を御覧ぜけるに、火の見へけるを、

「あれは何国ぞ」と問せ玉ひし時、侍臣「九州にて御座候」と申ければ、

御歌読せ玉ひし詞なり。「ひ」と誦、「い」と誦む二流の習あり。

冷泉（れいぜい）家には「しらぬ火」と誦み、二条家には「しらぬひ（い）」と誦也。

又謡には皆「しらぬひ（い）」とうたふ也。「海岸そこともしらぬひの

筑紫の海」と云も同じ。但、今日本に歌道を習ひ、当公家、武家、

平人までもうたをよむ程の者に、冷泉家と二条家とならではなし、しかれば、

則定家のまごより二家にわかれて今に歌をよむと云也。

○高野大師ののたまはく、「殺（せつ）〈左傍記「ころす」〉盗（とう）を行する者は現（げん）に衣（い）食の利を得、人を謗（ぼう）〈左傍記、「そしるの義のゝしるの字」〉し、

法を謗（ぼう）するは、をのれにをいて何の益（えき）かある」と宣へり。〈『砂石集』六〉

右のころは、人をころし盗などしたるほど罪はなけれども、せめて衣食の（い）

徳あり。仏法をそしり、人をそしれば、何のとくかあらんとのこと也。

○二門口月八三（じけいこうぐわつぱちさん）と云ことは、漢朝にある府の市の中に雷をちて人傷（そん）して死す。

是を見れば背に此六字あり。皆人不知けるに、市中に利才（りこんなること）

なる人あり。文字の上に策（むち）を豎（たつ）にあてゝ見〔レ〕之に、「市〔の〕中用〔ふ／二〕小斗〔一〕」の

五文字になる。誦〔レ〕之〔を〕に、市中にちいさきますを用ふと云文字なり。

雷罰〔レ〕之、罪障（しやう）知可++。

右の二門口月八三の字にたつに中に物を引て見るに如此。「市中用小斗」。

○阿弥陀は天竺の梵語、漢には無量（りやう）寿と云。『砂石集』の四

悉曇（しつたん）とは天竺の文字を朝

にてすいしよむと也。

○子建八斗と云ことは、周に子建と云学文者あり。此子建、漢にかくれも□□（虫損）学者也。

漢の学文を壺斗につもり、子建が学は八斗なりと云こと也。（1ウ）

○世はみなえゝり我はさめりとは、世間の者はみな酒に酔たるごとし。我はひとりさめたると

なり。かくのごとく云し者は唐の楚（そ）国の屈原（くつげん）と□□（虫損）し者如此いひし也。則楚（そ）の懷（くわい）王の君臣にてありし也。

○太公望（たいこうぼう）が君のこと ○偽隱（ぎいん） ○太隱（たいいん） ○姜（きやう）

○姜（きやう）〈左傍記「太公望がこと」〉出て渭（い）俄に濁（にごる）と云こと、太公望が初めは聖（せい）人なりしが後には賢（けん）人になりて

うき世に出て世をゝさめんとしたりしにより、初め渭（い）水につりをして居

たりしが、後世に出でたりしに依て、心きたなくあるを、世の人「姜出て渭

俄に濁る」と云しなり。太公望が云ひたることにはなし。たゞ太公望

世に出たるをうき世の人如此云ひし也。

○清盛入道は平家（氏）の糟糠（そうかう）武家の塵芥（ちんかい）也と云ことを興福寺より三井寺へ

の返牒（てう）に覚明と云者書〔レ〕之。此覚明と申は勸学院の博士にて在し

者なるが、奈良に牢人して在し時書〔レ〕之。○糟糠塵芥（さうかうちんかい）〈左傍記「かすぬかちりあくた」〉

右の勸学院は、内裏にあり。源氏の学文所なり。

又奨（しやう）学院と云も在り。是は藤原氏の学文所なり。

○語の事 ○負薪（ぶしん）〔の〕言〔は〕老兵〔の〕語〔なり〕 ▲三日不〔れば／レ〕

言、詩〔を〕生〔ず／一〕口〔に〕荊棘（けいきよく）〈左傍記「いばら からくさ」〉〔を／一〕。

○瓜田〔に〕不〔レ〕取〔ら〕履（くつ）〔を〕、李下〔に〕不〔レ〕正冠（かぶり）〔を〕。

○学（まなぶ）者〔は〕如〔レ〕牛毛〔の〕、成（なす）者〔は〕騏驎（きりん）〔の〕

如〔レ〕一角〔の〕。（2オ）

○百（はく）戦百（はく）勝〔も〕不〔じ／レ〕如〔二〕一（ち）忍〔には／一〕。此懸

字宗鑑手跡を小出幡州の内こがうと云後家

より立安へ来る也。但し『山谷（こく）』に長扁の内にあり。対句に

○万言（げん）万答（たう）〔も〕不〔レ〕如〔二〕一黙（もく）〔には／＼〕。

○苛政（かせい）〔は〕猛〔し／＼〕虎〔よりも〕。人事（じ）〔は〕近〔し／＼〕市虎（しこ）〔には／＼〕。

○勝（しょう）母（も）〔の〕里〔に〕返〔レ〕車〔を〕喝（かつす）〔れども〕不〔二〕レ〕吞（のま）盗泉（とうせん）〔の〕水〔を／＼〕。〈曾（ぞう）子が曰ふ、此曾子は孔子の弟子也〉

○虞愚（ぐぐ）〔にして〕晋〔に〕智〔あり〕くと云は百里奚（はくりけい）と云者、虞（ぐ）と云国の者なり。虞の国にてみな人／＼もちいざりしにより、わざとぐなり。其後晋の国へ出し時、智を出しことを云〉

○如〔し／＼〕乙眼之亀〔の〕逢（あふ）〔が／＼〕浮木〔の〕穴〔に／＼〕。

○白楽天四計（けい）〔の〕詞、一期〔の〕計（はかりごとは）者（は）在〔り／＼〕少年〔に／＼〕云々、不〔ば／＼〕勤（つとめ）老後〔に〕空（むなし）。

一年〔の〕計者在〔り／＼〕陽春〈左傍記「元日のこと」〉〔に／＼〕云々、不〔ば／＼〕勤（め）年穀（ごく）〔に〕空。

一月〔の〕計者在〔り／＼〕朔（さく）日〔に／＼〕云々、不〔レ〕勤月事（げつじ）〔に〕空。

一日〔の〕計者在〔り／＼〕鷄（けい）鳴〔に／＼〕云々、不〔れば／＼〕起日課（くわ）〔に〕空。

○時鳥うき木の亀のはつ音かな 紹巴〈此発句如〔し／＼〕乙眼亀之逢〔二〕浮木〔の〕穴〔に／＼〕／と云の心なり〉（2ウ）

○歌の事〈并連／諧俳〉

○蓴菜（ジュンサイ）〈左傍記「ねぬなわ」〉〔の〕羹（あつもの）〔に〕鱸（ろ）魚〔の〕鱠（なます）〈晋の張翰（かん）が曰ふ〉

○秋風に鱸なますを思ひいでゝ古郷人ぞいとゞ恋しき 定家卿

○はなの露そふ井手の玉河 俊成卿

○またや見むかた野のみのゝ桜がり

○花の雪ちる春の明ぼの 同

○吉野山花のさかりやけふならん

○空さへにほふ峯のしら雲 守（しう）覚法親王〈御室の御所のこと也。式子／内親王のあに也。〉

○霞立す糸の松山ほの##と 家隆

○よられつる野面の草のかぎろひて

○小倉山時雨るゝ比の朝な＋＋

○昨日はうすき四方のもみぢ葉 定家

○広沢の池の心に身をなして（ほとりに身をはぢてとも）見る人もなき秋の夜の月（3オ）
右の歌、蜷（にな）河の新右衛門作也ト云々。〈世上にみな河の新右衛門と云、かたこと

也。蜷河よし。みな河と／云は関東の仁なり。『あづまかゝみ』に有。三百年になる人也。
／又歌人の蜷河は百四十年になる人也。近江の人也。〉

〈天神〉○つくるとも又も焼なんすが原やむねのいたまのあはん限りは

此歌大内やけて後、あたらしき柱にむしくひの歌也。

○みな人はもちいをくうてなるみがた錢もたぬ身は浦みてぞ行

此歌宗祇公関東へ下向の時、尾州なるみの茶屋にてよみ給ふに

茶屋のばうずなをしの歌に

○みな人はもちいをくうてなるみがた浦みてぞ行錢持たぬ身は

○あせつたいはなやはしさすいなむしろ 牡丹花の発句 〈宗長の時代の／人なり〉

○花やあらぬ花やむかしのはなのやど 宗養の発句

此宗養の発句は北野の能祐死て次の春、宗養北野に参詣して彼宿へ

立よりて、とぶらひごと在りての作也。此発句にて業平の「月やあらぬ

はなやむかし」の歌も大かた聞ゆる也。業平の二条の後に西の対にて

あいたてまつり、次の春又面の対へ行て見れども后ましまさず、物さびし

さに夜もすがら思ひ明してよめる歌なり。『古今』の序に業平の歌は、

「こゝろはあまりてことばたらず」と在り。よく++吟味すべし。

○たらちねはかゝれとてしもうば玉の我黒かみをなでずや有けん（3ウ）

此歌僧正遍昭の歌也。遍昭は十九にして法跡す。其時の歌也。「たらちね」は

をやのこと也。「うば玉」は黒きといはん枕ことばなり。此歌のうば玉は半臂（ぴ）

の句と

云也。えりへも袖へもつかず中とに在る也。此僧正は、ふか草の御門の御てうはい

在し人

也。俗にては、よしみねのむねさだと云しなり。良峯宗貞これ也。

○霜月に霜の降こそだうりなれなど拾月に十の降らぬぞ 家隆

此歌は家隆の九つの年の歌なり。鳥羽院の御えいらんあつて、後には

世にかくれなき者たるべきとの玉ひし也。三四十のとしまではさもなかりしに、

六十のとしより世にかくれなくて定家と同前たると云々。

○賤女がしほげの底を打たゝき塵（ちり）ゑる程の秋の夜の月

此歌は『万葉集』に在り。此こゝろはたゞ賤きとばかりの歌也。

○我恋はしやうじのひきてみねの松ひうち袋に鶯のこゑ

此歌も『万葉集』に在り。山伏の出来ぬさきの歌なり。山伏などのひうちを袋に

入てこしにつけて行、暮次第に火をうちてめしなどたくもの也。此歌にさのみ別に

やなし。世上に純蔵主の歌などゝ云ふ。純蔵主の歌にてはなし。

○〈発句〉やせにけりことしもはなはがきつばた

○〈わき〉のまんとすれど水なつのさわ

○〈第三〉くちなわにおはれていつちかへるらん（4オ）

○やり梅にもたせそへたる小大刀かな 藤孝

○やり梅にはなつきとをすにほひ哉 紹巴

此両発句、津の国難波の梅を見て、紹巴と玄旨の諧俳の発句なり。此

難波の梅をやり梅と云也。但右の二つの発句、紹巴のよりも玄旨のを

よしと云。

○勅なればいともしし鶯の宿はとゞはばいかゞこたへん

此歌、京四条のうばが方に鶯宿梅と云梅の在りしを、大内へほりて行に、
彼うば見てこれをよみし也と云々。

○おそき日のはじめや今日の朝ぐもり 近衛様〈慶長拾八の元日／の御発句〉

○木がらしの初風しるき一葉かな 宗祇〈七月に此発句を／宗祇せられけり。〉

此発句「木がらし」と云は、九月の末、拾月にふく風を「木がらし」と云物なるに、
七月に祇公／せられしこと、物の上手はなにともしはるゝとのことに書す。

○広大に見しはみしかわみざりしを聞てぞ見つる白河の関

○吉野川其水上を尋れば荊のしづくまつの下露

○逆縁見月

○隙もなく夜田刈賤は村雲のかゝる折もや月を見るらん（4ウ）

○春の明ぼのに心を入たる歌

○たちばなの花ちる里の夕暮に別れそめにし春の明ぼの

○九増室（きうざうだい）と云は唐の城の名也。

○鳥の子を十をつゝ十をは重ぬともおもはぬ人を思ふ物哉

○思ふとはかまこげかひてほしそへて門に待てくるゝをぞいふ

此歌『万葉集』にあり。九百年さきによみたる歌、作者不知、歌の心きたなきことを
云ひたり。「かまこげ」と云たるはなべのこげのこと。

○『源氏物語』は五十四卷六十帖と云ことは、二十六卷めにて雲がくれの六卷世に見えぬ
也。不見の

六卷ともに六十帖也。六十六代一條院の時、出来す。初巻より二十六の巻までは
紫式部書す。二十七より末は、子の大式三位と云が書たりと云。だいにさんみ
も女也。

○腰をれ歌 歌に「こしをれ歌」と云と「くびきれ歌」と云と二つ有り。「くびきれ歌」
と云は、

上の五文字より下の七文字へつゞきかねたる歌を云。しかれば、

「こしをれ歌」はせめてはい++も命あり。「くびきれ歌」などゝ云は
尤祝義にたゝずと云々。

○小式部が歌

○大江山いく野の道の遠ければまだ文も見ずあまのはしだて 小式部（5オ）

此歌は、をやの紫式部男の保昌とつれて丹波国へ行けるに、其時分大内にて
歌合あらんとせんぎ在し時、ある人小式部に「をやの紫式部が方へ歌のことをとひに
つ

かはせよかし。此度ははれかなるべし」と云て、又其後程へてをとづれけるは、「未
丹後の国より

をとづれはなきか」といし時、右の歌をよみし也。心は丹後の国をいく野と云に
よむ。まだ文も見ずあまのはしだてとは文もこぬと也。又頼光綱公（きん）時
保昌の保昌也。紫式部がをとこ也。小式部は子也。

○連歌にほひの句〇と云ことは九十九句めを云なり。爰にて連歌満する故に香（こ）を

たきて天神に手向る故に薫あり。故に云也。

○蜷川の新右衛門

此新衛門が名乗は親当（ちかまさ）と云けると也。法名をば智蘊（ちをん）と云ける也。

歌道は徹書記の弟子と云。

○継天と云長老の連句に

○擔〔て／レ〕花〔を〕樵不〔レ〕野〔を〕

○又ある人の曰

水したふ日くれ巾まく力つのる虫ひきがひる土ははか也（5ウ）

○莫（なか） 〈土はか／虫ひきがひる／日くるゝ／力つのる／石すな／巾まく〉莫 慕（ボ）〈左側傍記「したう」〉〈「ぼ」ともよむ。但恋慕（れんぼ）の慕の字也。恋慕に皆くるゝと云。暮（ぼ）／の字を書、悪し。したうと云て慕の字よし。則こいしたう也。〉

○土ははか。虫ひきがひる。日は暮る。力はつのる。石はすな。巾はまく也。以上七文字。

○なにとなく入江のゆふべきてみればみのと笠とぞ舟に残れる

此歌はさとの歌也。

○ある人の句に 好（かう）因（いん）縁（えん）尊悪因縁

唯〈左傍記「一字通ひきし」〉得〔たり〕郵（ゆう）〈左傍記「たびや」〉亭（てい）〈左傍記「たびや」〉一夜眠

○五里に一郵、十里に一駅（えき）と云は、唐には道五里行、十里行て

郵を立て往来の旅人のとまる

ところに定置と云へり。

○須弥山（しゆみせん）の歌

北は黒く南は青く東し白ろ西ぐれないに染色の山（6オ）

○ある人そばきをふるまはんとこしらへてんげる処に、不時の用ありてかへるを皆人とめてげるに、いやとてむりにかへるに、ていしゆ誹諧に、一「大うちやみかどのおとの聞へけり」と云に、付句「のぞむ身なればひとくらいせん」と云て、其まゝとまりてんげり。そばきをみかどゝ云。但そばにみつかどあるに依てみかどゝ云。

○勢州菩提山の見〔レ〕花〔を〕億当公曰

○菩提本樹花〔な〕非〔す／レ〕雪〔に〕乱落〔の〕春風吹〔て〕作〔る／レ〕塵〔と〕

○魂〔は〕帰（き）〔し／二〕冥漠（めいばく）〔に／一〕、魄〔は〕飯（き）〔す／レ〕

泉〔に〕。唯住人間十五年

○強（しいて）此（この）奪（うばつて）〔二〕故人両句〔を／一〕空〔く〕憑（よつて）

〔て／二〕欄檻（らんかん）〔に／一〕涙（なんだ）潺（せん）々（せん） 梵（ぼん）

貞（てい）和尚

此句、京にしてある人の子十五になりしが死してとぶらひごととしてんげるに、ある若年の僧曰。後には

梵貞和尚と云たりと云々。

○〈句〉院落三更（こう）〔の〕雨（め） 胸懷六月〔の〕霜

此歌狩野の祐正と云もの達磨の絵を得たり。則祐正是をよむ。

○来てみれば明石の浦の朝霧に舟あり嶋あり此人はなし（6ウ）

○春の夜のやみはあやなし梅の花色こそみえね香やはかくるゝ

此歌の心は、かやはかくれぬにて候。しかれば色こそみえねかやはと云やわにて

此歌の心を吟味すべし。やわと云にてかくれぬにて候。

四季

調子の歌

○そふは春夏わうしきに一土用秋はひやうじやう冬はばんしき

○○●○○○●●●●○○●○○○○●○○●●●○○●

此初りの二より、ひふみよいつととをまでかぞへて

黒一つに成てさかさまにかぞへよ。

○まゝこだて

△二一三五二二四一一三一二二一（7オ）

○离娄（りる）と云者は唐国にてかくれなき目の利根成もの也。

○師曠（しはう）と云者は、唐国にてかくれなき耳の利根なるもの也。

○いんしと云者は、同耳の利根なるもの也。蟻のたゝかうを聞たるもの也。

○四聖人の事○張仲景（九百年に成る） 東垣（とうえん）〈左傍記「同上」〉 丹溪（けい）〈左傍記「同上」〉 先生 劉河間（りうかかん）〈左傍記「四人の内の近き者也」〉

○御典薬の事

上池院 竹田宮内卿法印 半井驢庵

盛法印 友竹法印 玄朔〈道三也〉 玄鑑（かん）〈道三のノをい也〉

養安〈道三の弟子〉 裕乗（ぢやう）坊

○薬味の事 ○張仲景と東垣とは八味より多くはつかはざり
けると也。

○丹溪は多分廿余味つかいけると云。（7ウ）

○不〔レ〕見病日の事

○戌（いぬ）〈左傍記「正月」〉 亥（い）〈左傍記「二月」〉 子（ね）〈左傍記「三月」〉

丑（うし）〈左傍記「四月」〉 寅（とら）〈左傍記「五月」〉 卯（う）〈左傍記「六月」〉

辰（たつ）〈左傍記「七月」〉 巳（み）〈左傍記「八月」〉 午（むま）〈左傍記「九月」〉

未（ひつじ）〈左傍記「十月」〉 申（さる）〈左傍記「十一月」〉 酉（とり）〈十二月〉

○不〔レ〕問病日の事

○巳（み）〈左傍記「正月」〉 午〈左傍記「二」〉 未〈左傍記「三」〉 申〈左傍記「四」〉

酉〈左傍記「五」〉 戌〈左傍記「六」〉 亥〈左傍記「七」〉 子〈左傍記「八」〉

丑〈左傍記「九」〉 寅〈左傍記「十」〉 卯〈左傍記「十一」〉 辰〈左傍記「十二」〉

○大小便のをるゝ事

○一日一夜に大小便ともに七升三合也。七升三合はつねのますにはあらず。大かた米
ますの

二合半のますよりちいさく可有候。水を八十目入てますを作る也。当家の定目は八拾
目

也。水八十目を以て一升と云。但りうにより八十六匁水と云もあり。

○しせつと云薬に此ますを以て水をはかる也。しせつの文字紫雪これ也〈左傍記「くすりの名也」〉

○長病日の事

○初六〈八日とも〉 中〈毎月如此〉五八 下に四九〈これは初六とははじめの六日也。中五八は十五日十八日也。／下に四九は廿四日廿九日也。〉

○記（ママ）伊国の玉津島の明神はそとをりひめなり。そとをりのひめの字如此。

衣通姫これなり。衣通姫は允恭（いんげん）天皇の後也。歌人なり。

○河内国 道明寺に天神あり。北野よりもはやしと云。どれもはやしなどゝいへどもさは無候。

○目の病のこと 七拾二色在り。内廿二色はそこひ也。内五拾色はうわひ也。但内薬にわうれんの入らぬは

なし。又右二拾二色の内に十六色はなにとしてもなをると云ことなし。此事『龍木論』と云医書に在之。『龍木論』の龍、りうなうの龍也。木は肝の心なり。（8オ）

○鬼の国の事 度朔（たくさく）山と云山に居る也。鬼の名をば神怒（ど）鬱（うつ）累（るい）と云二人の名也。

○門釘（くぎうつて）〔二〕桃符（ふ）〔に／＼〕似〔り／レ〕不〔レ〕曾（かつてせ）と云こと在り。

○四気七情のこと并六淫

○風 寒（ひえる）暑（あつげ）湿 〈これ四気也。〉 上に燥（そう）〈左傍記「かはく」〉 熱（あつし）〈是二つをそへて六淫也。〉

○喜（よろこぶ）〈左傍記「心の病と成」〉 怒（いかる）〈左傍記「肝」〉 憂（うれい）〈左傍記「肺」〉 思〈左傍記「脾」〉 悲〈左傍記「心胞」〉 驚（をどろき）〈左傍記「膽」〉 恐〈左傍記「腎」〉〈是七情也。〉

○宇治橋をかけ初めのこと 南都元興（ぐわんがう）寺の道昭と申人のかけ初められし也。今に南都に

元興（ぐわんがう）寺と云寺在之。

○春日御作 大概けもんえけしゆくんの作りたるを云也。地蔵を作ること上手也。故に此二人は地蔵の

生れかはりと云。春日は三の御殿本地は地蔵也。故に春日の御作と云。

○春日御筆の地蔵と云は、画像あり。是はけもんにはあらず。春日の大宮の西に安居の屋と云あり。其より西に西の屋と云に籠り僧あり。其屋は地蔵也。そこに二人の僧かきたり。是を御筆の地蔵と云ふ。

○俱生神と云は炎魔（えんま）王のこと也。嵯峨にあるは小野の篁（たかむら）が冥途（めいど）に行て

正真の炎王を見て模（うつ）したりし十王也。名誉の十王也。又此小野の

篁（たかむら）と申人は尤公家也。冥途（めいど）へさい++に行し人なり。今五山の建仁寺の

藪（やぶ）の中に穴あり。これこそ彼篁のめいどへの道也。さい++めいどへ行きは中々我のみならず大和の国に矢田の満米（まんまい）上人と云篁の師在り。此上人を供（8ウ）してなど行きせし仁なり。

○浄名居士と云は維摩（ゆいま）居士のこと也。浄名大士とも云。大士と云は菩薩と云こと也。

仏の伯父也。父方か母方か如何。一期間無言したる人なり。今の世の無言学〔レ〕之。

○鳩摩羅什（くまらじう）○天竺の摩鳩羅炎（まくらえん）三蔵優填（さんざううでん）王の梅檀（せんだん／ぢん香のこと）の像（ざう／仏のこと）を負（をん）で漢土へ渡し奉る亀茲（きうじ）国等の四つの国をふる。彼国の王像（ざう）を留（とど）め、亦聖の種をつがんとて、王の女（むすめ）を合て羅什（じう）三蔵を生めり。鳩羅炎は彼国にして入滅す。什公幼少のとし、世に羅漢の聖者（しやうじや）相して云、「此子は漢土へ行ば、三十余のとし世に可〔レ〕落〔つ〕相（さう）あり」と云。成長の後、先師の本意を遂（とげん）とて、彼像を漢土へ渡さんとす。母は羅漢の語を憶（をぼ）へて子をいさむといへども、我身は縦（たと）ひ犯戒（ぼんかい）〈上部に「かいをやぶること」〉し塗炭（とたん）に墮（だ）すとも、衆生の利益あるべくは、痛むべきにあらず

とて、像を漢土へ渡し奉る。今の嵯峨の釈迦是也。裏書に在り。

〈頭書「法相宗のよみ物に／裏書と云物あり。其／書にあり。〉嵯峨の釈迦のこと律（りつ）の中には亀茲国等の四の国に王次第に

本仏を渡せりと云々。さがには第二伝と申とかや。実には是を不知。

○呉王の後を二人をし合て聖の種をつがんとす。終に、生・肇（じやう）・融（えふ）・叡（えい）の四人の

子を儲（まふく）。〈裏書〉生・肇等は羅什の子と常に申す。ただし、またある一説には（9才）

弟子と云へり。実事しりがたし。『砂石集』四

○右に書す、さかの釈迦（か）は日本の裔然（てうねん）と云人、漢にて取奉り来ると云々。

玉礪（ごくかん）と云は唐の人也。禪宗也。此玉礪、八けいの絵を書すことの上手也。学者也。

今日本に八けいの絵八ふくながらあり。一幅三千貫するもの也。但し、大ぢく小ぢくと云て二色あり。大ぢくはやすし。小ぢくはたかし。今先づ駿河將軍様に有之。但し又二ふく

うせて六ふくならでは無と云々。遠寺の晩鐘などをすきの家がらはかね絵などゝ云と也。

○廁（かわ）やの神をうすさま明王と云。しかれば、浄宗などに七堂を立るに、七つの内を壺つは西亨（ちん）が七つの内也。

此せんちんへ行に、せきなどせきて行は、噉糞鬼（かんふんき）と云をにと、烏瑟沙摩明王

と云神とにとり付かれまじきためなり。

○屠蘇白散と云くすりを内裏様の元日に、いかにも早々にきこしめす也。旧冬十二月の朔日に升をつゝませ

卅日の間其まゝつゝませて置て、元日彼水にて屠蘇白散をまくる也。右の水を歌道に

若水と云是也。

○五山のこと 天龍寺、建仁寺、万寿寺、相国寺、東福寺、是也。南禪寺

此南禪寺は五山のつかさ也。又相国寺は代々公方の御位牌所也。

○泉湧寺 此寺は代々王の崩（ほう）御の時、泉湧寺に納む。但し、前は泉湧寺を仙遊寺と

書たる也。又大昔は代々の崩御の時、此泉湧寺にも不〔レ〕納、方々に納しと云。

○卅三間の寺号は、徳長寿院と云也。別此文字也。

○鍾（せう） 煇大臣は唐（たうの世と云こと）の武徳（年号也）年中の人也。玄宗皇帝の後楊貴妃を疫癘（えきれい）なやま

かしける。其時出たるは精霊（れい）也。（9 ウ）

○日本国は東西は貳千七百五十里、南北は五百三十七里也。『盛衰記』七巻に見へたり。

○せんちんの神を烏瑟沙摩（うすさま）明王と云。本地は不動明王と云々。○廁屋と云もせんちんの事也。

○さんかんと云は百済（くだら）〈左傍記「はくさいこくのこと」〉、高麗（こま）〈左傍記「かうらいのこと」〉、新羅（しらぎ）〈左傍記「しんらくのこと」〉、是三ヶ国をさんかんと云也。

○十死のこと○酉（とり）〈左傍記「正」〉、巳（み）〈左傍記「二」〉、丑（うし）〈左傍記「三」〉

○竹田の牛黄円 竹田の家に昔は「くるしやな円」と云し也。しかるを大内へ御上げ候時、右の

「くるしやな円」を女房衆へかなにて「くるしやなゑん」と書を「くるしやな円」と御よみありしに依て、其後牛黄と名く。

○室町 京のもろ町の字如此。しかるを世上に「もろ町」と云、かたこと也。本言は「むろ町」也。

○西の洞院 京のにしのとうみん如此書す也。世上に「にしのとい」と云かたこと也。

○「ひ」と「い」の書やうのこと、よみには「ひ」の字、こえには「い」の字。

○感（ママ）陽宮、長陽宮、花清宮、阿房宮、芙蓉（ふよう）宮。（10 オ）

○八卦のこと 乾（けん／三連） 兌（だ／二断） 離（り／中断） 震（しん／下連）
巽（ぞん／下断） 坎（かん／中連） 艮（ごん／上連） 坤（こん／皆断）

○八卦 もりやう

六五 九三 初六

下よりたゝみあぐるもの也

上九 六四 九二

○ 知死期

一二九十は 子午卯酉の時

三四五は 丑（うし）未辰戌の時

六七八は 寅申巳（み）亥（い）の時

丁の日は前かど 半の日は後かどに当る物也。（10 ウ）

○ 四座 金剛〈坂戸〉 金春〈円満井〉 観世〈結喜〉 宝生〈外山〉 ○此内の代字の覚○外山、宝生也。

○坂戸、金剛也。○円満井、金春也。

○結喜、観世也。

○五音調子 双調〈左傍記「肝」〉 黄渉〈左傍記「心」〉 一越〈左傍記「脾」〉 平調〈左傍記「肺」〉 盤渉〈左傍記「腎」〉

○ 一休は後小松院の御子也。後柏原院の弟と云。故に王孫と云々。柏原院は後土御門の太子也。

○ 虚堂は一休より七代さきの虚堂也。虚堂と云人は唐の禅宗旨也。径山（きんざん）寺の和尚也。此径山寺と

云と唐禅の第一寺也。径山寺と云は

山号也。智愚と云は虚の

改（かい）名也。虚堂は道号也。

虚堂からして七代目の一休也。

○達磨と虚堂との間七百年斗有之。元和三年まで。

○達磨と聖徳（しやうとく）太子とは達磨は八拾年斗前代也。

○廬山（ろざん）の恵遠禅師（えをんぜんじ）〈世間に廬山の遠（をん）法師と云、／この人の事也。〉は、ある人の四ばんめの子也。兄三人を師匠の方へやりたれば、三人ながら

打ころしつ。四番めの子をば母なにとありともやるまじきと云けるに、父さあらんにをいてはとて、女をばさりつ。其後四番目の子を弟子にやりて、恵遠禅師とて天下にかくれなき浄土宗旨の大知識となれり。

○十有五而（にして）志（し）〔レ〕学〔に〕三十而（にして）立〔つ〕と云こと、論言（ママ）にあり。但しがくと云所にも書〔レ〕之。唐には十五のより学にこゝろざすと也。卅の年名をとれと也。

○三十而未〔ば／二レ〕名立〔ずん／一〕、君却〔て〕惜〔め／二〕寸陰〔を／一〕 卅にして名をとらずとも、卅までの学をすてず、いよ＋＋学文をせよと也。

君かへつて寸陰ををしめとは、一寸の日かげも惜く思ひ、由断無学せよと也（11 オ）

○真言の水上のこと 嵩（すう）陽の一行と云和尚有り。是真言の水上と云。大恵（え）と云は、かい名也。但し

このいちぎやうは禅宗也。

○賀知章（がちしやう）〈左傍記「俗人也」〉 秘書監（ひしよかん）〈左傍記「官の名也」〉と云も禅宗 詩を作ることの大上手也。

○十河殿 そがう殿と云人あり。そがうの文字、如此候。世上にそがうびたいなど云も、此人のひたいをそれるに額にかさのあとありてはげゝるに、かくさんためにそれりと云。それよりそがうびたいと人ごとに云ふ。

○蟻通明神と云は中将也。唐の国より日本へ九穴の貝と云あなの九つある貝を渡しけるに、御門、彼中将にをほせ付給には、「此貝の内を糸を通すべきか」との給に、「やすき事」とて、彼貝の一方にみつをぬりて蟻の脇に糸を付て通されけると也。

其時の御門をなにと云たるも、又、何中將も不知と也。
たゞ中將と斗在りと云々。記（ママ）の貫之よりさきの
ことなれば千年にもあまるべし。きの貫之さへ七百年になると也。（11 ウ）
世上にほらの貝と云非也。又、女神にてもなし。此事は則、
清少納言が『枕草子』と云物にありと云々。
○齊后（せいこう）解（とく）〔レ〕環（くわん）と云こと、蒙求（まうぎう）故事也。
或国より齊の国の智慧を
はかりてとらんとて、輪違（ちがひ）の環を拵（こ）す。齊后、これを見て、
只智慧を知らんと言ことならんとて、うちをりてやる也。
是、蟻通に似たる事也。
○竹田牛黄円
はなしに大閤様の御前にて、竹田のそうりやうと
そしの宮内卿と論あり。弟の宮内卿申されしは、此
宮内卿に牛黄円の方を、をやより渡されしと有し
時、さらば牛黄円のはじめの名はなにと云たるぞと
有し時、宮内卿、しらざりけると也。其時、彼くる
しやな円の名をそうりやう申されしに、依て、今に宮内卿に（12 オ）
方あるにはあらずと云々。
○子建八斗 此子建八斗と云は唐の学を壺石にして、子建は八斗也
と云こと也。七あゆみの内に、しを作りたる者と云々。
○まりのかゝり 定まりには長さ一じやう四尺也。はゞ七間々中也。しかるを世間には
多分五間にすると也。飛鳥殿のは右通と云々。
○不成就日 四夜 八昼 十一夜 十五日昼 十八夜 廿二夜 同五夜
廿九昼比不成 〈四一八五の羊子ノ八五二九の牛馬〉
○むくう日 正月（寅） 二月（辰） 三月（丑）
○四くの文 かうしんうしやうすいほうふしやうこしくにんでんどうしやう
ぶつきたわ
○ほろぶ日（12 ウ）
酉と亥と〈左傍記「辰や亥とも云」〉やう＋＋戌に四疋寅丑巳丑こそほろぶ成けり。
○くろ日 但そよ日と云も同前
戌や辰亥巳子の午に丑未寅申卯酉まなぶ成けり
○俱生神 經に云、人、生る始より二人の神、左右の肩にあり。一をば同生といひ、
一をば同名といふ。人は神をみず、神は人を見る。夜も昼も善惡
を記す。これを俱生神といふ。『石集』七の二
○同生同名 右に同
○天狗 ○天狗と云事、聖教（しやうぎやう）のたしかなる文見えず。先徳魔界と釈（し
やく）せるこれ
にや。日本の人の云ならはしたる計也。只鬼の類にこそ。仏法者の申に
破戒（はかい）無慚（むざん）の者多く、此報をうくるなるべし。我相（がさう）憍慢（け
うまん）冥利（みやうり）諂媚（とうび）

の業、仏事に相まじはりて、雑（ざう）類の報をうくるなるべし。『石』の八
○阿難迦葉目連此字也。

○阿 をもねるとよむ。『論語』にてよみたり（13 オ）

○唐ごまの在力の事、此名をひましと云。ひましの文字如〔レ〕此。葦麻子。

○唐ごまの身をそのまゝすりて、座の時よなのをりざるに、足のうらに
付るに、七日なしと。よなのをりざるにはそのまゝおるゝもの也。

○中風気などの人、ふじに口など方むに、方まぬ方の手の内にぬりて
たらいなどのやうなる物に水を入れて、其水の上に手を置べし。

見る内に其まゝよしと云々。

○莫 ○土はか／○虫ひきがいる／○日くるゝ／○力つる／○石すな／○巾まく／土は
はか虫ひきがいる日は暮る力はつる石はすな巾はまくなり／以上七文字

○朱引事

○慶長 ○伊勢国 ○山田 ○宇治 ○鎌倉

○秀頼公 ○家康公 ○秀忠公 ○左大臣 ○右大臣

○大成論 ○察病指南 ○論語 ○難経 ○序例（13 ウ）

○心と云文字四つあり しん・い・しき・じやうと云

○心（しん）、意（い）、識（しき）、情（じやう）

○阿 この阿の字ををもねるとよむ也。論言にてよむ也。

○戒壇（かいだん）出家のかいだんをふむの時の文字也。南都東大寺と比叡山とに戒壇の
ふみ所ありと云々。又下野国に薬師寺と云寺あり。こゝにも戒壇の所あると
云々。又、筑紫の観世音寺と云所にも有〔レ〕之と云。但、以上四所の戒壇所が
今は南都東大寺と比叡山と二ヶ所ならではなきと云。

○御行（ぎやうがう）これは当君のありき玉ふを云。法王、親王には不有。

○御幸（ごかう）これは法王、親王のありき玉ふを云。

○行啓（ぎやうけい）これは女院・后などのを云。

○月に三性あり。桂（けい）〈左傍記「かつら」〉、兎（と）〈左傍記「うさぎ」〉、＝〔虫
偏・麻〕（ま）〈ひきがいる〉の三性と云て性三つあり。桂・兎・＝〔虫偏・麻〕の
桂はかつら、兎はうさぎ、＝〔虫偏・麻〕はひきがいる。しかるに依て月
海上にうかんで兎も浮をはしと云こと是を以と也。（14 オ）

○六畜（りくちく）と云は鶏、犬、馬、牛、猪、羊、此六つのものを六畜と云。

○蛇虺（じやき）〈左傍記「はみ」〉 蜈蚣（ごそ）〈左傍記「むかで」〉 蝦蟇（がま）〈左
傍記「ひきがいる」〉

○当 まさ也。まさの字を物の本にてべしとかへりてよむ也。すべきにとをくり候に
よみたることあり。中々わろし。たゞすべしと斗よし。

○点のこと

○—〔レ〕— —〔二〕— —〔一〕 —〔下〕— —〔中〕— —〔上〕

○—〔丁〕—〔丙〕— —〔乙〕— —〔甲〕（14 ウ）

○公方代々

等持（とうぢ）院 尊氏 惠林（えりん）院 義材

宝篋（けう）院 義詮（あきら） 法住院 義澄（ずみ）

鹿園（ろくをん）寺 義満 万松（ばんせう）院 義藤（ふぢ）

勝定院 義持 光源院 義輝

長得（とく）院 義量（かず）

普広（ふくわう）院 義教（のり）

慶雲院 義勝

慈照（ぢせう）院 義政

常德院 義尚（ひさ）

大智院 義躬（み）（15 才）

〈京の〉金閣寺と云は寺号にはあらず。此寺は鹿園院の御たて候と云。

○四度解、ものゝしどけなきと云時の文字也。無〔二〕四度解〔一〕と書也。

○死〔二〕四度解〔一〕と云ことば日本の世話（は）也。たしかなる証文なし。『職原抄（しよくげんせう）』の勘解由の

処の抄物に關東抄には如此書たり。言は勘解由にて御調の算

用を遂るなり。即ち一年に四度さん用を遂るに、私曲（しきよく）あれば、一度も

遂（とげ）〔二〕結解（けつげ）〔を／＼〕ざれば、四度の算用皆解（とか）ざる故に、四度解（とくる）ことなしと

云儀也。其身不〔る／＼〕正故に其躰しどけなしと也。

○弓長のこと かね七尺二寸を以て弓長と日本に云之。○唐には臂の

骨の角より爪のさきまでに四長を以て弓長と云。

但これ七尺二寸あるか。

○陰（けん）の字さかしい也。

○驗（げん）の字、病のげんを明たりなどゝ云時の字、是也。○検（けん）知行をけんちするの時のけんの字也。（15 ウ）

○論語の第二為政の篇に有之。

○十有五而志於学と云は、孔子は十五の年より学文の

志しふかくして、学文に心を入給ふ也。孔子は聖（せい）人なれば、

十五より内から学文の志あれども、凡（ぼん）人に其心ざしはやく

つとめよと云心なり。故、我年十五にして志学文と云へり。

即、十五は成童（どう）とて人となるの始也。すなはち志学（しがく）

の年と云は人十五歳のこと也。

○三十而立とは、十五より三拾まで十五年の間に、五經の学文したつと

云こと也。立とは学文したつと云義也。五經の学文くはしく

あきらめて、人に学文しやと名を云ひ立てらるゝ也。

○四十而不惑と云は、学文したてゝより四十まで十年の間に、万の書籍（じやく）

〈頭注、書籍とはよろづ／＼ものゝ本の／＼名也〉を見聞てもひらき、人の善悪をきゝならふが故に、何事を見

聞てもめづらしともふしぎとも心のまどうこと四十からしてなしと云こと也。（16 才）

○五十而知天命とは、三十にして学文成就し、四書五經くはしきうへ、文

五拾までは廿年の間、万巻の書をも見、或は万人

言語（ごんご）の虚説（つ）禍（くわ）福の盛衰（すい）万挙（きよ）万詮（せん）み

な以て了知す故人は皆賢愚（けんぐ）貧福（ひんぷく）寿命（じゅみやう）

天の命（い）ずる処とすること五十にしてあきらめさすると也。

○六十而耳順（したがふ）とは人の云ことを聞て不〔レ〕逆なり。云こゝろは学文知明の上
に年六十になるまで、多のことを聞てくが故に、人何

事を云へども、それさもあらん、我も昔さやうのことを聞たりと

云、ついに耳にもるゝことなきが故也。

○七十而縦（ママ）心所欲不踰矩とは、智明なる上に七拾年の間、ならひつ
とめ多のことは見きゝ、人の作法（さほう）をしるが故に、七十にしては身も
くたびれ、心もくたびれて、身をほしいまゝにもち、心のまゝにたちふる

まへども、法度にもれたるふるまいをばせぬものなりと也。八十のことなきは
孔子七十三歳にして死し給ふゆえにこれなしと云々。（16 ウ）

○蹴鞠（しうきう）〈左傍記「けるまり」〉場○雨をちより向へ七間半、脇へも同じこと
也。然ども其れほどの場まれなる故に、

五間に五間も大概よし。懸の高さは一丈四尺のもの也。懸の木は
柳、桜、松、楓也。

（図）

楓 一人 一人 一人 一人 一人 一人 松

向 一人 一人 軒

桜 一人 一人 一人 一人 一人 一人 柳

○賞翫の人、松の左に立、其次桜の左に立。これを正分の相手と云。其
次の人、柳の右に立、其次楓の右に立。同これも正分也。其以下
次第を追ふべし。又、松の左より柳の右りへまりを渡すを次分と云。（17 オ）
さし向にて無故如此云也。徐皆同じ。庭に有八境身に有、両分と云此こと
也。両方は即正分次分也。八境は即八人の境也。これ八人詰の
蹴鞠也。

○六人詰の時は、軒の真中に一人賞翫の人立也。其次に向の真中に
一人、其次に柳桜の間に二人、其次に松楓の間に二人立、即朱の
人の如し。

○まりを入るは余の人もちて軒の真中よりころ++ところばかり入に入て懸の
真中まで行やうに入るもの也。

○あげまりは、八人詰の時は桜の左とつて少胸たけほどけあげ、さて
せいたけほどけあげ、さて三つめをせいだけより少したかくけ上て、貴人に
けかけて渡す也。

○木越と云は、松は松、柳は柳の本云々。居る人木の本にて他人の方へ
出てけるを木越と云。木の後ろより廻りてけるをば不苦と云也。
其れも中へ出ては不苦也。木の本にてのこと也。（17 ウ）

○六人詰の時も作法同、向の人あげまりをける也。

○懸に皆松と云こと、別の子細なし。飛鳥殿の懸に皆松を植玉ふにより、
位にてなければ、植又ぬなど云也。位と云ことなし。柳桜松楓とう
ゆればあまりことめき物がたきゆえに、大がい松ばかりうゆる也。大方両岐

の松をうへてよし。両方へ角みをまたぎてよし云々。

○又懸に四本ながらかゝり竹をさすことは時の用也。切立（きつたて）と云て竹に三重か五重か枝をつけて、長け一丈三尺か四尺にきりてたつる也。さきをそぎぎりにきることあしゝ。のこぎりにてきりとむるもの也。自然まり空よりをちかゝりてつきつらぬくことあり。其用心也と云々。

○的場は弓杖廿一杖のもの也。然ども、これら射る人まれなり。今は十六杖、或は十七、十八杖にする也。

○孔子は老子より後の人也。但、老子の变化（へんげ）と云。老子と孔子の間、三百五十年にもなるべきと也。（18 才）

○釈迦は今までに貳千六百年にあまると云々。元和元までに。

○孝〔は〕百〔はつ〕孝不〔して／レ〕傷〔なは〕返〔すを〕謂〔ふ／二〕孝〔の〕始〔めと／一〕。

○智者不惑のこと

と云は智者とはよくものを知たる人のことなり。智恵ふかく物をしりたるが故に何ごとをもまどひさまよふことなしと也。

○仁者不憂のこと

とは仁者と云は上をあがめ、下をなづけあいするを云也。言は老たるを敬ひ、若き人を愛し、智者をたつとび、愚者を慮り、上下にうかばず、人民をむさぼらず、富をもうらやまず、貧しきをも不憂なり。故心ひとしき人はかなしきことをもかなしまず、うれしきことをもよろこばず。しかるに依てうれえたのしまざる也。

○勇者（ゆうしや）不懼のこと

とは、勇者と云は、けなげなる武辺者を云なり。言は、知慧才学ものなり。分別遠慮なくして、心猛り生れたる人は何事にもそれざるなり。故に智者は勇あらずと云ことあるなり。（18 ウ）

○五摂家と申は

近衛殿 鷹司殿

二条殿 一条殿 九条殿 此分也。

此家五家は摂政関白になり玉ふ。

○門跡と申は

仁和寺御室 青蓮院（比叡（えい）山のざすになる家） 利本殿と云く左傍記「天王寺、吉野、多武峰（たうのみね）／此三寺の別当也」

梶井殿（同ざす） 妙法院（同ざす） 是等門跡也。

〈山伏のつかさ也。／三井寺の別当〉聖護（ご）院殿 円満院殿

〈同三井寺別当〉花頂（ちやう）殿 〈同三井寺〉下川原殿

〈同三井寺〉実相院〈摂家門跡也〉 〈だいの別当〉三宝院〈武家門跡と云〉

〈春日の別当〉大乘院〈南都〉 一条院殿〈同上〉（19 才）

定法（ぼう）寺殿〈青蓮院／脇門跡〉 浄土寺殿〈同〉

浄成院〈同〉 本願寺殿〈同／今の一向宗のこと〉

○清花家のこと

転法輪三条殿 久我（こが）殿

西園寺殿 徳大寺殿

花山院殿 大炊御門殿

洞（とう）〈左傍記「すむよし」〉院殿 菊亭殿〈今出河殿とも云〉

大方清花家此分也。猶、此外にも可在之。但

此家大臣まで官を成給と也。（19 ウ）

○『難経』は秦の扁鵲が作也。註は勿聴子が作る。百五十六十年になる。

○『内経』は黄帝と岐伯との論也。但この岐伯は岐山（ぎさん）と云山に住すと云。

但、慶長拾九までに二千三年になる也。此貳千三年になるとの

さん用は慶長拾九の正月八日に億当と了慶と立安と

七兵衛四人居てさん用してみる也。

○大職冠は千百年程にもなるべきと云。但元和元年までに。

○聖徳太子は千四五拾年にもなると云。但慶長十八年までに。

○吉備の大臣は聖武（しやうむ）天王の臣下也。唐へ渡りし時、野馬室（ママ）を（20 オ）

よみ、又朝へもうつしかへりしと云。此野馬室（ママ）は宝誌和尚

の作也。此宝誌和尚は梁（りやう）の武帝の時代の人也。千百年程に

なる人也。此時代には何宗と云て宗躰はなし。しかるに依て不書。達磨と

同世の人也。

○七味円と云物あり。これらも此宝誌和尚の作也。

○衣通姫はいんげう天皇の後也。千三四百年にもなると云々。但慶長十八年までに。

○中将姫は九百年になると云。よこはぎの右大臣がむすめ也。是も同。

○応神天皇は千五百年になると云。但是は慶長十九年までに。

○難波（なんば）の京と云は大坂の城のある所也。以上三度都立也。内一度は奈良よりさきなり。但慶長十七年までに。

○奈良より平安城へ京のうつる事、うつり候てより七百年にもなると也。

但、けい長十八年までに。

○又寸脈六分関脈六分其上三分入于寸内是陽得寸（20 ウ）

内九分陽数九也。尺内七分関下三分入于尺内是陰

得尺内一寸陰数十也。終如一寸九分比也。『古今医鑑』

○『全九集』と『察病指南』とには二寸九分と有り。悪きか。

○『難経』と『古今医鑑』とには一寸五分と有り。吉きか。

○御室の御所と云は宇多の御門より初りける也。其子細は真言の宗を

弘法大師に相伝して、さて太子のだいごの天王と云に世を渡し

玉ひて後、御室の御所を京の北山の仁和寺と云所に御

建立ありけり。それよりして御室の御所と云こと初まれり。

此宇多の天王は弘法の弟子也。今までに六百四五十年にも

なるべきと云。但元和二年までに。

○醍醐の天王と云も二度あり。尤のちのは後醍醐の天王と云。此後の醍醐

の天王の時より『太平記』の乱初れり。しかれば此醍醐の天王は

はじめの醍醐の天王によく似たるに依て、後醍醐と名付く。
 一段有がたき主皇にて、日本国中を手にとをぼしめし（21 才）
 其身をつめ御なさけふかゝりしに、或時、世中日やけして
 民百性けつなりし時、さあらば御ぜんをもあぐるなどの
 仰にて、御ぜんもすでにまいらざりしに、たとへば御ぜんにまいらぬ
 とて日本国のたよりもなるまじきなどゝ臣下奏聞す。
 さらばとて京中のたのしき者に仰付させられ、たかくうる
 米をありていにうれとて。

○五行のこと

〈従冬春〉	水生木	火剋金	〈従夏秋〉	
〈従夏秋〉	木生火	水剋火	去声	入声
〈従秋冬〉	金生水	木剋土	四声〈と云て此四つの外／にはなし。〉前	
	土生金	土剋水	上声	平
	火生土	金剋木		

（※この部分、天地逆に記す）

ふ	合	がふ	入	にふ
つ	達	たつ	悦	えつ
く	徳	とく	角	かく
ち	日	にち	七	しち
き	石	せき	夕	せき の類也
入				
声				

（21 ウ）

○五運十八季と云ことあり。医書にあること也。尤医道に入こと也。ならい可申。

事外むつかしきと云。

○赤眉賊（せきびぞく）と云もの唐人也。面に朱をぬりてあかづらになりて、鬼のまねをして天下を

とらんとしたることあり。人をゝどして大かた天下をしらんとしたりと云々。

○宮（一越）〈左傍記「中土」〉 商（平調）〈左傍記「西金」〉 角（双調）〈左傍記「東木」〉 徵（黄鐘）〈左傍記「南火」〉 羽（盤渉）〈左傍記「北水」〉

○長太刀は其人の耳のびくをかねにするもの也。但、諸道具に寸のなきはまれなり。

長太刀はさして定りたる寸なし。

○京の黒谷は四百年程になると云。慶長十八まで。

○せいぐわん寺は法念上人をうづみたる所と云。法念上人の夢に善導の

見えて三昧の仏を口よりふき出し給ふと云。法念の名を初めは源空と

云ひたりと云々。（22 才）

○伝教大師は比叡山の出家たりしが、念頭と云ことをすいし出して、安樂のこゝろをしあんして、地ごく極樂を絵に書てをかれしを法念見て、それよりとかく世にまじはること大つみとをもひてより、浄土宗と云ことはじまれり。唐より渡りたる

宗旨にもあらず。又黒谷よりさきに大谷と云所知恩院のうらにあり。

そこにまづ居す。

○石榴（じやくろ）〈左傍記「りう」〉と云に付て榴（りう）とばかり云がじやくろのみの名也。安石国（あんじやくこく）と云

国より渡りけるに依て石榴（じやくろ）と云。たとへばをはりだいこんと云が如し。

ざくろと云は尤よし。じやくろと云てもかたことにあらず。

○穴賢（あなかしこ）と云は昔は天より羨（恙／つゝが）〈左傍記「うらやむ也」〉と云虫降りて人をくひけるに、皆人

あなをして家としてはい入て居するに、たがひの見廻などに、何事も

かくあなにをわするかなどゝ云遣して、あなかしこくしたりと云て

めでたきことのとめをはりに、今の世にあなかしことゝむるこの故也。（22 ウ）

○白桃としろきもゝを人ごとに云かたこと也。○碧（へき）桃と云よし。／○璧（へき）桃とも書也。／○緋（あけ）桃

○磁石（ぢしやく）東海の磁石山と云山より

来るといへども、日本にも有〔レ〕之。

此磁石と云ものはまづ海にあるもの也。しかれ共、日本のはつくしのどれの

国やらに山にありし也。うし程も大きな石なりしに、ある時そま人

やまへ行し時、こしにありしなたをぬきもせざるに、ふと出て今のうしほどなる石にとりつきてはなれざりしに、ふしぎやと思ひ、とらんとすれどゝれざりしに、不及是非〔に〕宿へかへりて

石になたをとられてんげりと云に、皆人定て磁石（ぢしやく）なるべしとて、とりて今の世にも

うりかいするはこれなり。又云々、其時＝〔金偏・越〕（よき）なた斧（まさかり）などにてはとれざりしに、別な

石を以てとりしと云々。但あまりむかしの程は鉄をすはずと云。廿年ほど以前のこと也。

○＝〔金偏・越〕（よき）斧（まさかり）のちがいは、＝〔金偏・越〕（よき）はかしら四かく也。斧はかしら丸し。こゝを以て二色に

かはると云々。（23 オ）

○『和漢朗詠集』は公任（きんたう）〈傍記「きみまかする」〉の卿と云人の作也。をよそ六百年になると云。初めは「硯蓋（けんがい）〈左傍記「ふた」〉不出書」と名づけゝるを

後『朗詠』と名く。又『朗詠』のてんにむかしより二流あり。綾小路（あやのこうぢ）流と云と西園寺（さいをんぢ）と云と二流

あり。是は本経のことにはあらず。たゞてんのことなり。但そとづゝのちがひなりと云々。

（23 ウ）

○仏法のことを書す

○合（がつ）〔レ〕掌（しやう）〈左傍記「たな心をあさなす」〉又（しや）〔レ〕手（しゆ）称（せう）〔す／二〕南无阿弥陀仏〔を／一〕

○三心四修のこと○三心は安心也。〈『砂石集』の一〉一者（しや）至誠（しじやう）心、二者深（しん）心、三者廻向発願心、是を三心と云。

○四修は起（き）行五（正ヒ）念行作業（さがう）〈『砂石集』の一〉起行正念作業（さがう）とも云。

○阿弥陀は天竺の梵語。漢には無量寿と云。『石集』四

○一向宗系図

親鸞（しんらん）〈法然上人の弟子也〉霜月廿八日 如信（によしん）正月四日 覚如（かくによ）正月十九日 綽如（しやくによ）卯月廿四日

巧如（げうによ）十月十四日 善如（ぜんによ）二月廿九日 存如（ぞんによ）六月十八日 蓮如（れんによ）三月廿五日

実如（じつによ）二月二日 証如（しやうによ）八月十三日 顕（けん）如 〈八月廿四日／門跡祖〉 教（きやう）如 本門跡

○螺髻（らほつ）と云は仏の御頭の螺（にじ）のしりのやうにまいあがりたるを云。螺髻（け）とも

云なり。同ことぞ。

○四聖 阿弥陀、釈迦、文殊、観音かと云々。（24 才）

○釈迦（しやか）○阿難（あなん） 迦葉（かしやう） 目連（もくれん）此四つ文字をしるべきために書する也。

○太神宮前三宝異名○社檀をしては経をもあらはにはもたず、三宝の名をもたしかにいはず。仏をば「立すくみ」、経をば「染紙」、僧をば「髪長」、堂をば「こりたき」などいふと云々。『石集』一。

○内宮外宮両部大日○大海の底の大日の印文より事おこりて内宮外宮は両部の大日とこそ習伝へて侍れ。○〈内宮は胎蔵界の大日／外宮は金剛界の大日〉或は阿弥陀とも習伝也。『石集』一

○天巖戸と云は都卒天也。たかまの原とも云へり。同一。

○大神宮物忌事 ○余社にすこしかはりて侍り。産屋をば生氣と申す。五十日忌。又死せるをも死氣とて同五十日忌給也。其故は死は生より来る。生は是死の始也。されば生死を共に忌べしとこそ申伝侍云々。『石集』一。（24 ウ）

○東福寺の開山、聖一国（ママ）の死日十月十七日也。しかるに依て、十月十七日に東福寺の交割（こうかつ）物出ると也。交割の内、白衣の観音又五百羅漢など有之。是は晁殿司（しやうでんす）と云人、東福寺の寺中にあり、其仁は唐へ渡り、絵具のつかひやうを相伝して彼白衣の観音や五百羅漢などかゝれしと云。其外東福寺にある絵は大方彼晁殿司書すと也。又山門に十六羅漢木頭にてあり。これもさいすき絵也。此さいすきも同人と云。涅槃像も同人也。

○建仁寺にむかしは涅槃像（ねはんざう）あり。此涅槃像は右の東福寺のよりも五尺大きにしたりしを、有時やけて今は無之。但此絵は狩野の家（い）の者書けると也。それに付て涅槃像の絵に多分草木までも釈迦の御死を知てかれしと世上に云に付て、ひやうしに書くる草などまでをかれたる跡に書けると也。これは下手なることと京中に申合しと也。

○高野に大きな絵あり。曼荼羅也。金堂に何もかゝると云。但此絵平家の相国入道清盛のかゝれしと云々。此曼荼羅を東曼荼羅西曼荼羅と云。其しさいは金堂南むきにあるに依て西東にかゝりたる絵（25 才）なる故、さやうに云と也。金剛界、胎蔵界の曼荼羅也と云。

○膏藥の事

人のかみのそりくずひとりのそりくず程入る也。又朱を貳両入る。ひまし百つぶにあぶらを入れてねる也。

○葦麻子 百つぶかはをむきて入る。

○朱貳両 但丹第一よし。

○かみそりくづ ○唐蠟一匁

○右の分を黒ごまのあぶらにてねる。かげんはねる時水を目目に入れてしづくを水へ入て見て手につかぬ程にするがかげん也。

○陸修靖 東（ママ）渚明 遠法師 此三人は廬山と云所に引こもり、別時念仏を

つとめ、世間にかまはず有しと也。然間、浄土宗の別時と云こと、此時より（25 ウ）はじまりけると也。右の三人酒をのみたるもの也。此遠法師は廬山の恵遠禅師也。

○天神十五無益

初面の狂言 大事の異見

老耄の出仕 無心の所望

愚者の教化 末座の推参

公界の高声 下戸の数盃

不習医道 座敷の居眠

衆中の大食 法師の腕立（うでだて）

貧者の見物 遠路の財宝

夜行の多言 （26 才）

○鎌足（かまたり）〈左傍記「大職冠のこと」〉は天智八年に薨ず。

○伝教弘法入唐は桓武延暦廿三年なり。

○空海大師位嵯峨弘仁十一年

○空海入定仁明天皇承和二年

○『古今集』延喜五年

○『千載集』文治二年（26 ウ）

○大和の初瀬の観音は羽柴大納言殿の御うへさまの御ざうやうあり。三千石の入道也。羽柴大納言と云は大和大納言殿也。太閤様の御弟也。

○高野の御ざうやうは太閤様のあそばし候也。二万七千石入る也。

○山城の大仏は同太閤様のあそばし候に、二万六千石の入るみち也。

○玄宝僧都は奈良の興福寺の住僧なりしが、うき世をいとい

三輪の山のをくに道心して居られしに、みな人学の道をそこまでも
 たづね行をいまはしといしになをむつかしく思ひ、備中の国
 鉄田（哲田）郡の湯川と云所にぞゆかれける。右三輪に住せられし
 時、高市原（たけいちばら）の大納言がむすめにむかし三輪の明神よる十
 かよひ玉ひてすでに神子をうむ。これはむかしの物がたり。其時の
 くるしみを玄宝僧都に夢中にすがたをあらはしける。これは彼女也。
 しかるを今の三輪のうたいには明神のごとくにうたう非也。
 ○又高市原（たけいちばら）の大納言は垂仁（すいにん）天王の時代の人也。玄宝僧都は
 嵯峨の天王の時の人也。垂仁より嵯峨までは間千年あり。又玄宝から
 今までは七百年程と云々。
 ○興福寺の宝物の三つの文字は蘭奢待○面向不背玉
 ○泗浜石（しひんせき）三つの文字如〔レ〕此〔し〕
 ○大和国吉野の蔵王権現は神体は弥勒と云。又京の東寺の
 日蔵（につざう）と云人いのりしは、此山の守護にならんとをぼしめす神仏いでさせた
 まえと行しに、弥陀のいで玉ふに、此御すがたにてはいかゞとをいかへすに、第二番
 めに地蔵のすがたにて出玉ふに、又をつかへす第三番めに今の吉野の蔵王也。
 ○春日に四社あり。一社は伊勢、一社は石清水、一社は鹿島、一社は
 香取也。
 ○かしまかとの文字○鹿嶋○香取（かとり）を舞などに「かんどり」とはぬること（27
 う）
 まいのふしなり。実はかとり也。
 ○右にしるす吉野の蔵王第二番めの時、地蔵伯耆の国だいせんの
 地蔵是なり。其時伯耆の国へ飛去玉ふと云々。
 ○三輪のえんぎを億当によくつくりなをしたまへと申されしに、昔より
 あるえんぎなにともしれず、あとさきともなきことあるに依てつくりも
 なをさず其まゝをかれしと億当云々。しかる間、よくとつてをき
 玉へと申しけられ、今はみせぬと云々。
 ○『正統（とう）記』と云ものにあり
 仲哀（あい）崩ず 皇后（くわうがう）いきどをりまして七日ありて別殿を
 作り、いもほりこもらせ給に、此時応神天皇はらまれさせ
 まし十々けり。神がゝりさま##道をゝしへ給。此神は（28才）
 表筒男（うはづゝを）、中筒男（なかづゝを）、底筒男（しもづゝ男）となん名のり給け
 る。是は
 昔伊弉諾（ざなぎ）尊（みこと）日向の小戸（をど）川櫓（あはぎ）が原にてみそぎ
 し給し時、化生しましける神也。後に摂津国住吉
 といつかれ給ふ是なり。
 ○中哀（あい）とは今やわたの八まんのをや也。今のやはたには三社あり。
 一社は中あい、一社ははちまん、一社は神功（ぐう）皇后（くわうがう）也。則右に
 しるす。応神天皇と云は八幡大菩薩也。
 ○弘安書礼と云ものあり。書状のことをばかりを作るもの也。九條殿近衛殿と兩人

して弘安年中に公家を十六にえらび出し書状のことを作られしことを云。

式百七八十年にもなると云々。(28 ウ)

達磨の賛に

小補の賛

○一葦(ちい)又(た)添(そう)豊葦原(とよあしはら)

春風吹〔て〕入〔る／二〕悪(く)芽孽(げげつ)〔に／一〕

西天(さいえん)東土(とうど)鉄渾(てつこん)崙(ろん)

齒折(をれ)耳穿(うげ)無(なし)〔二〕脚跟(きやつこん)〔一〕

此賛は億当公の書す。絵は右兵衛殿絵也。但賛は

達の面のむきたる方よりかくもの也。同よむも面のむきた

る方よりよむもの也。(29 オ)

七味円のこと

○梁の武帝、被〔し／レ〕傷〔を／二〕七情〔に／一〕問〔ふ／レ〕藥〔を／二〕誌公和
尚〔に／一〕。誌公答〔て〕云〔く〕、夫〔れ〕

百病〔は〕自〔ら／レ〕氣生〔ず〕。氣者(は)亦〔た〕自〔ら／二〕恋思〔一〕生〔ず〕。

従〔り／二〕上古〔一〕以来して

得〔る／二〕恋慕〔の〕病〔を／一〕者は、随意無能而(にして)無〔し／二〕所作〔一〕
而存分

所望無用短氣瞋恚無〔き／二〕慈悲堪忍〔一〕故(へ)為〔て／二〕此〔の〕病〔と／一〕

被〔る／二〕傷七情〔に／一〕。所謂(ゆる)其脈狂乱而(をして)或〔は〕浮或〔は〕
沈、又及〔て／二〕喃時〔一〕

〈※頭注「喃時」と云ことは／日の暮を申／なり〉

潮熱往来〔して〕惡寒〔し〕胸膈張滿〔し〕心氣甚〔うして／し〕矣。診〔す／二〕腎
命心之脈〔を／一〕以〔て〕可〔レ〕尤〔レ〕証〔を〕。聞〔く〕恋〔は〕於耳〔に〕煩
〔ふ〕。腎〔の〕邪氣〔なり〕。見〔る〕恋〔は〕出

目〔に〕煩〔ふ〕。肝〔の〕毒邪也(なり)。最〔も〕治〔レ〕之有〔あり／二〕一藥之
方〔一〕、七味円〔と〕云〔レ〕之〔を〕。

方〔に〕云〔く〕除煩惱(じよぼんなう)〈七顆(くわ)〉堪忍(五両)分別(七両)遠
慮(三両)

遠離(六両)截断(せつだん)〈八両〉無用(三両)

右用〔て／二〕聡明(そうめいの)刀〔を／一〕清淨〔の〕心水〔に〕一夜浸〔して〕以
〔て／二〕智恵火〔を／二〕焙〔り／レ〕之

細抹〔して〕以〔て／二〕慈悲心〔を／一〕和合〔して〕為〔して／レ〕丸〔と〕昼夜服
用而三年可守〔る／二〕

養生〔を／一〕。若〔し〕述懷発〔ば〕加〔へよ／二〕分別一倍〔を／一〕。若〔し〕存
分発〔ば〕加〔へよ／二〕無用一倍〔を／一〕。短氣起〔ば〕加〔よ／二〕堪忍一倍〔を
／一〕。瞋恚発〔ば〕加〔よ／下〕遠慮〔と〕

与〔と／二〕分別〔一〕一倍〔を／上〕。所望発〔ば〕加〔へよ／下〕利根与(と)〔二〕

分別(つ)〔一〕一倍〔を／上〕。若〔し〕発

熱〔の〕意(ろあらば)加〔て／二〕善(ぜん)知識(を／一)以〔て〕泻〔よ／レ〕之

[を]。恋慕（れんぼ）執着無〔し／レ〕不〔レ〕愈〔すと云こと〕。
 和尚捧（さゝぐ）〔二〕武帝〔に／一〕得〔て／二〕誌公〔の〕教化〔を／一〕止（や）
 〔め／二〕悪逆殺生（せつしやう）非
 道〔を／一〕天下無為也。
 右宝志和尚の作也。野馬室（ママ）をも同此仁の作也。
 富〔は〕嫌（きらい）〔二〕千口〔の〕少〔きことを／一〕、貧〔は〕恨〔む／二〕一身
 〔の〕多〔きことを／一〕。（30 オ）
 ○いしばいをにらにてまめぐことあり。石ばいをいかにもこまかにしてにらにして
 はちにてすり、久く置てむねむしに吉。きづによし。
 ○光源氏と申は○延寿御門の六番めの御子也。冷泉（れいぜい）の兄なり。但
 御兄弟以上十四人と云。
 ○舜（しゆ）若（しや）多〔し／レ〕神知〔るや／レ〕我〔を〕不（いなや） 奪〔ひ／
 レ〕人〔を〕奪〔ふ／レ〕境〔を〕没蹤由（もつせうゆ）〈左傍記「あとなしと云こと」〉
 須弥（しゆみ）百億脚跟（きやつこん）下（か）
 直（じき）〔に〕踏（ふむ）〔二〕宗門〔の〕最上頭（さいじやうとう）〔を／一〕
 一休叟（さう）宗順
 此れはくだりわろし。本のには
 かくのごとくはなし。このをくに
 本のごとく書す。（30 ウ）
 ○舜（しゆん）若（しや）多〔し／レ〕神知〔るや／レ〕我〔を〕不（いなや） 奪〔ひ
 ／レ〕人〔を〕奪〔ふ〕
 〔レ〕境〔を〕没蹤由（もつせうゆ）〈左傍記「あとなしと云こと」〉 須弥（しゆみ）
 百億脚跟（きやつこん）下（か）
 直〔に〕踏（ふむ）〔二〕宗門〔の〕最上頭（さいじやうとう）〔を／一〕
 一休叟宗順（さうそうじゆん）
 ○かくのごとく書てあり。但銀子十枚と云ける也。
 ○六塵（ろくちん）〈左傍記「ちり」〉と云は○眼耳鼻舌身意（げんにひぜつしんい）此
 六つを六ちんと云。しかれば播磨国の
 書写寺の開山性空（しやうぐう）上人と云人、此六塵（ちん）のえられけ
 り。えるとは六根浄を得るとて、この六つのちりを身に
 もたずはなるゝこと也。書写寺はてんだい宗也。
 江口のうたいにうたうろくちんのけうにまよいと云此こと也。（31 オ）
 ○信濃の善光寺の如来は白濟（さい）国の聖（せい）明と云王より日本へ渡す。
 日本の欽明（きんめい）天王の時代に渡ると云。此時日本に未仏法などを
 しらず。ひとへに神世なりしによつてもちいず。すでに如来をも難波の浦へ
 すてゝ海へ入けるに、日本国中に大やく病をはづらひければ、是は
 すでに如来のたゝりとて、其後仏をたつとびける。其時欽（きん）明
 天皇の内の稻（いな）目と云臣下もらい又其時分守屋（もりや）などゝ
 云ものあり。中々日本は神国なるにいかゞとてさまたげにける。此
 守屋は後大子にてきをなしける守屋也。それゆへ大子はす

でに仏法をひろめたまはんとのこと、もりやはこれをさまたげゝる。今の津国天王寺の
大子これなり。

○みちのくのさのゝふなばしとりはなしかねこそひゞけゆふぐれのそら

此歌をみちのくのさゝ舟橋鳥はなし鐘こそひゞけ夕暮の空と云せつもあり。

又みちのくのさのゝ舟橋とりはなしと云もあり。但鳥はなしがましたると
云か。

○慶長十九年三月廿七日に野田の藤を見物に行し時、人数十五六人もありける也。

其時の歌によめり(31 ウ)

○なべて世は暮行春を藤がえのはひまつはれてとまる此宿 宗由

此歌は僧正遍照が花頂山に道心をゝこし山住して居たりし時、京の
女房達彼山の藤を見に居て遍照方へもをとづれずとをりしを見て
よみける歌に

○よそに見てかへらん人に藤の花はいまつはれよえだはをるとも とよみける
歌の心を思ひ出てよみけると云々。

○暮行もなをおしまるゝ藤がえのやどにや春のかへさわする 了慶

○春過て残れる夏の藤がえにかへるさわする旅の道哉 旅人

これは雲太(うんたい)

○これは関東衆也。

○むらさきの色こき藤のめもはるにながき日かげもおしき暮哉 元孝

○我やどの八糸山ぶきの一枝にちり残らなん春のかたみに

此歌は『朗詠』の上巻にあり。別なるめづらしきこともなけれども書付る物也。但、
やへ山ぶきの一枝と云一枝に「枝」と云字をかゝぬものなり。ただかなに「えだ」と
かくよしと云也(32 オ)

○身にまさるものなかりせばみどり子はやらんかたなくかなしけれ共

此歌はある人子をやしなひかねてすつる時に其子に

たんじやくをつけてすてんげるに、公家のかたへひろひとりて跡を
つがせけると云々。

○紙きぬを

きつゝなれにし

つきもあらば

はる##きぬる

旅は思わし

木食上人

から衣きつゝなれにしつましあればはる##きぬる旅をしぞ思ふと
同じこゝろなるべしと也。

○東貧西福南長北短と云は東枕はびんぼうする也。西枕はくわほう
あり。南枕は命ながし。北枕は命みぢ(32 ウ)

かしと也。

○又曰、東貧南災(さい)西福北愛とあり。

○こゝにきし

かゝるうきよが
たびの身に
なさけふかきを
たづねてぞゆく

○此歌は小刀たしかにをくと云ことを作る歌也。

○『庭訓』は北畠の玄恵と云人の作れりと云々。比叡山の山徒（さんと）と云也。

山徒と云は、たとへばならの衆徒と同じこと也と云々。

○大納言の旅人と云人ありしと也。これは大職冠のをい也。（33 オ）

○宗〈左傍記「宋」〉 庵（べう）のこと

（※以下図）

東

四五六

広 洪 庵 所 北 七 門 南

三 二 一

○右七つの庵は先祖より我（親）に至て七代一二三の如くにならぶ。其忌（き）日に（33 ウ）

これを祭つる。八つは立つることなし。八つになれば広洪庵とて七つをひとつにつきこめ八代めをば別に一つ立る也。次第にいく代も如〔レ〕此〔シ〕。

○たとへば今日寺の卵塔（らんたふ）に似たりと也。但今日本に云卵塔はいかゞ。

唐のはとりのかいごのごとくに石にて切て立る也。無方塔とも云。卵の字はかいごと云字也。かいごのなりにするがゆへにらんたふと云如此。

日本に云卵塔は四十九院也。四十九院は——らんたふは——也。

両方のふくらの内をばちぶらと云也。

○小鼓の筒の中のほそき所をじよこと云也。（34 オ）

○東福寺は九条の関白殿の御建立なりと云。光明峯寺（くわうみやうぶぢ）殿とも云ける也。

奈良の大仏へ光明峯寺殿夫婦御まいりの時、彼

光明峯寺殿の御内（みだい）さまを内（ない）ぢんへ入れざりしに口をしくおぼし

めす由をほせけるに、関白殿きこしめして、大仏ほどこそならずともとて

たてられける寺なり。東大寺の東の字と興福寺の福の字

をとりて東福寺と云。たちはじまりて此方式百四五十にも

なると云々。但元和二年まで。

○源氏頼朝の跡たゆるしさいあり。よりともの子はたゞ二人也。兄は頼家、弟は実朝也。此実朝は日本一の歌の上手なり。しかれば京より

鎌倉へ綸旨（りんじ）をくだされけるは、右大臣にすべしとあり。其時家の子

とり##してかけるは、「いかゞよりともの家はじまりて弟の身

としてはいかゞ御分別」と申ければ、「今まで我が家になきことを

試し初て右大臣になるこそ目出けれ。たとへば実朝こそ

天命つくべけれ、家の名也」とて同心せず。都綸旨を（34 ウ）

いたゞかれけるに付て、つね家宿所はいかゞとて、若宮の
はいでんにていたゞかれけるに定りけり。若宮きせんの中より
悪禪師公暁と云はより家の子也。実朝は頼家のかたきなれば、
をやのかたきとて、をぢなるに、彼若宮にてひと刀にてうち
けり。その時はのがれて、伊豆の国修禪寺（しゆぜんぢ）にてうたれたまいけり。
公暁禪師とも云。

○頼朝の筋は三代にてたゆる也。兄弟の子ばかりなりしに、あにのより家はちとたはけ
けれども世をつがせけるに弟の実朝きようなればとて、あにをひきの藤四郎などゝ
云もの大將としてころしける。ころされたまふより家の子の公暁は若宮の
別当なりしが、むねんにをもちて彼綸旨（りんじ）をいたゞき給ふ時、禪師
衣の下よりつるぎをもてうちけると云々。

○卒都婆小町のうたいにうたう、えんえんたりしさうがもとうたう、かた言（こと）也。
えんてん也。同

えてんと云はうつくしまゆと云こと也。えんてんと云ことばかりをうつくしきとはい
はず。えんてんたりしさうがと云こそ右に云（いう）うつくしきとの心なり。しかればさ
うがは両の

まゆなり。えんてんと云はしさいなし。まゆのうつくしきことをいはんためのことばなり。
唐の

ことばなり。たとへば日本の歌に枕ことばと云ことあり。枕ことばのごとし。えんえ（て）
んさうがの文字如〔レ〕此。 宛転双蛾（えんてんさうが）
蛾と云虫あり。まゆちとあかくうつくしき虫なり。たとへば蝶（てう）などのごとくなる
虫と

云。しろくくろくまゆはあかくまだらなる虫と云なり。うたいにえんえんたりし
さうがもえんざんの色と有、かたことなり。えんてんたり也。さうがも遠山の
色をうしなうなり。（35 才）

○簑雪（させつ）と云は硯の名也。日本の名物也。たかき硯なり。三百貫にうりかうと云
々。

硯の海の上の所に少白き石あり、其下になんぎやうあくかさを半分
ひろげかけてすくみすがたにて居けると也。たとへば雪の降をいといたる
心なるべしとのこと、二条の太閤と云人の硯也。又云、紫硯にてはなし。
つねの硯也。ある時茶がまのふたをきにしてんげり。ちやがまのふたをきには秀吉公の
させられけると也。今は秀頼様に有之。

○〈尾州の〉熱田は楊貴妃也。源大夫と云て末社あり。そさのをのみことのしうと也。そ
さのをの

文字是れなり。素盞雄命（そさのをのみこと）。日向国よりのぼる八雲の劔に付て
のぼりし人也。

○八雲の劔を草なぎの劔と云は、日本武尊（やまとたけのみこと）関東をたいじの時、伊
勢の国

より彼劔をかりて行ける。それまではいせにありけると云々。

其時伊豆の国にてやまとだけのみことをむさし野にてやきころさんと

しける所に彼つるぎを以てあたりをやきはらふ所をきりたまふに一里
〈頭注「○草薙（くさなぎ）」〉四方の草かれければ、それより草なぎの劔と云と也。（35
ウ）

○出雲国の八つかしらの大蛇（だいじや）〈左傍記「をろち」〉のわざをなして人を取り
くいける。そのとられしものゝをやは
てなづち、あしなづちと云と云々。七人のむすめを六人とられ、今一人也。其
子一人をふうふの中（なか）に置、今ぞ++となげく時、彼そさのをのみこと
大蛇（だいじや）〈左傍記「をろち」〉をころさんとて酒をとゝのへ、大きな酒舟を八
（や）つこしらへて、其上に

たなをつくり女を上を置、下の酒に彼一人のむすめのかげをうつし
置玉ふに、あんのごとく彼大蛇来り、酒の内に八つのかしらを入れて
ひた++のみけるに、よいふして前後となき折ふし御たいぢあり。
八つの尾の内ひとつきれざりしに、たちは（わ）り見玉ふに、ひとつのけんあり。
むかし天上より此地にふり下りしけん、なにとなく見えざりしは
此大蛇くいけるよとのことにて、則天照大神へつかはされける。
其時彼源大夫劔に付てのぼりける人也。

○八雲立出雲八重がきつまごめに八重がきつくるその八重がきを
此歌は素盞（そさ）の雄（を）の命（みこと）の御歌なり。此時より歌の卅一字と
云ことはじまれり。其まへは数も不定によみけるに、此時より歌の
すがたがましきと云々。今の卅一字此時よりはじまると云々。（36 オ）

○迷故（めいこ）三界城 悟故（ごご）十方空 本来無東西 何処有（かしよう）南北

○世間にひとりとしまる者あらばもし我かはと身をやたのまん

○さつまがた奥のこじまに我ありとおやにはつけよ八重のしほ風 康頼入道

此歌は康頼ながされてそとばに書て海にながしける時の歌也。

○としごろあひなれし女、卯月廿五日の朝にはかにはかなく

なり、つれ##とこもりゐぬるに、初七日にあたりける日、

かれが宗旨の名号を句の頭にすへてうき

ことをかきながしぬる 法師宗由

○ながらへて有ともあらん齡もて世を卯花の露ときえぬる（36 ウ）

○むかしより誰かはひとりとゝまるとおもひながらも名残なしやは

○あり明の入かたにしもさそはれてゆく身のすゑはたのもしき哉

○みそめつる昔おもふも夢の世に今のわかれもうつつゝならなむ

○たれをさき誰をあとしもちぎらぬにはかなき道になどいそぐらん

○ふり初し五月雨こそはわが袖あはれそへつゝなをしぼりぬれ

慶長十九年五月朔にしるしぬる

右の六首の歌、彼億当老の内儀、卯月廿五日の朝、ひごろ自病にちのみちを
やみたまいけるに、ちのみちにてはなく、俄に右がごとく廿五日の朝死去し給ふ時、なげ
きのあまりにや、よみはんべりける。宗由は億当の連歌の名なり。

○あながちに待となけれどほとゝぎす声聞程はこもる山かな

是は億当老の夢想なり。右の夢想に少もかはらずして、高野にふと

のぼり、夏中は仕合よく有しとなり。(37 才)

○生飯（さんばん）と云は飯（めし）をくう時、折敷の前にすこしをく。此心は仏のめしを鬼がとりくいける時、七（なゝ）はし

半とらすべきとのやくそくなり。然るに依、今の世に至て増法師などの飯（めし）をくいける時少はくるもの也。

則生飯（さんばん）と云。さんばんの字右のごとし。

○古文のこと

蝌蚪（くわと）の文 蚯蚓（きういん）の文 蠹葉（とよう）の文

○法然上人三枚起請

○道俗等おもふべし、我身にはかしこき事はひとつもなし。仏の願によらずば、かゝるあさましきものゝ往生の大事をとくべしやと思ひてあみだ仏の悲願をあふぎ、他力をたのみて名号をひまなくとなふ

べきなり。是を本願たのむといふなり。すべてほとけたすけたまへと

思ひて名号をととなふるにすぎたる事はなきなり。此外に

此外に（ママ）よしとおもふも憍慢（きやうまん）の心なり。凡ほとけをたのむと云は心の内の観念にもあらず、たゞ名号をととなふを即本願た

のむとは云なり。念仏の行は観念にとゞまる事なかれと思

はゞやがてこゑ出して唱ふべきなり。称名の外は

決定往生の正因なし。称名の外には決定往生

の正行なし。称名の外には決定往生の正業なし。称名の（37 ウ）

外には決定往生の観念なし。称名の外には決定往生

の智恵（ちえ）なし。称名の外には決定往生の三心なし。称名の

外には決定往生の四修なし。五念も称名の外には

なし。仏の本願も称名なり。本願とす。厭離穢土（えんりえど）の

心も称名の内にあり。法蔵菩薩の名の他力本願の故に

弥陀如来の自在神力と億し奉るべし。若是より

奥ふかき事を存候はゞ、日本国六十余州の大小神

罰を蒙り、来世には弥陀の四十八願に漏て無限地獄に

墮べし。(38 才)

真（しん）出格（しゅつかく）道人拝〔して〕賛〔す〕

為〔たりノ二〕人〔の〕耳（かん）露（ろ）門〔一〕

現（げん）〔すノ二〕自在直指（ぢきし）〔をノ一〕

論〔ずノ二〕縦横（ぢうはう）与奪（よだつ）〔を〕

不識有〔てかノレ〕誰（れ）対〔へん〕

口（ち）無言〔にして〕廊（くわい）然〔たり〕

須弥突（とつ）〔二〕出（しゅつす）剣（けん）〔をノ一〕

恵信（えしん心）は大和国常盤（ときは）と云在所の人なり。高取のすこしひがしに当ると云々。其後ひへの山にのぼり、山一番の智者たりしに、道心をこし、其後安楽と云所に引こもり、住す。あねに安養

のあまとてありしに、大和に御座せばけうげなどならぬとて
よび越て、北野と云所にをき玉ひける。よかはの近所と云。
しかれば恵信道心はしさいあり。だんなあんのかくちやうと云人（38 ウ）
と法文のみしてより道をこると云々。然ば
檀那院（だんないん）の覚超（かくちやう）と云も右如〔レ〕申大智
識也。尤恵心は本名を源信（げんしん）と云。恵心院と云寺の院号たりしに依
て恵心と云々。

○それとなく春は木末の桜哉 億当

○み山木のその木末ともわかざりし桜は花にあらわれにけり 此歌の
ころなるべしと云々。

○消ても思ひつきん物かわ

○さき出けん花待枝の雪おれて

○やどはあれて花の色のみ深み草

○ねこもやもとのぬしをしるらん（39 オ）

○五十鈴川空やまだきにに秋の風したつ岩ねの松の夕かげ

○はるかなるわしの高根の雲井よりかげやわらぐる月よみの森

○雲よりも上をばしらずふじの根の目に見る程は高き山かな 定家

○よの山の高根++をつたへ来てふじのすそ野にかゝる白雲 家隆

此二首は定と隆とふじの山の高さをよみくらべけると也。

但定の歌まされりと云々。

○孟中季のこと 孟中季と云は孟春、中春、季晴、四季

ともに同じ。但、正月は孟、二月は中、三月は季也と云々。（39 ウ）

○京大文字屋の卅一のぼくせき金子千三百枚の道具也。

世路（ろ）多〔し／二〕巖嶮（きけん）〔一〕 信〔レ〕天〔を〕行直道

無〔し／三〕思〔ふに〕不〔と云こと／二〕研（けん）窮（きう）〔一〕 休〔めて／レ〕

問（とうことを）馬牛風（ぎうふう）

平生（い）見（まみえて）〔二〕諸老（う）〔に／一〕 日本（ん）照禪者（せうぜんし
や）

今日（ち）自（ら）成〔る／レ〕翁（うと） 欲〔レ〕得〔んと／二〕数字〔に／一〕経
（たゞちに）

認（とめて）〔レ〕字眼（こ）猶綻〔ろび〕 以〔て〕述〔レ〕裏〔を〕贈〔る／レ〕之
〔を〕

駐〔めて／レ〕譚（たんを）耳尚聾（れうず）

虚堂叟知愚書す（40 オ）

○屏風に色紙短冊のをし用のこと 丁半角とをすもの也。

如此して○仁枚目をば半角丁○三角丁半

○四丁半角 ○五半角丁

○六角丁半と六枚までの也。

○短冊は一寸八分にするもの也。但今は多分七分にすると也。

短冊も色紙と同。丁半角、半角丁、

角丁半とかへてをす也。

何も如此也。

たんぢやくも同。△文字は〈しん、さう、ぎやう、是も／同じ心ろ也。〉

(※図)

色紙／丁 色紙／半 色紙／甲

短冊／半 角／半 短冊 丁／角

色 短冊ともに同

角 丁 半

(※図終り)

○柔(じう)〈左傍記「やはらか」〉 = {岡・寸}(がう)〈左傍記「こはし」〉強(きやう)〈左傍記「つよし」〉弱(じやく)〈左傍記「よはし」〉(40 ウ)

○論語の聞書

五常

○仁 きはまるをあはれみ、人のうれいをたすくる、ひとのためによきやうにするを仁と云か。

但ある人に酸をもらいに行たりしに、其隣にてもらひてくれけるに、孔子に仁かとゝへばいやそれはへつらへると也。『論語』には「す」の字「醯」とあり。

○義

○礼

○智とはもつとも智恵のこと也。

○信

右五常の内にいづれよりも仁のみちなりがたしと云。しかるに依てまづくちに仁を云けると也。

○夫子と云も孔子のこと也。

○曾子を「さうし」とすむがよしと也。「ざうし」とにごるもあれども、漢の代に曹(ざう)子と云ものあり。是にまぎ

るゝにより、「そうし」とすむがよしと云々。但、「ぞう」とにごりてもくるしからず。

○参(しん)と云も曾子がこと也。曾参とも云けると也。

○賜(し)と云は子貢がこと也。(41 オ)

○序の内に玄成と云ものあり。吾斗賢が子なり。

○千乗の図と云は千乗の図と云て車を千ぢやうあぐる図あり。是を云也。

○定公と云は魯の国の王也。哀公は定公の子也。臣下に季子と云ものあり。

第一の臣下也。三官と云て兄弟三人ありし也。但後はみなほろびぬ。

○孔子は初めは魯の国の人也。後に齊の国へ出にけり。しかるに依て『論語』の序に魯論あり、齊論ありと云こと、魯の国より齊の国へ来るとのかはりあり。

○八佾(はついつ)と云は舞のこと也。八佾の舞と云て大きな舞あり。はつぱ六十四にて六十四人

してとりをこなふ舞也。

○大廟と云は、人死てすつるはかのこと也。墓（む）所のこと也。（41 ウ）

○温（あたゝか）良（うやまふ）恭（うや＋＋しふ）儉（をこたる）讓（ゆづる）

○使（しめむ）〔二〕驕（をごり）且（かつ）吝（やぶさかなら）〔一〕と云こと 泰伯の論にあり。やぶさかならしめばと云は、しはきことを云也。

○然なりと云ことは、がつてんをしたりと云心也。もつともと云心にはあらず。たゞなか＋＋心得たりと云心なり。

○陽貨の論に曰

○女子と小人とは為〔レ〕難〔レ〕養〔ひ〕近〔づくるときは〕則不遜〔なり〕と云心は如師

不遜の遜の字は心しりぞくと云心也。則しりぞくの字也。近くときには不遜となり。

○先進の論に曰

德行には顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。言語には宰我、子貢。（42 オ）

政事には冉有、季路。文学には子游、子夏。以上拾人也。此十人を則孔子の十哲（てつ）の弟子と云。三千人のかしらと云。

○德行の心はふくとくの徳にはあらず。たゞ人五常の徳を云とのこと也。

○言語の心はがくもんの内の講釈（こうしやく）するに、もの云ことの上手たるに依て言語にはと云たり。

○政事の心はたゞまつりごとをよくたゞさずすること也。

○文学の心は学文のこと也。

○剛毅木訥の訥の字、どもりのこと也。（42 ウ）

○舜若（しや）多〔し／レ〕神知〔るや／レ〕我〔を〕不 奪人奪

鏡（ママ）〔を〕没蹤由（もつせうゆ）〈左傍記「あとなしの心也」〉 須（しゆ）弥百億
脚跟下 一休

直〔に〕踏〔む／二〕宗門最上頭〔を／一〕

一休叟（さう）宗順（43 オ）

今度為〔して／二〕片桐市正〔を／一〕条数申越候処、一円御同心無〔レ〕之、剩日本相〔二〕拘諸牢人〔を／一〕其〔二〕聞籠城〔の〕用意〔一〕就〔レ〕中先年秀頼為〔二〕下知〔一〕

石田治部少輔逆心の砌〔り〕其注進聞届、從〔二〕関東〔一〕不〔レ〕移〔二〕日時〔一〕馳上〔り〕美濃〔の〕国青野合戦討勝、頗北国西国諸軍勢

追払遂〔げ／二〕本望〔一〕尔耳。生〔二〕捕石田治少安国寺等〔一〕渡〔二〕京都〔一〕家康雪〔二〕会稽の恥辱〔を／一〕。只知秀頼可討果処、源

太閤報恩其上以為縁者奉〔二〕命助置〔一〕候処、返て企〔二〕（43 ウ）

謀叛〔一〕如螳螂以〔レ〕斬向流車。仮令一城張鉄網学〔二〕

唐〔の〕寒（ママ）陽宮〔一〕雖〔レ〕籠噓馬堂及出陣者則時踏

落秀頼首切事不可踵順。恐惶謹言

〈津国大坂の城主〉秀頼公参 〈武蔵国江戸の將軍のこと〉家康判

御返事に

芳墨令披見候。被仰越難題の趣聞
届候。剩可承引事無之、然て太閤秀頼及
十五歳可相渡天下旨、日本諸侍以数返起請申
候事不可有紛処、先年石田治部少一身才覚以雖
覆天下、依不運不遂本望、其次〔に〕国々乍云異見
秀頼逆心の様に只可承候。何我等為幼少知別心哉。併
家康表裏侍前代不聞候。何如太閤忘報恩
秀頼に不充行一ヶ国孤成事不及是非〔に〕、為一国
一城日本引請腹切事可為骸上恥辱（面目）。若
関白叶天道正理、有仏神三宝納受者、
將軍父子露命危者也。尚期一戦節。恐惶謹言

大坂の城主 秀頼

江戸の將軍の事 松平家康公（44 ウ）

○久弍本の弟子松本右兵衛殿の御葉せんやくの合葉の目れいてんぐに
三分五りんあり。但一包の両目也。三分五りん。（45 オ）

○十方四（至）聖

○六道四生 地獄 餓鬼 畜生 修羅 人道 天道 声聞 縁覚 菩薩 仏果

○博奕の部

○雙六（すぐろく）是を博と云。 ○碁（ご）是を奕と云。此二勝負の親也と云。

○＝ {竹冠・日・大・土}（さい） 采（同） 筒 調度 局 象碁（しやうぎ）

○碁三十二手の名

打（うつ） 殺（ころす） 閃（きる） 粘（つぐ） 榦（うちやう） 約（をさうる）
（45 ウ）

紳（をしあへる） 僅（さしいる） 飛（とぶ） 開（とをる） 頂（そう） 尖（ゆる
とにす）

断（たちきる） ＝ {虚・見}（のぞく） 立（たちへだつる） ＝ {行構・コ}（のぶ
る） 点（なかち） 捺（からむ）

聚（めなる） 夾（はさむ） 跨（またぐ） ＝ {山・石・辛}（うつてとる） 撈（せ
ゝる） 刺（さしよる）

勤（からむ） 征（しちやう） 劫（こう） 持（ぢ） 槃（たすくる） 鬆（したゝ
る）

撲（うちかう）

花ぞ見る道のしば草かげ分て吉野ゝ宮の春の明ぼの

此歌の心はその字にあり。是は大和の吉野にあらず。丹後の吉野也。

丹後の吉野はさびしきなり。其ゆへに道のしばくさかげ分て

吉野ゝ宮の春の明ぼの。道の草かげ分てとはさび

しき也。「花ぞ」といふ「ぞ」の字はくさを花と見る也。（46 オ）

そうじて吉野といふ所、日本に三所有り。大和、丹後、武蔵に
あり。

みよしのゝたのもの雁のひたぶるに君がかたにぞよるとなくなり

此歌は武蔵のよしのなり。

○緑林（りよくりん）〈左傍記「みどりのはやし」〉白浪 是に心あり。緑林も白浪も
みどりのはやし

しらなみなり いづれもぬす人の事なり。昔唐よりも

日本へ大ぬす人渡りし事有。大和国立田山に籠りぬ。

其故に古歌に ○風吹ば奥津しらなみ立田山

夜半かや君がひとり行らんと

いふ歌もなり乎。かわちへかよひしにみちもきづかひなりと

いふ心なり。其ゆへに立田にぬす人付合也。（46 ウ）

○狂言書

○阿釈（か）妙観地白熊（ゆう）日羽獄（ごく）存（ぞん）

或女人出家のため、山寺へ上りて髪をそりてけり。出家の師「法名をつけま

いらせん」といへば、「法名は先より案じてつきて候也」といふ。「いかにつかせ

玉ひて候や」といへば、「仏と云、神と云、我信じ憑みまいらせて候が

なつかしく捨てたく候まゝ、彼御名の文字をひとつづゝとりてあつ

め阿釈妙観地白熊日羽獄存と付て候」と云けるは、誠に長き名也。

阿弥陀、釈迦、妙法、観音、地藏、白山、熊野、羽黒、日吉、御

獄の文字を一つづゝつきけるなるべし。『石集』八（47 オ）

○乳腫

此上に龍鬼石、此三つの文字を書すべし。

○〈兵太伝〉虫くいばの妙薬、其人の痛む方の耳に、こうつけどをこまかにして、ごまの
油にてゆるくねりて露程入よ。

同ごまの油のなき時と、是ぞごまの油と云とも不審ならば、ごまを少ぬのにつゝみて
この上に置いて油をしきるべし。

○東方朔九千歳の事

一、子の年は、をよそ六十日ひでり。二月大水。六月かんだち。七月

八月九月大風。霜月水。麦はろし。上畠吉。天下

しづまらず。ひへ悪。いね吉。人死す。南へ舟乗て利あり。

一、うし（丑）の年は、正月ひでり。但百廿日ひでり。五月水。

六月大風。下畠五ごく吉。人をどろく。天下静也。

いね悪。もがさはやる。麦吉。しほたかし。大雪降。油（47 ウ）

やすし。

一、寅の年は、二月三月雨降。三月の末にすこしてゐる。五月

水。上畠下畠吉。大きにれきれいはやるべし。牛馬

死す。ひともしくふべからず。

一、卯の年は、正月雨降。五月六月水。こがい吉。七月

大風。中畠下畠吉。おくて悪。拾二月病あり。

人死す。やみ目はやる。雉子くふべからず。

一、辰の年は、正月朔日より雨降。廿日かんばんち。病人

をほし。三月水。五月九月霜月人おほく死す。

七月八月大風。天下しづまらず。麦よし。

しほやすし。米たかし。さい++いかづち

なるべし。

一、巳の年は、正月雨ふる。二月水。三月四月五月（48 才）

しづかにして静也。六月てる。七月八月水。霜月

十二月雨降。上畠下畠よし。つねに少病人あり。

一、午の年は、正月雨ふる。三月卯月六月水。

九月大風。二月五月病人あり、雨ふる。麦悪。

南にふしぎのにじあるべし。遠舟に

のるべからず。

一、未の年は、三月雨降。南風吹。いねあしゝ。麦

少よし。大豆よし。六月てる、天下二人の

あらそひしておさまらず。大病あり。こがい

よし。

一、申の年は、じき物あり。天下をさまらず。正月二月

三月四月雨ふる。七月少てる。八月

大風。かんだちなり。十一月十二月てる。（48 ウ）

今年の間引物よし。

一、酉の年は、正月六月病人あり。三月四月雨降。

八月てる。下畠わろし。大雪ふる。

一、戌の年は、正月水。病人あり。おどろく事あり。

五月六月水。上畠中畠吉。下畠悪し。

一、亥の年は、じきもの多し。正月水。二月雨降。

上畠中畠吉。下畠わろし。病人あり。

多死す。七月大風。十二月いづれも++わろし。

天下静也。五こくよし。（49 才）

○徳人湯

○畜生 五才 ○才覚 三才 ○機根 仁才 ○虚言 一才

○数寄 十才

談合天目一ぱい半、まがり二つき、糸こきつ

入之、八ふんに煎ずべし。

○きんもつ

○酒肴（さかな） ○衣装 ○道具 ○普請 ○儀理 ○外聞

○慈愛 ○なさけ ○油断

○くるしからぬ物

たはけ〈少〉 盗人〈但よく色をかへてすべし〉

○よくしん にてもやきてもなまにてもよし。（49 ウ）

（※上部に月の図）

正月／二月／三月／四月／五月／六月

其月のまるを朔日に当て則其日数を
かぞへべし

たとえば此二月の丸を二月の朔日にして、二月六日は
皆しろくて上吉と心得べし。二月三日は皆黒くて悪と
心得べし。

七月より又跡へもどつてかぞへべし。幾度も同じ。(50 才)

法念二枚起請の和

もろこし我朝にもろ++の下戸たちの——るさかなにもあらず。又かちんをくひて
茶を吞て吞める酒にもあらず——うたがひなく往生するぞと
思ひとりて、一盃吞めるより外の子細候わず。但三献四種の
肴など申事の候ば、酒宴も決定してめづらしき酒肴
もとめたきと思ふ——候也。此外に——
大盃は二尊の——本性を失候。——
一文不智のぐどん身にして下戸にも常に振舞せて、只
一向に酒を吞べし。

〈たこのさん〉

咄々(とつ++) 禪門(ぜんもん) 手転(うたゝ) 多〔し〕 絞(しぼり)〔二〕 見〔よ〕
油酢(ゆず)〔一〕 左州〔の〕 一味天然(ねん) 別〔なり〕 一休(50 ウ)

○唐には達磨の跡を伝てつぐに、達磨より十八代めに北宗神秀ならんとて著語に此菩提本
是樹明鐘在台時々勤払拭莫令惹塵埃と云ことをしてかんばんに書し也。

〈著語〉

菩提本(と) 是(れ) 樹(き) 明鐘亦(此亦字又かと師の御申) 在〔り／レ〕 台〔に〕
時々勤〔て〕 払拭〔せよ〕 莫(なかれ)〔レ〕 令(しむること)〔レ〕 惹(ひかし)〔二〕
塵埃(ぢんかい) 〈左傍記「ちり ちり」〉〔を／一〕 神秀(ぢんしう)

○北宗神秀右の著語をかんばんに書しに、慧能(えなふ) 禪師則彼かんばんを拭、此菩提
本非明鏡亦

無台 本来無一物 何所有塵埃と云語を書付る也。これ二つの語に付て
神秀は本五祖の弘忍禪師の弟子成しが得語に付て後は六祖のえなふ禪師の
一の弟子になりしと云々。

○菩提本(と) 非〔ず／レ〕 樹〔に〕 明鏡亦無〔し／レ〕 台〔に〕

本来無(む) 一物 何〔れの〕 所〔にか〕 有〔んや／二〕 塵埃(ぢんかい)〔一〕 六祖
○右如申六祖と云て達磨より六代めをつぐ也。五代めを弘忍禪師と云しに、弘忍の一の弟
子に

北宗神秀と人ありしに、尤学者たり。則此神秀に世を伝しつがせんとて、とり++なりし
に、著語

右の菩提本是樹をかんばんに書てきやくでんにかけしに、慧能(えなう) 禪師は其比は五
代の弘忍禪

師の庭に米をつみ庭草などを取て居たりし。彼かんばんををし拭、菩提本非樹の(51 才)
語を書たりしに、五祖弘忍禪師是を見て慧能禪師に六祖をつがせんとて則
達磨のはちと衣を五代めまでつたへたるを、彼六祖にわたされしに、神秀の弟子どもやる

ま

じきとてうばわんとせしに、とつてにげゝるに、をいつけてとらんとせしに、せんかたなさに岩の上に置

けるに、彼をわへける弟子ども則衣をとらんとせしに、衣、はち、岩にとり付とれざりけると云。

○菩提本是樹 明鏡亦在台と云は、菩提はうへ木のごとし也。明鏡亦有台〔に〕とは、あきらかにかがみにかけたると也。

○時々勤払拭とは、時々は無油断とぎみがくべしと云こと也。

○莫令惹塵埃（ぢんかい）とは、くそあくたのかゝらぬごとくにせよとのこと也。

○菩提本非樹とは、ぼだいはうへきにはあらずと也。

○明鏡亦無台とは、明かなるかゞみはうてなにあらずと也。

○本来無一物とは、ひとつもなきと也。

○何所有〔らん／二〕塵埃（ぢんかい）〔一〕とは、いづくにかちりあるかゞみのちりとぎみがくなどゝは、あさきとのこと、

本来無一物にて、なにもなくば、いづれのところにかぢんかいあれと也。（51 ウ）

うたいのそとば小町にうたうは、菩提本非樹明鏡亦無台これをうたうなり。

○六祖のこと

初祖 達磨大師

二祖 慧可大師

三祖 僧璨大師

四祖 道信禪師

五祖 弘忍禪師

六祖 慧能禪師

これまでなり。七祖と云ことはなし。

○西天四七 唐土二三と云ことは、西天〈とは天竺のこと也。釈迦より達磨までは／廿八代なると也。四七二十八代也。〉

唐土二三とは、唐土はからのこと也。〈二三は三つを二つ合て十八也。二つづゝ三つも／同六つ也。則六祖のこと也と云々。〉

○六祖になりそこなはれし神秀の弟子として、嵩山普寂と嵩陽〈大／恵〉〈左傍記「大恵事見史略」〉一行

此兩人也。（52 才）

心

心田心 田を中に四方に心をめぐらせばいづくをみるをももひ成けり

心

〈『難經』の序〉

○新刊勿聴子 新刊はあたらしくばんきをゝこすとのこと也。

勿聴子は名也。百五六拾になる人也。明朝（みんてう）の時の人。

○廬国秦越人 廬国は廬の国の人なるに依てろこくと云。秦はしんの

世の人なり。越人と勿聴子との間、凡千九百年
程にもなる也。越人とは扁鵲（へんじやく）がこと也。

○龍峯勿聴子 龍峰は処の名也。

○熊宗立俗解 熊は名字也。宗立は名也。勿聴子がこと也。又俗解
と云心は、俗人にて此註をすることいかゞと云ひげのことば也。

『察病指南』の序

○七月既望（きばう）〔に〕 禱〔て／レ〕 雨〔を〕 獲（え）〔たり／レ〕 応〔を〕 翌日
史（さうし） 迎（をくり）〔二〕 詩筒（しとう）〔一〕 来〔る〕

睨（げい）〔して〕 視（し）〔るに／レ〕 之〔を〕 乃（い） 峴山〔の〕 施（し） 君為〔た
り／二〕 喜雨〔の〕 作〔を／一〕（52 ウ）

と云ことは

○年老〔て〕 紅顔尽〔ぬ〕

秋来白髪新〔なり〕

今朝向〔て／レ〕 鏡看〔る〕

疑（うたがうらくは） 是〔れ〕 逢（あふかと）〔二〕 別人〔に／一〕

卅二顔回（がんくわい）二毛の年也

此顔回は卅二のとし死す。又廿八のとしよりしらが生ずと云々。

右菅の奎大夫と云仁の作也。筑紫の仁也。但、図書殿内の（53 才）

ト庵などゝ知音の人也。

○折一合と云は廿五合を一合と云が本也。今の世に云は折一つを
一合と云。くるしからず。

○弓一張と云は本は七張を一張と云もの也。

○小笠原殿は弓馬二色斗なり。しつけの家にはなし。

○伊勢守殿と云が諸しつけの家也。

○小笠原の家は頼朝の時よりある家也。

○吉田の家はむかしからなきと也。（53 ウ）

○応神天皇よりものを書と云事はじまれりと云々。

○連歌と云事は、景行十二代めよりはじまれりと云。但、垂仁（すいじん）十一代とも云。

しかれども、此時はなにとも

しれぬ事にて、式目などしてしたる連歌にもあらず、むさ++としたる事と云。其後、
応安（あうあん）四年に式目出来て連歌と云事はじまると云。

○古今 新古今 続古今 新続古今 と云て古今も四色あり。しかれば古今をあみ

はじむる時に、きのとのうしと年につくりはじめけるに、

其後三度ながらもきのとのうしのとしにをもひよらずに

あみけるに、三度ともにあたると云々。此『新続古今』は、

飛鳥殿のうけたまはりにてあみたまふと也。今までに

百七十にあたるか。（54 才）

○へきたいと云て伊勢せんぐうの時、古宮より新宮へ神うつしの時、道に
きぬを引ことあり。これを云。

○五十鈴川空やまだきに秋の風したついはねの松の夕かげ 西行
○はるかなるわしの高ねの雲井よりかげやわらぐる月よみの森 同
○ふかく入て神路のをくを尋ぬれば又上もなき峰のまつ風 後京極のせつしやう

○遷宮の事

△七夕に人にをくれし年慶十九の七月七日に
○今とても衣はかさじ七夕の我れつまなしといみやしぬらん 宗由
七夕に衣はぬぎてかすべきもゆゝしとや見んすみぞめの袖
けふをしも雨やさわぐらん七夕の心さはぎをいかゞさだむる 立安
としごとにあふとはすれど七夕のぬる夜の数ぞすくなかりける
天川かわべすゞしき七夕に扇の風をなをやかさまし
たなばたのこゝろもいかにさわぐらんあはまし暮をよそにながめて
七夕の露とるけふの玉札にのきばのかぢにもとつ葉もなし (54 ウ)
七夕の心もいかにさわぐらんぬる夜の空をよそにながめて
○百五けんの事 ○七つづゝの時はあまる石一つを十五にあたる○三つづゝの時はあまる
石一つを七十にあたる
○五つづゝの時はあまる石一つを廿一にあたる。千にても五十、百にても、
たとへば人に石を七つより内はならず候。七つより上は、まして十、二十、三十でも
もたせて、初に七つづゝひき++して、あまる石一つを十五にあてゝ、さん用するなり。
二番めに五つづゝひき++して、あまる石を一つを仁十一にあてて、さん用するなり。
三番めに三つづゝひき++して、あまる石を一つを七十にあてて、さん用するなり。
さて、合て何ほどあるとも百五けんとして、百五すてゝ、残る所の石数ほど
人のもちきたる石有物なれば、残る石をみて、是ほど有べしと
申べし。たとへば合て何ほどあるを見る時、仁百三百ある事もあり。
其時は百五づゝ取なれば、仁百にあまらば、百五づゝ二つ、仁百十を
とりて、残る所を申べし。それよりもあまらば、百五づゝ三つなれば、
三百十五すてゝ残る所を申べし。
但百より上は不叶か。(55 オ)

酒海士

ひとつの酒つき、手にもちて、彼酒べやにとび入ば、空も
ひとつに酒の波、肴の波をしのぎつゝ、酒まん++と分
入て、げこかと見れどもそこもなく、あだ手もをかぬ酒のみ
の、そもちんべんはいざしらず、のみえん事は不定也。
かくて、酒べやにいたりて、酒つぽをみれば、其数三百
ばかりすへ置、かななべを手にもち、こをけをさげ
て、酒ともだち、八はいのみをはじめたり。其外、悪酒、に
ごり酒のみ、えがたしや。我こころさずがおく殿の古酒の
かたぞ恋しきあのへやのあなたに肴やあるらん、
さけともだちやおわすらん。さるにても、此まゝにのまで
はてなん、かなしさよと、なみだぐみてたちしが、又
思ひきつて手を合、南無やあたご、きの宮、神も酒

をばゆるさせたびたまへとて、大さか月をひたいに（55 ウ）
 あて、然さかつぼの中にとび入ば、左右へばつとぞ、の
 いたりなり。其隙にさかなをぬすみとつて、にげんと
 すれば、下戸衆おつかく。かねてたくみしことなれば、
 もちたるてうしをとりなをし、さか月すてゝぞ
 伏たりける。下戸衆のならひにす。酔狂（すいきやう）をいめばあたりて
 近付下戸衆なし。やくそくのでうしをうごかせば、
 ひと##よろこび引あげたり。下戸人々しらず。上戸は
 酒べやにうかみ出たり。あくさめ、二日酔を仕つた。
 ○伊勢の道者、文に土産（どさん）と云事を書す也。伊せにかぎらず、其所々の出来物を
 土産と云もの也。同右の土産を所宜（しよぎ）とも土宜（とぎ）とも云也。
 ○不〔レ〕知范蠡（はんれいが）舟能大（をゝいなる）載（のせ）得〔たり〕呉王一園〔の〕
 愁（うれい）。(56 オ)

是はたねをゝろすこと也。

正月 但なすび二月にもよし。同は正月末よし。五月にうへてよし。

二月 いもうへ候こと、但ひがんの内吉。

同もみたね 同ひがんの内。

なすびのへ 同五月によし。

ちしや 但正月もよし

三月 七月 にんにく
 但七月の末
 けし

四月 八月 からし
 な
 にんにく
 す作ること

五月 ごま きび
 ひへ さゝげ
 なすび あわ
 まめ 九月（56 ウ）

六月 十月 むぎ
 こむぎ

○酢のこと〈○米壹斗／こうじ貳升／水貳斗〉 但めしをすづくりとしてあたゝかに
 さてかめばたにこうじをふり、
 いかにも手ばやく押つけて水
 をなべぶたを置てそろ++と入べ
 し。さて水のうへにこうじを

ふりてよし。八月過にて作候は
水をすこしひかへてよし。

○かめのはたへ入べし
みりん一つ
さふ柿一つ
きじのはね
すみ

但是はと水也。もち〈と水多にても／くるしからず候。〉

○すたて〈○水 貳斗／○まめ 壺斗／○大むぎ 七升／○小むぎ 三升／○しほ 壺斗
／○こうじ 五升〉

二番すたては

同

一番のからへ水と

しほと斗を一番の

半分入にて、卅日

斗にてすを立べし。(57 才)

○野馬台 宝誌(じ)和尚

始定〔む／二〕讓(じやう 壤)〔一〕天本 宗〔を〕始〔は〕功〔を／一レ〕元建(た
つ)〔二〕

終(じう)〔を／一〕臣君周(あまねく)〔二〕枝 祖(その)興(をこす)〔二〕和法
〔の〕主

谷(ゆく)孫〔に〕走(はしり)生〔て／一レ〕羽〔を〕 祭(さい)〔を〕成〔す〕

終〔りは〕事〔を／一〕衡(かう)

填(てん)田魚(ぎよ)鱠(くわい)翔(かける) 世(よ)代(かはる)〔二〕天工
〔に〕翼(よく)〔を／一〕

孫子動(うごき)戈(くわ)葛(かつの) 百(もゝ)国(こく)氏(し)右輔(ふ)

昌(さかなり)微(び)〔にして〕中〔ごろ〕干(かん)後 〈初△〉東海(とうか
い)姫(き)司為〔す／二〕

此姫の字は周の世の時の周の名字の字也。

たとへば日本にては平家、源氏、藤原(57 ウ)

などゝ同じ。

白失(うしない)〔レ〕水〔を〕寄(よす)〔二〕胡(こ) 〈終△〉空〔と〕為〔る〕

遂(ついに)国喧(かまいすし)〔二〕〈けんくわのごとを／かしましいと云こと／則け
んくわのけんの／文字也〉

龍游(をよびて)窘(きん)急(きうにして)城(せい)〔に／一〕 土〔と／二〕茫
(ぼう)茫(ぼう)〔として〕中〔に／一〕鼓(く)

牛喰(ざんす)〔二〕食(しよくす)〔二〕人〔に／一〕黄(くわう) 赤起(与)〔レ〕

丘〔レ〕青鐘

腸(ちやう)〔を／一〕鼠〔の〕黒(こく)代(かはつて)〔二〕鷄(けい) 流尽(畢)

後(蝸イ)猿(えん)外〔に／一〕

丹尽後在〔り／二〕三　王英（えい）称（せうず）〔二〕犬（けん）野
 水流天命公〔に／一〕　百雄（ゆう）〔と／一〕星（し）流〔れて〕飛〔ぶ／一〕
 号（ごう）〔して／二〕日本〔を／一〕為〔す／二〕倭国〔と／一〕（58才）
 一〇野馬台〔の〕詩〔は〕梁〔の〕宝誌和尚〔の〕所作也（り）。野馬〔とは〕者陽焰也
 （り）。台は謂〔ふ〕国〔を〕
 也（り）。言〔は〕倭国〔の〕人〔の〕道輕薄〔にして〕惟〔る〕在〔て〕而如〔し／レ〕
 亡。猶〔し〕如〔し／三〕陽焰起〔るが／二〕春
 台〔に／一〕。故〔に〕指〔して／二〕本朝〔を／一〕曰〔く／二〕野馬台（やまと）〔と
 ／一〕也。昔（し）宝誌和尚行道之日（とき）化女
 忽然〔として〕来〔る〕。与〔二〕和尚俱〔に〕語〔し〕給（恰）〔も〕如〔し／二〕旧
 識〔の／一〕。一女去〔り〕一女来〔る〕。君〔すること／レ〕此一千八
 人也（り）。皆言〔ふ／二〕其〔の〕本国之終始〔を／一〕。和尚怪〔む／レ〕之〔を〕。
 以〔て／二〕千八人〔の〕女〔を／一〕作〔る／二〕文
 字〔を／一〕。乃〔ち〕倭字〔なり〕。爰〔に〕知〔る〕是〔れ〕倭国〔の〕神也。和尚
 記〔して／二〕其〔の〕語、作〔て／二〕一十二韻〔一〕
 以〔て〕胎〔す／二〕将来〔に／一〕矣。嗚呼誌公〔は〕是〔れ〕觀音不〔レ〕知自（み）
 作〔二〕和国〔の〕識〔を／一〕乎。中
 古聖武皇帝〔の〕朝、吉備公入〔る／レ〕唐〔に〕。唐人以〔て／二〕其〔の〕国之識〔な
 るを／一〕出〔して／二〕野馬（58ウ）
 台〔の〕詩〔を／一〕使〔て／レ〕之〔レ〕読〔ま〕焉、而〔も〕為〔めに〕試〔む／二〕
 其〔の〕智力〔を／一〕。文字交錯〔して〕平直〔に〕
 不〔レ〕書〔レ〕之〔を〕。匪〔れば／二〕神助〔に／一〕不〔レ〕可〔レ〕読〔レ〕之
 〔を〕。於〔て／レ〕是〔に〕公默〔二〕祈〔す〕仏天及〔び〕本国〔の〕諸
 神〔に／一〕。俄〔に〕而有〔て〕蜘蛛〔一〕墮〔つ／二〕其（の）紙〔の〕上〔に／一〕。
 歩〔て〕曳〔て／レ〕絲〔を〕。公遂〔に〕認〔て／二〕其（の）跡〔を／一〕読〔むに
 ／レ〕之〔を〕、不〔レ〕謬〔ら／二〕一字〔を／一〕唐人称〔す／レ〕焉〔を〕。
 〇東海　本朝〔は〕后稷〔の〕之裔故〔に〕云〔二〕姬氏国〔一〕也。旧註誤〔りぬ〕矣。
 〇天工　人主代天工生民百代政出〔二〕王者〔一〕。
 〇扶翼　昔〔は〕神代天兒屋根命、天太王命、二人奉〔二〕　天照大神〔の〕勅〔を／
 一〕為〔二〕左
 右〔の〕扶翼〔一〕。然后神武皇帝東征天下一統彼〔の〕二神之孫天種
 子命、天富命、又為〔二〕左右〔の〕扶翼。其謂歟。（59才）
 〇衡主　謂〔は〕聖德太子衡山〔の〕惠思禪之後身也（り）。推古皇帝〔の〕朝為〔二〕
 摂政〔一〕始〔て〕定〔む／二〕冠位十二階〔を／一〕。
 〇本枝　謂〔二〕君臣〔一〕云々。聖德〔の〕孝治之後（ち）風雲際会不〔レ〕違（は）
 = {三水・専} 天之下率
 土之浜莫〔レ〕不〔二〕王土王臣〔に／一〕。
 〇谷填　魚膾天智皇子大友作〔レ〕乱、有〔二〕陵谷〔の〕変〔一〕。旧註誤〔ぬ〕矣。
 〇終成　慎〔レ〕終追〔レ〕遠莫〔レ〕善於〔二〕聖德〔一〕。
 〇葛後　葛謂〔二〕藤氏〔一〕也。神代天兒屋根命以来為〔二〕其〔の〕裔者（の）、為

〔二〕扶翼〔一〕

天根命以天智〔の〕朝〔の〕中臣鎌子〔の〕連討〔つを／二〕惠美押勝作〔すを／一〕レ
乱〔を〕云〔ふ〕。葛後

干戈連〔く〕旧註誤矣。

○中微 押勝以後藤氏不〔ること／レ〕振久矣。清和皇帝〔の〕朝、良房公奉〔て／二〕
文

徳皇帝之遺詔〔を／一〕為〔る／二〕摂政〔と／一〕。忠仁公是也。六来〔を〕子孫連綿
(59ウ)

仕〔す／二〕其〔の〕職〔に／一〕。其昌〔ること〕可〔レ〕知矣。

○白龍 白〔は〕庚〔へ〕竜〔は〕辰也。白竜孝謙皇帝也〔り〕。言〔は〕彼〔の〕女帝
庚辰〔の〕歳

誕生也。在位之日淫乱〔にして〕無〔レ〕度寵〔して／二〕弓削法師道鏡〔を／一〕大過
矣。故〔に〕九

族不〔レ〕親、諸臣無〔レ〕朝〔に〕、遂〔に〕失〔ふ／二〕宝位〔を／一〕。不〔レ〕
堪〔二〕其〔の〕窘急〔に／一〕而寄〔す／二〕身〔を〕於

城中〔に／一〕以〔て〕自護〔りぬ〕矣。

○黄鷄 指〔す／二〕平〔の〕将門〔を／一〕也。言〔は〕黄〔は〕己、鷄〔は〕酉也。

将門〔は〕己〔の〕酉歳生〔る〕大〔に〕作〔レ〕乱而略〔して／二〕東

八箇国〔を／一〕、以〔て〕自称〔す／レ〕王〔と〕。是〔れ〕代〔レ〕人食〔レ〕之謂
也〔り〕。

○黒鼠 謂〔す／二〕平相国清盛公〔を／一〕也。言〔は〕黒〔は〕壬、鼠〔は〕子也。

公生〔二〕於壬子〔の〕歳〔に／一〕太〔に〕乱〔る／二〕君〔の〕之

礼〔を〕而不〔レ〕奉〔二〕祭祠〔を／一〕喰〔ふ／二〕其間〔を／一〕也。

○丹水 謂〔ふ／二〕天子〔の〕徳沢〔を／一〕也。安徳門后王道大襲作徳潤遂〔に〕涸
〔る〕。然〔も〕政〔こと〕出〔つ／二〕於

諸侯〔一〕。旧註誤〔ぬ〕矣。(60オ)

○天命 後鳥羽〔の〕朝頼朝〔の〕朝臣討〔て／二〕平氏〔を／一〕有〔り／二〕功天下
〔に／一〕事無〔く／二〕大小皆〔な〕聞〔つ／二〕於

頼朝〔に／一〕。遂三世登〔二〕公輔〔一〕自〔レ〕此以後政〔こと〕不〔レ〕復〔二〕
于天子〔一〕。旧註誤矣〔ぬ〕。

○百王猿犬 百王以後必〔ず〕有〔レ〕属〔二〕甲戌之人〔に／一〕而威加〔二〕四海〔一〕
乎。旧註誤矣〔ぬ〕。

○星流 星〔は〕謂〔ふ／二〕庶民〔を／一〕也。古〔へ〕以〔レ〕星〔を〕喻〔ふ／二〕

庶民〔に／一〕。言〔は〕百姓連〔二〕遶〔す〕國中〔を／一〕。唯〔々〕鼓鼓卑〔の〕
声耳。旧註誤矣〔ぬ〕。(60ウ)

○七堂の覚朱点の分七堂也。

庫裡 風呂〈浴主(よくす)と云て風呂の奉行の名也〉

方丈〈七堂の外也〉 法堂 仏殿 山門 法界門〈七堂の外也〉

僧堂 西浄〈浄頭(しんじう)と云て西浄の奉行の名也〉(61オ)

○諸山法事座席次第

雨打（ゆた） 大衆 雨単

土 = {土偏・巴} 堂 浄頭（しんぢう） 浴主（よくす）

都司（つうす） 監主（かんず） 維那（いの） 典座（てんぞ） 直歳（しつすい）

後 〈大／扉／衆〉 〈普／庵（ふあん）〉 本尊 長老 〈扉／大／扉／衆／扉〉 正面南

〈前／堂〉首座（しゅそ） 〈後／堂〉首座（しゅそ） 書記（しよき） 蔵主（ざうす）

祖師堂 参暇（さんか）〔の〕西堂 侍者

雨打 大衆 雨単

土地堂には其地の鎮守半天部或護伽藍神或十六善神并諸

仏法守護神の位牌あり。（61 ウ）

東の都司の座を東班衆と云。皆東の扉より入。これ其寺の公界をさばく

衆なり。寺領以下のさばきをする也。

本尊には弥陀釈迦或虚空蔵等何も立る也。定りは無し。長老を

東堂と云。正面の扉より真中を入也。其寺の本住。

祖師堂には達磨より始て其寺の開山其以下代々の祖師の位牌（はい）

あり。檀那の位牌は不置也。

西の前堂首座をば座元（そげん）とも第一座とも云。皆西の扉より入。即西班衆と

云。これ其寺に居て学文斗して居也。

普庵は木像にもせず絵にかきて本尊の後板に少棚をして推して置也。

○雨打（ゆた）と雨単と誦、同底の事也。町屋の尾垂と云が如し。今の大仏殿の（62 オ）

二重やねを雨打と云。又細殿（ほそどの）とも云。寺中の大衆皆これに立也。

○何にてもやき物打わり候に、其まゝつぐこと、別てちやわんてんもく其ばにてよし。

○たとへば打わると其まゝゆびにても手にても血を出し、

血熱の内につくべし。何所にても人の身の血にての事也。

○なすびとしそとをすしにすべし、一段吉。（62 ウ）

○身のたけ 三尺九寸 〈○くりの置やうはわらびのほどろと云ものを／上下につゝみ置にして土にうづむ〉

○袖のたけ 壹尺二寸 〈○あつ湯をかけてもよしと云々〉

○袖のゆき 壹尺三寸

○をくびのまはり 三寸 〈○やきうるしと云ことあり。しょうはあをとゝ云とをうるしにまぜて／何也ともつぐべし。つぎて其まゝうへをそくいにてほそ##とはりて／火に打くべけるか、又少あぶるべし。かみのこがるゝ程あぶる／べし吉。其まゝつぎ++つかわるゝ也。〉

○えりのまはり 二寸

○えりのさがり 壹尺

○にくづくと云もの薬種也。にんにくをくうたる後にくうべし。則

にんにくのくさゝなをと云々。

○師の硯（硯箱の下にも入物定有。朱たんなど黒やきも入る）に置。硯筆貳対、黒一丁、水入、香ばし、のり入。硯のふたはあか、かんぱん、はばり、小刀、耳かき。

○薬箱はよこかねに三尺五寸、たかさ壹尺壹寸、せばさ八寸、重六重の内下一重は硯と入

合す也。

○師の茶袋もり下紙を柿しぶに染ていたせり。(63 オ)

たいなひさがしとてさいあいして子の生る月をしる事

一、十三よりはじまるなり。たとへば

二十五 同月やうなり

○正(十三)〈左傍記「男」〉 四(十六)〈左傍記「女」〉 七(十九)〈左傍記「男」〉
十(二十二)〈左傍記「女」〉

○二(十四)〈左傍記「女」〉 五(十七)〈左傍記「男」〉 八(二十)〈左傍記「女」〉
十一(二十三)〈左傍記「男」〉

○三(十五)〈左傍記「男」〉 六(十八)〈女〉 九(二十一)〈左傍記「男」〉 十二(二十四)〈左傍記「女」〉
〈又正月へ二十五よりくり返して／いくたびも同じ〉

右如此正月は男をうみ二月は女をうむ。何れもひだりの

方に男女の書付のごとく也。十三よりはじまると書たる(63 ウ)

ごとく、たとへば十三の女を正月にさいあいし、十四を二月に

さいあいし、十五を三月にさいあひし、如此して十二月に

二十四をさいあひして、二十五を正月にさいあしすれば

はらむなり。此外のとし月はづれてははらむ事

なし。

川崎の唐人の喜兵衛と申人の伝に、かんの虫の事

○しやうひかんははらさのみはれずして脈の内に

口伝あり。(64 オ)

○なしぢ色にうるしをつかう事

○うるしをよく++こしてうるしの三分二白粉を入れる。

うるしもくれんじ一つ程にかみの油しづく三露入合て

又よく++こして使べし。

○屏風せうじを虫のくわぬ薬の事

○うなぎの魚の皮を火にくべてけぶりをあてよ。妙也。(64 ウ)

(65 オ空白)

一、一年の内にしやうれう八度来る事あり。其日の事

一、二月のひがん 此内中日と云

一、三月三日

一、五月五日

一、七月盆の内十五日と云

一、八月のひがんの内 中日と云

一、九月九日

一、十月十五日

一、十二月晦日

又ある人の日、一年の内に聖霊来る事七十五度共いへり。(65 ウ)

○徳遊集

一、雲の気を見て其年の善悪の事

○〈早朝〉正月一日、東に黒雲立は春雨降也。

○正月一日、南に黒雲立は夏大水。

○正月一日、西に黒雲立は秋大水。

○正月一日、北に黒雲立は冬大水。

一、耳に虫の入たるを治す事

○麝香を●是ほどごまの油にて入よ。則
油につれて出る也。

一、目に砂の入るを治す事（66 才）

一、目に麦入たるを治す事

○大麦小麦心にまかせよ。袋に入むして、其
汁を吞べし。同自らも其袋ながらそろ
++とあたゝめよ。新き綿にて目の上を
のこうべし。則綿に付て出るなり。

一、犬に食たるを治す事（66 ウ）

○其所にて味噌をもらひ疵に付よ。

○又なのかぶらを灰にして付よ。

我犬人をくふたらんにはみそを申うけん
と云とも出す事なかれ。

一、ねずみに食たるを治す

○あしを煎じて洗べし。

○又じやかうを少付よ。あしとは草のあし也。
別てなにはの浦のあしを用よ。

一、蜂（はち）にさゝれたるを治す

○蜂のすをせんじて洗べし。又

かちのきを切て見よ。白き汁出る。其（67 ウ）
汁を付よ。又なもみの葉をもみ出して
其汁を付よ。

一、うるしにかぶれたるを治す

○先塩湯にてあらふ。柳を煎じて洗、

猪油を付よ。又、

○をんじやくを粉にして湯に多入て其所を
洗。ぎやうずいにすべし。

一、陳蚊屋の事、かやつらずに蚊を不入の事

○人のくびを切所に行て其人に、貴所に物い

はん、何事ぞ、とがつてんさせて申べし。（67 ウ）

其方の左の袖の糸をたまはるべし。随分

跡をとぶらひてまいらすべしとがつてん

させて申うけ、かうむりの生たるを彼

糸に針を付、かうむりをつき通して

糸によくなま血を付、蚊の在ん所四方に

此糸をはるべし。才覚は心にまかせよ。
たとへばかや棹（さほ）のごとし。如此して
歌有。「武野は今日はなやきそ若草のつまもこもれり
我もこもれり」と書て四方の角に糸に
付よ。口にてても其由となへよ。

- 一、四足の物の足をすくませける事（68 才）
○海針と云てえいの魚の針也。彼魚生
たるを用、其針を取て魚をば海にはな
し、彼針もち様あり。竹のつゝに
白粉少入て持也。さて足をすくめんと
思ふ時は、日の下に持、たとへば東に日の
ある時は西にもつ也。南に日ある時は北の
方に袖の下にてても懷の中にててもかくして
持べし。四足の物通過たる足跡に此針
をさすべし。あしをすくめて不行なり。又
此針をぬく時はしさいなく過行也。（68 ウ）

- 一、夜をねざるの事。
○馬のかしらを灰にやきて方寸貝（はまぐりの中にあるほうす貝）にて可
吞。余の物にては悪し。方寸貝にてのめば、
夜の目をねず。

- 一、盗人を家に不入の事
○十二月のみづのとのみの日、其家の門を作る
べし。但、門を立てるにさし合のなき日を用よ。

- 一、人を門へよび出す事。〈かたき／若衆〉、か様の人をよび出すに用。
○古きやしろ、古き堂寺などにある老木
を取てそとばに作、件のそとばを
可然所にて百日とぶらふべし。初日より（69 才）
終日まで心かわらず同じやうにとぶらふ
べし。初め念仏十反ならば、終りも
十ぺん、百反ならば百ぺん、露ちがふ
事あしゝ。尤、香花茶湯など
仕らば、猶念力あるべし。彼そとばを
人に不知してよび出し度人の屋に行て、
よび度人の名をそとばに云きけ念じ
ていかにもをんみつ可然。人に知せては
無曲、草木国土悉皆成仏と
そとばに書べし。（69 ウ）

- 一、人にあたり植木をからす事
○其木にきりもみをして、穴に水かねをさし、
口に丁子を粉にしてさすべし。

一、水油の事

○にはとくの木の中にある白きしんをつき出し、
えの油をしめてはほし++、とうじみの様に
なして、かわらけに水を入れてとぼすべし。

一、人に夢を見する事。

○あまがいるを取て、せなかに「思」と言此文字
を書也。但、常の筆にはあらず。たとへば、(70 オ)
○きつねの毛○うさぎの毛○たぬきの毛
○をし鳥の思羽の毛○此毛にて筆をゆい、新き
時、硯水にはくずのつるきりくちより出る
白水にて、すみは常のすみにて、右の文字
を書べし。并竹のうすやうに我思ふ事
を書て、右のかいるをうすやうにつつみて、
夢みせんと思ふ。其日の暮がた、古き
はか所に行、五輪の水輪と火輪の間に
をきて、夢にみせたきと思ふ次第を人間に
語る様語り聞て、帰る時念比にとぶらう (70 ウ)
べき旨語りて立べし。をそらくは夢を
みせん事、うたがう所なし。

一、けんねんやくの事。

○六月一日に朝日に向て、あしだかたしにこしを
かけて、心経三巻光明真言卅一返唱て、
右左の手の中を朝日に向て、右の手には
我名を書、左の手には思ふ人の名を書て、両
手を合てをがみて、其後両の足の下の土にも、右
に我名、左に人の名を書て、其土をひねりかけよ。

一、犬にほへつかれぬ事。

○左の手の小指にて、同方の大指に「見」此字を (71 オ)
書て犬にはじきかけよ。

一、馬のうりたきをうる事

○いの本を三度めぐらせてやれば、かならずうる也。

一、蠟そく久くもやす事

○松やに ○ゆわう ○ねずすもちの木の白き
粉、右各等分○是ほどに丸じ、ごまの
油に入をき候事、日数十日斗、各取出し、
よく++ほして、又粉にして、らつそくのもへ
口にひねりかけべし。

一、なし地色にうるしをつかふ事 (71 ウ)

○うるしをいかにもよく++こして、うるしの
三分二白き物を入れて、うるしもくれんじ一程に、

かみの油（あぶら）三つゆ斗合て、又よくわたに入
したゝめ、こし返してぬるべし。

一、びやうぶの虫くわぬ薬の事

○うなぎの魚のかわを火にくべて、其
けぶりをあつれば、びやうぶに生ずるむし
みな死する也。大事の秘也。

一、ろうかたびらの仕様の事

○松やに貳升 ○蠟天目二つ ○油皿一つ
右三種合て布にてこし、はけにて引べし。（72 才）

一、馬のはなれたるを留る事

○手の内に賦と云文字を指にて書。但先手に
土を付て賦の字を書いて、馬に見すれば
とまる也。

一、柳葉を魚に見する事

○鳥のかいごの死したると○てうの死たると
さぎのしり草をかげぼしにして、霜にして水に
入べし。鳥のかいごとあるひろき書やう
何鳥の事ぞ。定て庭鳥たるべし。

一、又一方に曰、馬のはなれたるをとむる事

○其日の三めの方の土を指のさきにぬりて、左の（72 ウ）
手のひらに「月」と云此文字を書いて、馬の行
たる方へ其手を向れば返るなり。

一、馬のむつけたるまじなひの事

= {日・日} 朋 = {日・日・日} = {月・月・月・月} 晶 如此 馬のひたいに
書べし。

一、つり茶わんの事。

○二皮（是はにかわの事か） ○あつはいく各／等分に合てつるべし。

一、馬のきず薬の事（73 才）

○かつをの黒みのこ、馬の頭のしやれたるを
ひたいのふんをこそげて等分に合て
はこべの汁にて可付。

一、馬のせの薬の事。

○馬のはを霜にして粉にして馬のせをよく
++あらひて、あつき湯にてたでゝ付よ。

一、ある方に曰、又人に夢を見する事

○青きかいる（あまがいるなるべし）のせ中に○「刀（とを）」此文字と○「薬」の
字書

て、我思ふ事を紙に書て、竹の筒をして
四寸二分中にかみとかへるを入、其人の辺に埋後取出すべし。

一、うせ物出来する事。（73 ウ）

- 一、又ある方にあり、人をよび出す事
○青きかへるを竹のつゝに入て、よび出すべき
人の名を紙に書てつづに入、其人のいたる門に
居れば出る也。
- 一、ざしきにある人を立る事
○すゝと塩と等分に合て立たき人のはき物に
ぬりて、此歌をよむべし。
○あづまやのまやのひさしにある人を
はやとりたてとゆふ暮の神 此歌
三反となへよ。(74 才)
- 一、又曰、
○其人のはき物をはきて、はなをゝ門の方へ向て
其後此歌を三反唱べし。
との森の森のひさしにをる人をとく++返せ道の辺の神
- 一、水とうしみの事
○栗の花をゑの油にひたし、ほし++して水にてとぼす也。
- 一、うせ物を出来する事
○うせ物の色を紙に書て、五輪をさかさまに
うづみ、五輪の下に此紙をしかせてそばに
火をたきて酒をわかし、彼五輪にかけて (74 ウ)
此うせ物いでしたらば、本のごとくなをすべき
由ゆい聞て又酒をかけよ。則出る也。
- 一、竹ほんこうの事
○弓を二丁其日のさす神の方にをきて
本はずに指にて「満」此字を書て、其後
心経三巻よみて、其後人に弓を持せて
さす神の方へ向て此文を唱べし。
ぜんくわう++九月ぜんくわう香して返香香し
返香廿一反其後光明真言みつべし。
弓を人に持するに口伝あり。我身はさす神を
うしろにむけべし。弓のさきには立べからず。(75 才)
少そばに立なり。
- 一、ぼう腫きしやうの事
○人かたを作てうせたる日のさす神のいる
りの土を取て、人形のほうさきに此土を付べし。
其後だんかざり七日不動の真言をみつ
べし。彼人ぎやうのほうさきにはりをさす
べし。其はりには
○まむしの針 ○ゑゐの針 ○物ぬい針
- 一、人の面をべちに見する事

○五輪にあるぼん字のはくを取て面にぬる也。(75 ウ)

一、人のくびを別に見する事

○女のいまだ初めの血をしそくによりて古き
馬のくつををきて右のしそくにて火をとぼ
すべし。

一、うせ物の方を知る事

○子の日は未申の方に有。 ○丑日は酉の方に有。
○寅の日は辰戌の方に有。 ○卯の日は辰日申に有。
○巳の日は寅未有。 ○午日は丑の方に有。
○未日は亥子方に有。 ○申日は子戌に有。
○酉の日は午の方有。 ○戌日は寅卯に有。(76 オ)
○亥日は未申に有。○此方をたづぬべし。

一、太刀刀にくもの家のかゝるを取事

○うしのよだれをかけてのごうべし。

一、てきのくる方をしる事 ぎやくにくるべし

子	午	卯	酉	十二
丑	未	辰	戌	八
寅	申	巳	亥	四

一、善夢見て

福德増長須弥功惠（とく）神変王如来 三反唱て
東向て五拝して（76 ウ）

一、悪夢見て

悪夢滅除須弥光善神反王如来 三反唱て
東向て五拝して

一、伊勢のこりの日

正月	二月	三月	四月	五	六	七	八	九	十	十一	十二
十六日	七日	十五日	十五日	廿日	三日	十四日	十一日	同	九日	同	八日

一、熊野のこり日

正月	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
一日	八日	十八日	十日	八日	廿六日	廿七日	九日	十日	九日	同	十九日

一、ある方に曰、はなれ馬をとむる事（77 オ）

○馬のあし跡に「賦」此字を書て指にて書

をんどはんはやそわか此文をみつべし。

一、産後血の多下る時は

○あきやうをせんじて可服。〈あきやうとは／唐のにかわの事也。〉

〈又〉一、産後血の下らざる時は

○小豆をにて汁をのませよ食にもすべし。

- 一、産の時胎内に子の死たる時は
○くろ大豆をいりて酢に入てのませよ。又
せんじたるは弥吉。＝〔草冠・角〕〈左傍記「うさぎの事か」〉毛霜にして
ごまの油にて可服。(77 ウ)
- 一、毒（どく）をけす事
○梔を出て服よ。○はい（夏の虫のはいの事）を多取て尿に
しめて持、細末してくちなしの花をほして
此二いろを等分に合てのむべし。やがて吐
すべし。其後薬をのめよ。
- 一、開に蛇（くちなわか）の入たる事
○十五歳より内の法師のくわんぢやう
うちたるのそりがみを茶一ぷくほどさい
++可呑。いかにもしてこうの鳥を
もとめて生ながらにて女のそばにをくべし。(78 オ)
こうの鳥とはこうと云大きな鳥也。
- 一、開出る事あり
○ひる蕤を袋に入むしてやわら++として
をし入よ。鶏の毛を多く水に入て
せんじをり湯にさせよ。白鶏いよ++吉。
- 一、咽に魚のほねの立たるをまじのう事
鬼 人に不〔レ〕可〔レ〕見 (78 ウ)
- 一、くちはみにくわれたるを治す
○萩をつきしぼりて其汁を可呑。
疵の口にも付よ。又
くすの根 露草 何れにても汁を
付よ。同又疵の上を三灸すべし。
- 一、馬に食たるを治す。
○しやせん草 すみれ草 にわとこ 此内
何れにてもしるを付よ。又むまひう尤吉。
すべりひうの事ぞ。にはとこ冬はあまはだ
を用よ。(79 オ)
- 一、むかでにさゝれたるを治す
○先塩をかみて付て藍の葉をもみ
出して付よ。又方かしらのあかを酢に
解て付よ。
- 一、狐（きつね）のつきたるを治す
○七月十五日にあかけいとうげの花を取
をゝ犬のきばとを霜にして花の中に吹
入よ。
- 一、なまずの妙薬の事

○大黃を吉酢にてすりて霜にして下を洗ては
付++すべし。妙なり。(79 ウ)

一、柳枝かぶきの事〈やうじかぶきと云は酒もりなどに／狂言にするなり〉

○たとへば柳の木のやうじ吉。人のやうじは同くはせず、

常につかふ柳枝の本のかみたらしたる中に物

ぬいばりのさきを少をりてさしこみ、をれ口を

柳枝の内へはりのさきを出るやうにさして、左の手を

つぼめてさせば、手をのぶる時は手の内のかわ

引はるにより、ひとり此柳枝があがるやう

なり。又すべる時はひとり此柳枝ねるやう

なり。何にても可然小歌をうたい、右の

手を少も柳枝に不付して、さらば皆見物す。

「此柳枝を少も手を不付して、ねをきを

させ申さん」など云て、歌に合てねをきを

さすべし。尚座の狂言ながら一段面白事也。

同じくは、知音の人に心を合、其座にては我

柳枝にてなき様に是こしらへて渡して、

「貴所の柳枝かし給へ」と件の柳枝を

請取てすべし。いよ++きどく也。

一、食毒をけす事

○人参のろず〈左傍記「人参のかしらの事」〉 ○蠅（はい）（夏のはいの事）の羽
を去て霜にして

そくゐにて丸じて湯にて吞べし。妙なり。(80 ウ)

一、同方

○青きはいを生（いき）ながらはねを取捨て七日

酒に浸して霜湯にして可吞。

一、同方○すいかづらをせんじても可吞。

一、同方

○くちなし○するめ○ほしなすび

各霜にして可吞。(81 才)

一、毒（どく）害を知事

○くろまめをなまにて食して見るに

其あぢあまくばどくをくいたるなり。

○すき めうばんをのみて見るにその

あぢあまくばどくとしれ。

めうばんとはどうさの事也。

一、何によらず久しくいゑざる物に妙薬 先腫物也。

○なめくじをすりて付べし。妙也。(81 ウ)

一、やきしほの仕用の事

○常のしほをかはらけにそろ++とをし

つけて一ぱいもり、又ふたをしてその
ふたにきりもみのあなを二つ三つして
やくべし。あなをあくる所ひしよ也。
別なる事なし。かやうに仕候へば事外
しろくて見事ぞ。(82 才)

○弥陀十二首の歌。奥に図もあり。

○あさひかげみどりにかすむたにの戸にふるあわ雪のつもらざりけり
○あき山のみねをば霧のたちこめてふもとの里につきぞまたるゝ
○あきはつるみをこがらしのたまくらにふけ行よひのつきはすさまじ
○あひそめて見なれし後のたまづさにふるきなさけをつくしつる哉
○あきらかにみよのかためをたのむかなふかきちぎりはつきじとぞ思ふ
右此ぶんたての歌也。

○つきにたるつれなき人はつゐにしてつよきころをつくしつる哉
○ふしみやまふもとのさとはふゆがれてふるはあられかふるはしぐれか
○たよりなきたびのなにわをたちいでゝたれに都のたよりとはまし
○みゆきするみちふみ分てみかりすとみのしろ衣見になれにけり
○あきのよのあはれはふかきあかつきのあかずも見つるあり明の月 (82 ウ)
右此ぶんはよこの歌也。

○あづまぢのみちぞものうしたびごろもふる里しのぶつきや恋しき
○あききかぬみには命もたのまれどふかきみのりのつとめのみして
右此ぶん二首は角の歌也。(83 才)

(※ 83 ウに図あり)

○幕(まく)のこと

○まくの物見のかず、九つあるもの也。其内に日月のもの見とて二所
一のうへにあり。其次に三つ、又其次に四つ、合九つ也。

○乳(ち)のかずは廿八。○幅のかず五端、五つの名あり。

○上は冠幅、其次は物みのゝ、其次は中のゝ、其次は名なし。

其下を芝(しば)うちと云也。

○月日の物みのながさ、一尺二寸。其外は八寸二分づゝに
あくる物なり。

○乳は二つに取て、三寸八分、はゞは八分也。同又横のながさ、三丈七尺也。

○日月の物みよりこの事を見ぬ物也。

○幕の面と云は、向て右、日のもの見の方を云也。

うらとは向て左、月のもの見の方を云也。(84 才)

○女はらみたるを、男女をしること

○女のとしと、月水とまりたる月と、是を世上にのび
月と云、其のび月のこと也。此月とねんがうの
幾年と云こととをそろばんに入て、さて四十九
入たして、さて一引、二引と三四五六と拾までも
百までも引て、引つめて、半の時は女子なり。丁の

時は男子なり。たとへば、廿一の女などはらみ候は、
○先、女のとし廿一を、則、廿一と入る。
又、のび月十二月なれば十二と入る。
元和五年の五を五つと入る。六年ならば六と入、
七年ならば七つと入る也。(84 ウ)
さて、四十九を入る。
合、八十七なり。さて、一引、二引と引々
してみれば、女なり。是は、引残りて半にあたりたるに
よつてなり。一引、二引、三引、四引と、いつ
までもひき++して引残りて、もはやひかれぬ
所の丁か半かを見合よとの事ぞ。(85 才)

○碁の書。

敬白碁之勸進帳之事 夫琴碁書画之中、碁是
仙家所翫忘然述齡入仙家雖為半月客帰
旧里逢七世孫。然則伝世人倫之為翫誰不
嘗之。凡黒白之石者院陽日月形、星
目者為九曜、三百六拾目者一年之日数、
盤之四方者頂弥四州、因顯四季五智
如来之住所也。四角者四天王之守護也。盤
之上者娑婆世界也。天無二日、地無二王。(85 ウ)
故顯定敵角地策四方賞見而刹那不
免以取地、不離欲見敵危処切殺々人
刀繼而活々人劔生死、即顯目前死石、則
入涅槃。或時者追落立却成攻入征殺
敵者入城 = { 5 8 8 E } 如攻落。喻廻武者策帷
握之内如決勝負。於千里之外碁与
武各別而不別、又男女夫婦之成
媒理也。其故者光源氏之古軒端 (86 才)
荻空蟬之懸心勝負、紫式部之
筆跡其外和漢例者浜之真砂也。
惣而向碁則惡他念不知有破戒、
殺石殺生戒、盜 = { 5 C O C } 偷盜戒、成助言
邪淫戒、隱行妄語戒、碁打醉送日
飲酒戒、何罪思共皆押崩打果邪
正一如迷碁三界城悟碁十方空也。勸
也。是程貴碁遊〔に〕不寄心輩者無道心
可謂。以此理世中勸取引功德上手
下手諸共依打乱碁却生之世之結
縁無所疑。志願以此功德普及出
一切我等与衆生皆碁成仏道也。(87 才)

●性をくるの口伝のこと

○金（きのへきのと）○波（ひのへひのと）○焼（つちのへつちのと）○壁（かのへかのと）○棲（みづのへみづのと）子午丑未

○白（甲乙）○灯（丙丁）○寺（戊巳）○材（庚辛）○釣（壬癸） 寅申卯酉

○炎（甲乙）○地（丙丁）○樹（戊巳）○鐘（庚辛）○雨（壬癸） 戌亥辰巳

●判形の口伝の事

○一〈二〉三四〈五六〉七八九。如此、筆づかひに大小ふとくほそく

書て判をすゆる尤吉。（87 ウ）

たとへば判のすへやうは

如此一二三付の筆遣のごとく、

ほそきとふときを仕

候てすへては息災にして

命ながし。一をふとく、

二をほそく、三四をふとく、

五六をほそく、七八九を

ふとく仕候也。

○ある発句に

文月や人々参法の途〈田中大念寺にて松木雄彦の作、折ふしだんぎ／ありしに、七月の頃申されけり。〉

○ある付句に

足にも手にもつちぞ付けるといふ句に

御かげはやあらはれ給ふかまの神 久志本丹波守殿御作也。（88 オ）

○ある狂歌

さぎならば心ゆるぎのもりもとを（にか）つれなく見ゆるからす丸殿

右の狂歌は内宮守基の祢宜なりの時、京からす丸殿金な

か分とて御同心なきに、此狂歌を以申上御同心のよし。

○有付句に

神にも似たり杓のむらだち といふ句に

千岩やふる仏のタかねなりて〈是も内宮守基の作と云。又／守武のといふ説もあり〉

○岩渚益太夫殿一代に盃の三郎左衛門といふ人あり。山田一の作者といふ。

ある時此人の所にて連歌の見てに京の花の本の玄仲といふ人

いづれも入道たちのより合にて拾月の比の事なるに、

○おざしきを見ればのこらずかみな月といふ句に

ひとりしぐれの古えぼしきて 益太夫作（88 ウ）

一、十七さんといふ事 たとへば

十七 十八 十九 廿 廿一 廿二 廿三 廿四（89 オ）

○へんし月の事

○女の十三の年よりくり初る也。正月と七月也。十三の人は正月

十四の人は二月、十五は三月、如〔レ〕此。百々までも同じ事也。

たとへば

○十三〈正月／七月〉 子死月

十四〈二月／八月〉 母死月

十五〈三月／九月〉 両死月

十六〈四月／十月〉

十七〈五月／十一月〉

十八〈六月／十二月〉

十九より又正月へもどりて二十は二月、廿一は三月と如此にして一年に

ニヶ月づゝあたる也。十九より跡へもどるは十八にて十二月ともはや（89 ウ）

さきのつまりたるによりもどるなるべし。

○ある聞歌に

○さればこそ人かよひけん浅茅原ねたしや今宵露もこぼれず

此歌の心は、君の門に内々内には人のあると思ひて行之

人のなきにて満足して帰りて、又行て見てよみし歌なり。

初め行たる時、露の落たるを忘れて人ばしかよひけると

心得て、さればこそ人かよひけん浅茅原なり。ねたしやは

くやしきといふこと也。くやしや初めわが行たる時落たる

露なる物と思ふにより露もこぼれずなり。（90 オ）

○平家の作者人数の事

○小原のいちやうの卿 ○かんろ寺殿（かんろちどの）〈公家也〉

○せいかく法師 ○吉田大納言

是は神家の方を依〔レ〕存候

めし出す。

○しゆんぜいの卿〈公家也〉

○やすより ○あはの内侍

是は女房大裏の御事を

依存候召出

○こしべのぜんじ

○かげきよ

是はいくさの事を語人のために

めし出す。（90 ウ）

平家は小野の天神様の御作也。

○座頭の者祖の事

高光天王の御時しゆたうたいしと申人

盲目めされ初てよりの事也。

初めはからかみさいらと云物をうたひてまいる。

其後平家を語る物也。但此からかみさいらとは

さいばらと御覧申物には

有まじきや。但本に候間

うつし申。さいばらかと

申もすいりやうなり。

からかみさいらか
からかみさいばらとやらんか
かさねて能たづねべし。(91 オ)

○からすなきの悪き時の歌

○七福をそくし（即生しやう）ならばつげからず七なんならばをのがそくめつ
さすがみの歌

○子は五つ丑は九つ寅は十を卯辰も戌も五つ成けり
巳未に六つとぞ申亥は七つ酉十をなれば午申は八つ
右の歌はたとへば「ねは五つ」は其日よるも五つめ
なり。夜も同じ事也。五つめといふは子丑寅卯
辰とくりて則辰の方にむかひて出行などせず
其也。何も此心に午申までも同心也。丑の日ならば
九つめの酉の方にさすかみあり。(91 ウ)

○さゝだての事 さゝだてと申は人に石を卅もたせて其
石をさささささといくたびに成共いわせて一方へ石二つ、一方へ
一つ、一つの方へはいつも一つ、二つの方へはいつも二つ、すこしもちがはぬ様
ささささといわせて其数のいく声をよく覚えて十五声すてゝ
あまる声をいく声有とも一はいにして申べし。たとへばささささと
十六声ならば十五声はすてゝ上一こゑを一はいなれば石二つと
申べし。又十七こゑならば十五声すてゝ上二声を一はいなれば、石
四つと申べし。十八こゑなれば上三こゑなり。一方に石六つ、一方に
廿四と申べし。十九声ならば上四こゑなり。一方に八つ、一方には
廿二と申べし。前後十五こゑの時はたゞ卅の石なれば卅と申べし。
○しまだての事 しまだてと申はあるひは七つ八つ九つ十、十一、十二
十三、十四、十五、仁十、卅、四十、五十の石にても人にもたせて「しまを御立
候へ」とて、たとへば十五の石ならば五つづゝ、三しまでも又は三つづゝ、五嶋
でもあり次第にたてさせて、三嶋と申さば、「二つしまひとつにめされ」とて(92 オ)
ひとつにさせて、のこりたるひとしまより石一つ、二嶋ひとつにしたるしまへ入させて
「のこりのしまの石に殿さま一人に御供二人づゝ」と申て二人づゝつけさせて、
「さて残りたる石三つ有べし」と申べし。いつでも三しまの時はとも二人
づゝ、さて立たるしま数ほどある物なり。四嶋の時は石四つ残る物也。
五しまの時はとも四人づゝ付て残る所の石五つ有物なり。六しま
の時は供五人づゝ付て六つ残る物也。七しまの時は供六人付て
残る所の石七つある物也。百しまたてゝもかやうのぶんなり。

○八卦并其年のまぶし仏をくすること

○中指の上のふしを定はんにして一二三と百までもかぞへて
順にひとさしゆびの方へかぞへ申内に初八を越四十一をおどり四十一を
越八十八をおどる。(92 ウ)

(※手の図あり。)(93 オ)

三十仏

一日定（ぢやう）光（くわう）仏 二日燃燈（ねんとう）仏 三日多宝（たはう）仏
四日阿闍（あしく）仏 五日弥勒（みろく）仏 六日二万燈明（とうみやう）仏
七日三万燈（とう）仏 八日薬師如来 九日大通智勝（だいつちしやう）仏
十日燈明（とうみやう）仏 十一日觀喜（くわんぎ）仏 十二日難勝（なんしやう）仏
十三日虚空（こくう）藏 十四日普賢（ふげん） 十五日阿弥陀（あみだ）仏
十六日陀羅尼（だらみぼ）仏 十七日龍樹（りやうじう）仏 十八日正（しよ）觀音（93
ウ）
十九日日光（にちくわう）仏 廿日月光菩薩（ぐわつくわうぼさつ） 廿一日无尽意（む
ぢんい）
廿二日施無畏（せむい）仏 廿三日勢至菩薩（せいしぼさつ） 廿四日地藏（ぢぞう）
廿五日文殊（もんじゆう）菩薩 廿六日薬上（らくぢやう）菩薩 廿七日愛染（あいぜん）
廿八日不動（ふどう） 廿九日薬王（らくをう）菩薩 卅日釈迦如来（あみだ）（94 オ）
○月水皇の御符

○入仏 〈同同同／同同同／同同同〉〈口口／口口／口口〉此符を書て一つに成とも
二つ成とも切て丸じて

早天の水の初を汲て朝日に向て吞べし。但

口伝に云、あたらしきわらざうりを人にかりて

朝日に向てのみて則其人に返す。

則くじこしんぼをさづけて可遣の者也。

○灸にいむべき日の事

○初二五六中（なか）の四五〈左傍記「十四日十五日」〉八（十八日）地藏（廿四日）の
日七（廿七日）九（廿九日ぞ）両日灸に忌べし

此心は「初二五六」は其月の二日五日六日ぞ。「なかの四五八」は月中の十四日五日

十八日ぞ。地藏の日は廿四日、是は地藏のゑん日の故ぞ。七九は

廿七日廿九日。以上一ヶ月の内九日有と心得べし。（94 ウ）

○山田にある人の作に 是は山田一番の作者と申也。其名はわざと不申。

○犬源氏供養の事

○こゝにかずならぬむら山民部、たのみをかけて正兵衛を又代官になさんとの

此ものどもはかれにまかす、されどもつゐに奉行をせざりしゆへにより

三方のくみにも入がたし。しかれども、今なりがたきえんにより、

しんじつのしよぞんのおこし、ひとつもきこへぬ目やすをつくり、無用の

ゑどの公事にさたす。南無や、ひかるげんじの將軍、ひよつと

上落、抑勝兵のいふべきくもりつみあるに、ふしんのさたに

いたり、はしら木をとりてえる事は、つゐにかくごの前ならぬ、

つくつちもむなしき奉行と聞えてはいひかくる露の言を

あんじ、我まゝしたる公事のむくひ、すゑつまりゆくふしんを

させば、四郎左がかほばせや、こうようもよしや。たゞ（95 オ）

たまゝふしんをするならば、酒手などだしてみな人を

やとへかし。腹立さたをするとても、かくべつ公事の理りは

まぬがれがたきみちとかや。たゞすべき事は山田が原の
内をいでゝ、七人ぐみは、福井、橋村、龍太夫に
伊豆殿や、ゑの木倉、たくみし公事のことながら、
あつかふみをねがふべし。先かちになるとても、
正兵のうきそふははるゝ事さらになし。あしき事
たへずして、はまやくすべや、宇治浅間ちやうはん（95 ウ）
竹たきゞに心をかけてゆだんなく、身上
しやうばいのまき柱をゑりてとる運の
末にごりにうつる我心、公事のうら判樽
銭の其数々もかさなれば、あつかわん人も
たのまれず。あしき事たえずして、つ
もるくもりをあづま衆の耳にこめて、
たのしき事を浮舟につみもせんとかや。
是も数ならぬ身なるべし。夢のうき
はぢを打すてゝ、皆あつかひをねがふ
べし。南無や両宮の長官さま、きやう（96 オ）
げんきぎよをおしられて、う治のお上人も
あつかひに入せ給はゞ、もろともにかさね
てより合して会合もすでにあるべし。
右、此源氏供養は山田の奉行、慶長元年の比より元和
五年の比まで、長野内蔵允内下代中村正兵衛殿と申仁
奉行めされ候。三方衆まぎれたる人として此六人申合、
連判の時、彼七人の衆、村山殿、福井殿、橋村殿、龍太夫殿（大せこ）、
伊豆殿（福嶋四郎左衛門殿）、榎木倉（ゑのきぐら）、たくみ殿（八日市ばひぜん殿）、
此七人也。これを〈此衆は連／判にいや／とて不入〉（96 ウ）、
「しちゑんめうのあかしの浦に」の所へ引合、七人ぐみは
ふくゐ、はし村と申より「たくみし公事」の所まで
作りたる物か。尤、う治あさまの竹薪も御とり
しと、みな其比人申候事、「源氏の將軍ひよつと
上落」の所、是も七年八月中旬に此三方衆出入
の比也。江戸の將軍様、御父子共におりふし
御上落也。「末（すへ）つまりゆくふしんをさせば」の所、尤
冬の時分をしつめて、山田中を御たのみにて、正兵殿ふしんを
めされ候。げに++是も其比也。「四郎左がかほばせや
こうようもよしやたゞ」の所、正兵衛殿、下代に
四郎左衛門殿と申人あり。同、そねの郷にこうようと（97 オ）
申て、事外物ずきの法主、さい++公儀へ出る者
有り。「南無や両宮の長官様」の所、内宮のは
御出なく候、外宮の長官、内宮のお上人、さま##
御あつかひにても、彼七人と残る三方十余人

出入あつかいならず候。しかれ共、のち++は安のごとく
彼七人ぐみの衆、ひとつになり、かさねてより合
して、会合もすでに一の木実正寺にて
ありし上は、此うたいのごとくかさねてより合
めでたくこそ候へ。此書は月待に若き衆
卅人もありて書し間、だれの書たる共（97 ウ）
申されず候。めでたく++かしく。

○産の時いかにもやす++と産する符の事

○硯水を男にくませて墨をする間、しん経二卷
可〔レ〕読。

○内宮一度（たび）の守平と云人書

○寺ありとゆひ桶師にもやくそくをしかとしめねばりやうけんもなし 守平
右の歌は、内宮にりやうけん坊と申出家、旅の人にて、
とうりうせられ候。いづ方にも寺あれかしとの談合のおりふしに、
守武に、桶やさいくをしてゐけるに、話を聞て「山田に
よき寺候間、りやうけん坊をやがてよび越可申」と申て、
重てはさたもなくありしに「たのみたる事さたなく成（98 オ）
ける」と、彼出家申されければ、守武、右の狂歌。

○京に経じやに一切経をすり立て、うるにうれずめいわくするを見て

狂歌

○経（きやう）じやがうれぬお経にめいわくしづをさげづちにかみやうつらん から
す丸殿御作

○吉夢を見て

福德増長須弥功惠（とく）神変王如来 〈三反唱て東に／向て五拝して〉（98 ウ）

○産の時、向て吉方

正月〈左傍記「午」〉 二月〈左傍記「酉」〉 三月〈左傍記「子」〉 四月〈左傍記
「酉」〉 五月〈左傍記「子」〉 六月〈左傍記「卯」〉
七月〈左傍記「子」〉 八月〈左傍記「卯」〉 九月〈左傍記「午」〉 十月〈左傍記
「酉」〉 十一月〈左傍記「卯」〉 十二月〈左傍記「午」〉（99 オ）

○天（てん）疾（しつ）病（びやう）〈左傍記「やまい」〉得心秘事 千金莫伝密法
きたいふしぎの符（ふう）也。

□□□ = {口偏・急} 々如律令

右是は朱にて書べし。

九九八十一□□□

右是は黒にて書べし。

右此二つの符（ふう）を欲疾病（やまいやまい）〈左傍記「しつびやう」〉の時書て病者
（びやうじや）（99 ウ）

にのますべし。同又室内〈左傍記「いゑのうち」〉の人々にももたす

べし。又病（やまい）人の生死（いきしに）をしる事

此符を先（まづ）朱を似（もつて）書て後（のち）に黒（すみ）を

もつて書て鉢（はち 入物のはちの事）に清水を入れて此
二つの符（ふう）を入れて十一面観音（くわんおん）の真言（しんごん）
を仁十一返唱（となへ）へて見るに、死すべきは
朱の符先沈（しづみ）み、可〔レ〕生（いく）は黒（すみ）の（100 オ）
符先づ沈（しづ）む。死生（しにいき）をしる事余も
多しといへども、此符にます事不〔二〕有之〔一〕。
右此符（ふう）は吉備大臣（きびのだいじん）入唐（につとう）の時
相伝（さうでん）を今此日本にて相伝す。
○せんちんよりうなこじと云虫あがるをまじなうこと
大つごもの夜こたつの四方のすみの灰を
取てせんちんに入よ。其年中虫上（あがる）る事なし。（100 ウ）
○傷寒瘧或温病惣別熱病の世上にはやる時の
温符の妙也。

鬼鬼鬼鬼鬼鬼

■（梵字）南無牛頭天王蘇民将来之子孫也 = 〔口偏・急〕々如律令
鬼鬼鬼鬼鬼鬼鬼鬼

○又世上に傷寒はやる時分、我家を出る時、同病者を見舞時
此文を七返となへよ。

○南無天形星と七返となへよ。（101 オ）

○聖（しやう）靈（れう）〈左傍記「りやう」〉一年に来る事

○二月十五日 寅（とら）の時来、次の十六日午（むま）の刻飯（かへる）

○五月五日 卯（う）の時に来て則巳（み）の時に飯

○七月十四日 卯（う）の時に来、十六日の午（むま）の時に飯

○八月十五日 辰の時に来て巳の時に飯（かへる）

○九月十三日 未の時来て寅時飯

○十二月卅日 未（ひづし（ママ））の時来て正月一日卯の時に飯

此を口にも書て有り。それよりも此書一段吉。（101 ウ）

△くわんおんのうら

○ちはやぶる神の子どものあつまりて作れるうらに空事はなし

我うらは三度取事さらになし一たびとればかのふ成けり

右の歌を三度となへて一二三四五六七八九とみくじを

作りてつゝに入てたゞ一度とりて見よ。

○神仏に申事のうら ○ふうふの中の事

一、よく祈れば吉 一、いつもときわの松のいろ

二、おそくかのふ也 二、色ふかきこそあやしけれ

三、よろこびあり 三、のちにはよし

四、行水をかぞふごとし 四、あらうつゝなや

五、あだ口の出るごとし 五、はるの花のごとし（102 オ）

六、常にむなしからず 六、よろづ世までよし

七、あら++目出度や 七、うつろひやすき花の色

八、うけたまふべし
九、心をいたせば吉

八、あらめでたや
九、よしなきかた思ひ

○むまれ子の事

一、おとこなり
二、何とおぼつかなし
三、おとこなればすゑは吉
四、あらうれしや
五、おんななり
六、おやのためたのもし
七、夢うつゝ今まで吉
八、わるく思ふ共よし
九、思ひもなしよし

○うせ物の事

一、いまだ家の内にあり
二、はたらかず
三、ちからなし
四、よくもとめべし
五、ながくはうせず
六、こゝろなやわるや
七、もなしたづねう（102 ウ）
八、たかき所にあり
九、よく++みよ

○待人の事

一、道にとゞまる
二、いまだおもひたゞず
三、むしろを敷てまと
四、わるくなるやよし
五、おそく共くるぞ
六、めでたや++
七、あら++くるしや
八、もちとまで
九、あら++めでたや

○よそへ思ひ立事

一、おもひてよし
二、先思ひとゞまれ
四、道にてよろこびあり
五、いそぎ思ひたてよ
三、すゑにてくやむべし
六、みちにてなんにあふ
七、おもひ立てやむ事有
八、けふ明日おもひとゞまれ
九、思ひ立て未さかへたり

○ゆめの事

一、よろこびあり
二、目出度驚詞也
三、神仏にいのれば吉
四、うぶすなへまいれば吉
五、くわほうの事也
六、こゝろにかゝる事有
七、よきよろこびにあふ
八、しやうじんしていのれ
九、めでたや++

○人に物申事（103 オ）

一、いそぎ申べし
二、むつかしのさかしらいや
三、是だに思ふよりおそし
四、夜々
五、たひたなればよし
六、つねなればよし
七、ねなしや
八、思ふほどなりよし
九、いかゞあらんずらん（103 ウ）

おくにもあれども見分にくきにより後に書

△借用申地水火風虚（ちすいくわふうくう）〈左傍記「空」〉△いつの日のいつの比にか
返弁申今月今日

でくるぼうめぐり++で

今はがつたり

△かりをきし五つの物を

△敷しまのてづしの

四つ返し本来空に
今ぞおもむく

糸のきれ++てころぶ
すがたはもとの木のきれ

生死去来 棚頭傀儡（ばうとうくわいし）

一線斬時（せんざんじ） 落々（らく++） 磊々（らい++） 一休判（104 才）

○此書元和九年〈きのへ／ねとし〉九日書京大仏外のがわの柱五十三本有。

日耳塚のしたの地骸扇に六つ半其下の石ずへ二間余有。

○せいぐわん寺そとのえん四方四角の堂也。壺方四十六足あり。

○清水寺 音羽の石橋の上へのぼるに七十六通あり。同ぶたい
地よりらんかんの所まで京間九間二尺あり。

引にかわの口伝

一、水一升到大にかわ四本入、そのなく

成申ほどにて其後にみやうばん壺兩入、とけ申候はゞ其時引申。

此書あだに思ふ人には仏のばちおそろし
かるべしと云々。

一休の水かゞみ（104 ウ）

君のちとせをへん事もあまつをと女

の羽衣よなふ、万せいましてせいはふがうへ

われ見ても久しくなりぬ住よしの

きしの姫まつ幾世へぬらん

目なしどち++こゑにつめてましませ。

抑みな人達のさとりと哉覧いふ事をさと

る其ならひはじめに、「父母もなきとつと

いぜんの我身は何者ぞ、いへ、きかん」といふ。

何としてしらぬ事の申さるべきや。たゞ

へんてつもなきものなりと思ふべし。

たとへばよし野はつせのはなもみぢ色々（105 才）

に咲てちりて又もとの根に帰るがごとし。

〈此初の句一字さがる〉本来もなきいにしへの我なれば
死行かたもなにもかもなし

〈是も一字さがる〉世の中のよめがしうとにはやなれば
人も仏になるはほどなし

〈同是もさがる〉ゆく水に数かくよりもはかなきは
ほとけをたのむ人の後の夜

〈同さがる〉とへばいはずとはねばいはぬ達磨殿の
心のうちに何かあるべき

〈同さがる〉うそをつき地獄におつる物ならば
なき事つくるしやかいかゞせん

※頭書「上の句一字通あけずに此まゝならば下の句を
何れも丸を仕候丸の通ほど下の句さげたし。（105 ウ）

〈同さがる〉世の中の人々の心の仏なれば
しやかやあみだのはれわたすかな
〈同さがる〉極楽も地獄もしらぬ思ひ出に
生れぬさきの者となるべし
人死といなややきもしうづみも
し、のけてなくなりと思へば、又も
なくならずしてたましゐといふ物の
来世とやらんへ行。あらおそろしや。えん
ま王が手に渡りなば、しやばにてつ
くるつみをくろがねの帳につけて
をきて、鬼に見せて、「是ほどの罪人（106 オ）
なり、かしくせよ」といふ時、五色の鬼殿
がうけとりて、うすにてつきころして、又
みにてひて人の躰になして、しやばにて
つみのおもき程しやがむで（と）きく。又さる
者のいふは、「どくやくへんじてくすりと
なるなれば、つみのをもきは仏にやならん」
つくりをくつみのしゆみほど有なれば
えんまの帳につけ所なし
よく物を案ずるに、地獄もとをからず、
鬼といふ者はくどんなり。一代蔵経は
皆人間をいたましめんがためなり。あら
※頭書「此「て」は／「と」か。但／よき本に／ありし間／其まゝうつす。」
（106 ウ）
にくのしやか殿や、色々のうそをつきてお
ゐてそれをたがとへば、よしなのとはず語
や。しや出山の語にいはく、「一仏成道、観
見法かい、草木国土、しつかい成仏」。草木
も仏になるとなれば、人げんはいふにお
よばず。むかし++あつたと、しやかも
あみ陀もみな仏じやといふたと、したが、
うそをつかれたと、うたふも舞も法の声、
柳はみどり花はくれなゐあらおもしろの
春のけしきや、++。（107 オ）

水鏡

本来生死をはなれたる身なれば、きたる
所もなく、さる所もなし。三世不可説
なり。混沌（こんどん）のいつくともなく出ぬれば
父母未生いぜん、本来もなく夢々
仏法と哉覧いふ事もしらず。何とな

らむとあむずべからず。たゞなにとも
しらぬ心が仏なり。其仏といふ物は有
にもあらず、なきにもあらず、さとり
ぬれば、ありともなしとしらぬ事也。
一切八万余経を見るに、ほとけにな（107 ウ）
らむずらん心はすこしもなし。とかく
ふるこゆみなどゝ同じこと也。

〈此歌初一字通さがる〉はしなふて雲の空へはあがるとも
くどむの経をたのまれはせず

〈同さがる〉しやかといふいたづら物が世に出て
おほくの者をまよはするかな

△是（ぜは）は是、非（ひ）は非（ひ）にしてきて、生は生、死は
死、花は花、水是水、草は草、土は土。

〈此歌もさがる〉雨あられ雪やこほりとへだつらん
とくれば同じたに川の水

われはこれ何者ぞ++。づちやうより（108 オ）
しりまでさぐるべし。さぐるともさぐ
られ所は我なり。

〈此歌もさがる〉心をばいかなる物をいふやらん
すみゑにかきし松風のおと

死ぬればくう++としてあるや覧。
またばう##としてなきや覧。

〈此歌もさがる〉ありのみもなしもひとつの木のみにて
くふにふたつのあぢはひはなし

〈是は又二字通あがる〉をのれさへあつけはらはぬふだうめが
あくまかうぶく無用なりけり（108 ウ）

〈一字通さがる〉なき跡のかたみに石がなるならば
五りんの代でちやうすきれかし

〈同さがる〉朝露は消残りてもありぬべし
だれか此世に残りはつべき

〈同さがる〉ほらぬ井にたまらぬ水の波たちて
かげもかたちもなきものぞくむ

〈同さがる〉目には見て手にはとられぬ月のうちの
かつらのごとき君にぞありけり

〈同さがる〉万法を見る人ごとののどかはき
おもはで水を一口にのむ

しやかきんかいの所にまかせて仏に（109 オ）
なるといふしるしなし、とかく不明な
り。しすれば我もなし。人もなし。しやか阿弥
陀も見れば本は人、生をうけつゝ地獄

にぞ入。

〈同一字さがる〉夜もすがら仏のみちをたづぬれば
わが心にぞたづねいりぬる
思ひいれば人も我身もよそならず
心の外の心なければ
心とてげにはこゝろのなきものを
さとりは何のさとりなるらん（109 ウ）
何事もむなしきゆめと聞物を
さめぬ心をなげきつるかな
わが法をいはでぞいらぬ春の花も
ひらけてちりて土にこそなれ

二人比丘尼

ある比丘尼山居してあり。又びくに来
りてものがたりしていはく、「かみをそり衣
を染てかくのごとくなり候へ共、いまだ
一大事のいん縁をしらず。びくに成
たるかひさらになしと思ひ、是まで（110 オ）
まいりて候。御慈悲をもつて心得候様
に御しめしあれ」といふ。こたへていはく、
「みづからもかくのごとくなり候へども
みてつの者にて候。去ながら心中の分、
かたのごとく申べし。それ生死輪廻
の根源をたづぬるに、有相執着の
妄念よりおこりて、わづかに世間に
ぢやくする心をひるがへせば、又仏に
着するねんを生ず。是ひとへに一心の
妙なるいはれをしらざる故に、みだりに（110 ウ）
善悪の心にしたがふ。しかるに此心はひ
とり一切の相をはなれて、かへりて万法の
みなもとをしる。此心をたねとして、一切の
ねんはおこるなり。物の命をころしては則
地獄に落、けんどんにしてはがき道
に落、物をしらずしては畜生道に
落、はらをたてゝは修羅道に落、五戒
をたもちては人間にむまれ、十かいを
たもちては天上にむまる。是を六道と
いふ。此上に四生をくはへて十かいと
いふ。みな是一念をかへり見るに、とるべき（111 オ）
かたちもなく見るべきいろもなし。お

こりきたるはじめもなく、めつしてさる
おはりもなく、中間も、又住所もなし。
されば、たゞ念よりおこる所の十戒なり。
仏もまことになれば、願ひもとむべ
き所もなく、衆生むなしければ、きらひ
すつべき所もなし。たゞ大空の雲の
ごとく、水の上のあはに似たり。只起る
所の一念もむなしさゆへに、なす所の
万法もまことにあらず。則一念の外に
万法もなく、万法の外に一念もなし。(111 ウ)
念と法とひとつにして、こと##くむ
なしき也。一切のものを見る時みなむなし
と思ふねんのをこるをもむなしきとお
もふべからず。むなしとも思はざる所を
よしとも思ふべからず。さては一切の物
をよしともあしともおもはざる所をよし
とも思ふべからずして、つねに座禅
すべし。」

問ていはく、「人のはじめはいか成者にて候や。」
こたへて云「我等も此ふしんをこそなして
候へ。たとへば人の父母は火打のごとし。(112 オ)
かねはちゝ、石ははゝ、火は子なり。
是をほくそに打つけていわう薪に
つくるがごとし。父母のあひあふ所ひうちの
かどに打合て火の出るがごとく、人は
いづるなり。されば火は初なき物なれば、
つゐにたき木つきぬる時、火もやがて
きゆるなり。ちゝはゝも初なかりしゆへ
に、つゐにむなしきなり。然共、本来の
心は石中の火のもゆる事もなく、き
ゆる事もなきがごとく、人々ぐそくし
(※頭書「石の中のひ／日とあり」)(112 ウ)
こゝえんじやうしてかくる事もなく、あ
まる事もなきなり。」

問ていはく、「何者か地獄に落候や。」
答ていはく、「人の心はえんによりて出くる
ものなり。そのおこる心を実によりとおもひ
てぜん悪をわけ、此二つの心をたねとし
て、こゝろに叶事をば悦びて輪廻し、心に
叶はざる事をはらだちて地獄のくわほうを

うけし也。されば心に順をもよろこばず、心に
逆をもなげかず、一切の事を智たりとも、(113 オ)
此一大事をあきらめずば、りん廻のもとひ
なり。もし一心をあきらめば、昔今の罪を
めつして本分にかなふべし。」
問ていはく「いかなるを道心と申候や。」
答ていはく「まことの道心とはほとけに
ありてもまさらず、衆生にありても
おとらず、生じてきたらず、死してさら
ず、いかなる故にかやう成ぞといへば、
眼に見、耳に聞、心に思ふ、六根にふれ、惣
じて一切のものみなむなしくなりて、一つも (113 ウ)
とゞまらざりとみるを道心とはいふ也。よの
つねの人の、定めなき浮世なりとて、世を
すつるはしばしのこと也。又一さいむなし
共思ひはつまじき事なり。むなしき
虚空より一さいの物をはごくみ、一切の
色をいだす。一切の色をはなれず、一切の色
を出す。虚空なれば本分の田地とはいふ
なり。いかなるゆへに本分といふぞな
れば、一さいの草木はみな地より生ず。
一さいの色はこくうよりいづるが故に、
かりのたとへをもちて本分の田地とは (114 オ)
申なり。

さくら木をくだきて見れば花もなし
花をば春の空にもちくる
此歌の心をもつて知べし。むなしき
こくうより、一さいの色をいだす事、たゞ
春のはなのみにあらず。夏秋冬の草
木の色のうつりかはる事も智べし。」
問ていはく、「出家はろさいをするが
本にて候や。」
答ていはく、「それほどの事にはとふまでも (114 ウ)
なきことなり。髪をそり、衣を染てあら
ば、はち、けさより外はもつべからず。
あしたには人の門(かど)にたちてこつじき
をすべし。ゆめ++たくはへもつべ
からず。だんなの僧を供養する様を見
れば、一飯をだにくようすれば、それより
外の事なしと思ふ。又出家も経をよ

み、亡者をたすけ、しんせをつくのはんと
する。僧もだんなも地獄に落べし。」
又問、「さてはいか様にだんなを教へ候べきや。」
こたへていはく、「さきにし申やうに、(115 オ)
本分のくふうをなすべし。ある人のいふは
くふうのためにはあらず。妄者のた
めに経をよみ、だらにをみつべしと
かやうにいふ人の工夫と経だらにと
すべてあたらす。たゞわが心の源を
さとりぬれば、一さいしゆじやうをたす
くべし。此故にこゝろざす亡者のみに
かぎるべからず。いかなるゆへぞと
いへば、一切の仏と衆生とはみなま
ぼろしなる故なり。」(115 ウ)
又いふ「ろさいのことにすぐれたるは、無縁
のものゝ、僧にも近きかねたる者の所に
行て、一ぱんのつゐでに一大事の
いはれをいふてきかするゆへなり。」
問ていはく、「人の死し候時はいかやうに
なり候や。」
答て云「四大を分て返し候。四大と
いふは、地水火風なり。人ごとに是をはな
れたるはなし。さればいきは風、身の
あたゝかなるは火、身のうるほひの
あるは水なり。此身やきもし、うづみ (116 オ)
もして、つゐには土となる。この時主
とてとゞまるものなし。四大分て返
すをみる時は、かりにつきたる名
なり。人さとの眼より、まよひの物を
見れば、常住なりとみるゆへに、如此
によみたり。

何事もみないつわりの世の中に
しぬるといふもまことならねば
是を不老不死のくすりとはいふ也。」
問て云「いかなるをまことの仏法と申候や。」(116 ウ)
こたへていはく、「仏法を修行するとは
仏法をならふにはあらず。我ひがごとを
やぶるなり。ひがごとゝいふはめいごぼん
しやうの四相を云なり。まよひとはまよひ、
さとりととはさとり、凡とは衆生、聖

とは仏なり。此思をやむれば、おのづから
本分にちかづくを、今時の人はまよひを
いとひ、さとりをうらやみ、凡夫をはな
れて、ほとけをもとむる心あり。此四相に
さへられて、本分の仏をくまますなり。本分の（117 オ）
仏を、大光明蔵三昧ともいひ、又こん
ごんの正躰ともいふ。或は心源ともいひ、又
ほんらいのめんもくなどゝ申もみなこれ
ほんぶむの田地の名なり。一切の色かたち
ある物はみな本分に返すべし。一切の
いろかたちある物はまよひの一心より
生じて誠にある物にあらず。みな
かりなる物なり。今時の人、此理りを不智
して、かべにむかひて座禪する時、えん
によりておこる念は皆まことにあら（117 ウ）
ざる事をしらず。只一切のことをざそうと
おもひ、まよひの相ねんをおこさじとうち
はらひて何事もおもはぬ物にならん
とて、すこししづかなれば、もう++として
ねむる。又かねてあてがひはからざる
事の出来たれば、ざ中に出くこと
なれば、是もよき事や覧とうたがひ
又ねんのおこる時は古人の言を
こうあんにして、これにて妄念をさけん
とする人もあり。故人のこうあむを人
にあたふる事は加様の用にはあらず。（118 オ）
只本分をしらざる人に古人の本分
にかなひし時の言を、いかなるゆへに古人
かやうにいふ哉覧とうたがはしめて
是をこうあんにしてふしんをとをり
て、本分にかなはしめんためなり。此所
を聞て、めいご凡聖（しやう）の心をやめば、
をのづから本分にちかづくべし。男
はおとこのまゝ、女は女のまゝにて此身を
も心をも実なきことを智りて、五
欲の中にてのぞむ所なく、修行する
をば火中れんげにたとへて善男子（118 ウ）
善女人と仏是をほめ給ふ。此五欲
えんによりて出くる故にまことなし。みな
まぼろしなれば、いとふべきまことの

身も心もなきなり。是ほどのまぼ
ろしの身をもちて、いのりもてあ
つかふ事をいましめて、もろ++の
経にとき給ふを、此をしへのごとくには
なくして、あまつさへ此経をよみて身
をいのるものいかで仏の御心に叶
べきや。たとへば人の大事を文にかき
て、下人につかはしたらんに、もし此下人どんこん（119 オ）
にして文の用事をばしらずして、是
を毎日取出してまき返し++文字
をかぞへて日を送るとも、いかでか其
主の心にかなわんや。けつくぬしの心に
たがふべし。仏法も又かくのごとく、今
時経をよむ人をみれば、其きやうの
教へのごとくにはふるまはずして、
仏のいましめたまふ名利のために此経
をよみて仏神をすかし奉てものを
こい奉る。いかでか仏の御心にかなふ
べきや。加様の人の心に同心して、さらば（119 ウ）
なんちが申事をかなへんとて仏法に
そむく事をしゐらん哉。神に三ねつの
くるしみあるといふ事も衆生はどん
こんにして、とんじんちの三のとがあり。
是によりて地獄に落をなげき給ふ
を三ねつのくるしみありとはいふなり。
とんとはむさぼる、しんとはいかり、ち
とは愚癡の事なり。仏法をしらず
して、此三の心をおこすをいましめ給ふ
なり。今の時の人の礼をなすは、みな
仏神の御心にそむく事のみなり。されば、（120 オ）
是程に人の申事の思ふ様になはぬは、
仏神の御心に御うけなき故なり。加様
の人の仏神を信ずるは、仏神の用所
にはあらず。たゞ身のためなり。仏神
を信ずるといふは、仏神のかごにより
て我ら此仏法を聞、是によりて生
死をはなれん事は、ひとつに仏の御恩
にあらずや。此ほう恩の為にまいり礼
拝をなせば、誠の仏神を信ずる人
と申也。かやうの理りをばしらずして、

生死をはなるゝ理をしらぬ心をもとゝ
して、心のまゝにふる舞給ふ人間は、老
少不定にして出いきは入いきをまた
ずして、ごくそつのせめのがれがたし。
必地獄に落べし。がきちくしやう
修羅人天六道の種はみな我心を誠に
ありと思ひなすによりてなり。只この
身も心も幻のごとくなれば、すべてま
ことなしと思ひて、一さいのことをなす
とも皆是まぼろしの世と思ふべし。
もし此身も心も真にありと思はゞ、
一切の善こんみな輪廻のごうなるべし。」(121 オ)
問ていはく「こゝに大なる不審あり。仏
五十年の間説法し給ふ。教のまゝに修行
せんとすれば、仏最後にとき給ふ、『初
より終まで一字をもとらず』と宣ひ
て一枝の花をさゝげて大衆に見せし
め給ふ。果葉尊者すこしわらひ給ひし
は、いか様なる故にや。」
答ていはく、「仏五十年の説法は、た
とへば子をいだかんとするに、近ずか
ず手のうちに物のあることをいひて近
ていただくがごとし。五十年のせつばうは(121 ウ)
手をあげてをさなき物をすかすがごとし。此故に
方便と云う。仏の仏のかせう尊者につたへ給ふ所
の法は、彼をさなき物をいだき取たる所也。然に
此花の心は身を以て知るべきにもあらず。心を以て
はからひるべきにもあらず。身口意をからず
して、修行するといふ事を、身をかりて座禪
し、心をかりてなし、くちをかりて人に
問べし。此心を智らんと思はゞ、一切の所にて、さても仏
のあげ給ひし花をかせうわらひ給ひし心は
いか成所ぞと見るべし。此いはれをしらずば一切の法
門を知たりとも、世の中のもの智たる人とは云とも、仏(122 オ)
法者といふべからず。此花はこれ三世の
諸仏の世に出て、一乗の法との給ふも
此はなのいはれなり。天竺の二十八祖、唐土
の六そより、此かた一大事といふは、此こと
なり。一大事といへばとて、世間の人のしに
くき事を一大事といふ様にはあらず。一大事と

いふは、本分の田地なり。本分の田地とは、心の
源なり。心の源とは、虚空のごとくなる
物なり。こくうのごとくなる本分の田地は
一切ものゝ源なり。たゞ一大事をしらざらん
ほどは、いつさいのいたづらごとをやめて、是を（122 ウ）
たづぬべし。此花のいはれをしりたらん
人々、一切の物皆仏法なるゆへに、いたづら
なるもの一切もなし。是をしらざる人は、
仏法を思ふもいたづらたるべし。++。」

落陽統一休

○借用申池水火風虚

返弁申今月今日

かりをきし五つの物を四つ返し

本来虚に今ぞおもむく

○生死去来 棚頭傀儡（ばうとうくわいし）

一線（せん）斬時（ざんじ） 落々（らく++）磊（らい++）

いつの日のいつの比にか

でくるぼのめぐり

++て今はがつたり（123 オ）

○山崎にほとゝぎす多鳴を聞て

山崎の宗鑑

○かしがまし爰をたちされほとゝぎす都のうつけ待もこそせめ

○定家の弟のぎやうぐわつ坊と申仁、定家におひ出され、木の上になげ

○費長（ひちやう）鶴張博（ちやうはく）うき木達磨（だるま）あしぎやうぐわつ坊
は

こすぎにぞのる

此やくもと云草子は諸の事を引く物也。

○内宮守武に、ある人、やくもの草子（さうし）とちやうすと阿弥陀と、此三種
あづけて、取に遣けるに一首

○世の中はひく物多くやくも引ちやうす茶をひくあみだみちびく（123 ウ）

中村にたきゞ多くありけるに、薪のね、銭三百卅口にて有けるに

○つみおける薪の代も寺の名もとへば三百さんぽだいせん

○有明のつれなく見えし若衆のあかつちばかりうき物はなし

此歌は、さかのさくげんの御歌と云説あり。京の町を御
とをりの時、つねに若衆ずきの御人の由、よき若衆なる
へや殿が、あかつちにてかべをぬりけるを見て、
尻をまくりあげて、折ふしぬけるを、扇を以打
たゝき給ひしに、若き者也。さくげんともいわず、
後あか土にて打ければ、此時かくよめり。

○なが旅はいかなる歌もよみつべしあまりよごれてあか人になる

宮仕亀田殿作（124 オ）

○冬の夜はいか成歌もよみつべしあまりかゞみて人丸になる

△さかさまによみても同じよみの歌

○ながき夜のとをのねぶりのみなめざめなみのりふねのおとのよきかな

○きしひこそまつがみぎわにことのね（ママ）ここにはきみがつまぞこいしき

又、発句に、さかさまによみても同じ事

○なかはだへなはのちのはなゑたば（ママ）かな

同じ文字なき歌。但、古今集にあり。

○〈古今〉世のうきめ見えぬやまちへいらんにはおもふ人こそほだしなりけれ（124 ウ）

○〈秋〉月にゑをさしたらばよきうちわ哉 宗祇

○〈春〉まんまろに出てもながき日あし哉 宗長

定家の弟ぎやうぐわつ坊の定家へ

○ぎやうぐわつがしわすのはてのそらゐんじ年打越さん石ひとつたべ

定家の返事に、壺石の米を二つにわりて五斗御遣候返事也。

○定家がちからのほどを見せじとて石を二つにわりてこそやれ

●〈小町四十の年〉行末をこしかた程と思ふ共ほどもあらじなほどもなかりき

●〈天神の御歌〉家の風吹ぬ物ゆへはづかしのもりのことの葉ちらしつる哉

○弘法大師十首の御歌

一つある心をしらで人はたゞしどろもどろに物思ふなり

二つともあらざる物をなどさらばみがきて見よやむねのかゞみを（125 オ）

三ぼうをいのらぬ人の行末は心の鬼の身をせむる哉

四大とて地水火風を合つゝ是を名付て人と云なり

五臓とてくうなる物をしりぬれば彼盗人はあらはれぞする

六（ろく）仏の世に出ざりし其さきはたゞやみの夜に吹風の音

七ふしぎ心の仏もちながらもくや絵ざうと云ぞはかなき

八まんの法をとふる人なりと我をしらずば末はたのみぞ

九（く）ゆる共かなわじ物をうづみ火のきへざるさきにいのれ後の世

十しやうと云べき我も今は又此わの内にあら（125 ウ）

酒の酔氣を取次第 ゑぐいものかしら いりまめ 炭 同又

いものくき 手一束に切て、貝のかう此内何れも吉。何れ成共

一色入て置べし。

天下のゆう長老百首の御歌

詠狂歌 何れもだい有

立春

◆春のくるしるしを見せて神垣や三輪の杉はり立霞哉

子曰（126 オ）

ねのびの歌

酒（さけ）つきて野べに初寝をせし春は小松はひかで風（かぜ）や引（ひく）らん

霞（かすみ）

春毎にこぞより物の見えぬ目は雲（くもか）にしられぬ霞成けり

鶯（うぐひす）

巢（す）は跡に残し出たる谷川の魚にばけつゝうぐひなくなり
此趣向尤興あり。され共うぐひすといふ魚の名の
なかず如何。題の本意にかなへり共申がたくや。（126 ウ）

若菜

◇売（うり）にくるほどをしとへば我そのゝ鶯菜とてねこそたかけれ
残雪

春の日のひかりに雪や消ゆるとて家々のせどにあたまほす見ゆ
梅

◇しう殿の秘蔵の梅を買たらばすわひのさきて花や付べき
主殿の心あまりせばくや。従者もそれならぬ
私曲もありつれど、梅の花無執心の故に遠慮にやとぞ
覚侍る、いかゞ。（127 オ）

柳

◆桜にはあらぬ春べをこきまぜてえだをたをればはこ柳哉
早蕨

やけつりのこりぬたぐひが灰に成山のあたまに見ゆる蕨は
桜

◇桜咲遠山までの花見にはなが++し日ぞもてや中食（127 ウ）
帰雁

花見すると衆のはなす鉄砲にあたらしとてや帰るかり金
春雨

◇春雨の風にしたがふかい道はしるくなれ共はやかわきけり
春駒

◇毛の色を物にたとへば春駒の油壺（つぽか）から引だいたごと
喚子鳥（よぶこどり）

◇よぶこ鳥よぶ子もあればとりとめてちゝをのまするをちこちの山（128 オ）
苗代

◇検地已後物をもくわで田作を苗代餓鬼と人や見るらん
董

薬師堂の庭に咲たる花の色はまこともるりのつぽ董哉
此花の色むらさきに申ならはし候か。

杜若

水でとくにかわのあやめかきつばたにたりや++とにためきにけり
心詞よくねられたるにや。

藤花

まどひつゝ藤にしたゝかしめられてなんぎそうなる松ふぐり哉（128 ウ）
款冬（やまぶき）

川上に山吹そむる口なしか黄色な汁か井手の玉水
三月尽

◇春の日の長鏈（やり）なれど篠のはの一夜斗になれるいしづき
篠葉の長鏈、石づきになれる、三月の名残、よわひ
かなへられたるに、作におゐては吉光にこそ。

更衣（ころもがへ）

◇めおと中にたゞ二つもつ衣をば替あひてけふはづや合せん
いかやうのかへあひたる衣にか。たゞ二つもつほどの（129 オ）
躰、互の色あひにげなくやとぞおぼゆる。

卯花

◇月出るその方角も卯の花の東しらみに夜は明にけり

葵

◆備中鍛冶はむね作りにうつ刀是や二ばのあふひ成らん
はむね作り二葉いさゝか思ひ所なまず尾なりと有べきか。

時鳥

◆夏の夜のふすかとすればへとゝぎすひる一声に明るしのゝめ（129 ウ）

菖蒲

さしざまに軒のおそひの石にあてゝ菖蒲刀のははおれにけり

早田

さをと女にもまれてしばしおへつかぬ今日の早苗ぞなへて見えぬる

照射（ねらひか）

ねらいよせてすつとはづさば面目を灰にまぶしの射手とこそいわめ

五月雨

五月雨にかくて成共所々はげがひたいに毛がはへよかし（130 オ）

廬橘

◇禁庭の花さへ木さへ見えね共風かほりくる橘がつじ

当時の時、庭禁の扱は知らず。全宗法師の薬種の香
みち++たる躰、ことのはものべがたし。

蛭

◇西浄のしりかさちかく来る蛭是や高野のとび火成らん

蚊遣火

家々の軒に蚊遣をたてならべ天くらふなる夕煙哉

蓮（130 ウ）

蓮にのるたぐひは異香くんず也花には仏葉にはさし鯖（さば）

氷室

◇今日かまばこほり雪とぞくだけまし消ずはあり共餅（もち）と見ましや

正月にさへ不足のうへは、きえずはありとものさた、いまだ
不智案内に候。一笑++。

泉 萩 萩

よる毎に式部がそゝや洗らしむすぶ泉の水のくさは

和泉式部が臭（貝か）気、古来其沙汰き伝て知らず。其
定説なからん説は批判をくはへがたし。誓願寺の本尊

さだめて存か。一笑++。(131 才)

夏和菰

◇今日のみか毎夜蚊帳の出入に夏（夏か）はらひせぬ家もなし
はらひ、はらへの仮名不審。

立秋

萩あめる戸たゝく風や秋のくるおさきばしりの案内の声
七夕

◇盆またで聖霊まつるたなばたにむくる時衆の尼（あま）の川水
萩（131 ウ）

◇人はみな萩をいふいなは我は米の出くる秋とはいはん
女郎花

◇なまめきて男山にし立ぬるをみなへしつくる秋の夕風
薄

◇まねきよせてばかさんとてや秋の野につれる狐の尾花成らん
荳蔻（かるかや）

◇雨いたくもるや関やの屋ねふきの＝〔草冠・道・月〕（ふきか）草にとてかるかやの露
蘭（ふぢばかま）（132 才）

蘭もゝだちくわつと取もせですそ野をくだり露にぬれつゝ
もゝだちとらずすそのをくだりなどいへる、霜腹の
おこり、野ばなしの躰にや。はかまのすそおぼつなこそ。

萩

◆難波人よしやともいへ我目には神も照覧伊勢の浜萩
古来此沙汰あり。然間御誓言のうへは不及是非ぎ候き。

雁

◇小しゞより来るとはいはじかり高になくなる声はふと##として
小しゞにもかりだか成有べし。但、ふと##としたる上、相応か。（132 ウ）

鹿

狩人のうそぶく山や鹿の角をさして飛行八月の空

露

露が袖にいのちの葉ひけばさぞなをく必汁にしたるならねど

霧

◇朝霧のきりのまがきの垣のもとをとをり行人丸ぬれにして
槿（あさがほ）

◇花の露も日影うつせばひるに塩（しほ）ひるはしほ++となれるあさがほ（133 才）
駒迎（こまむかへ）

しうの為引のぼれ共機（き）にあわで使かくびをきり原の駒

月

丸かりしなりもかくるや天人の夜毎にかぶる餅月の果子（くわし）

擣衣

百性のうすする比のきぬたにはつちうつ賃にぬかやくれけん

虫

長々としやつさと（さつ++とか）したる鬚（かみ）をなどちんちりりとひねる松むし
（133 ウ）

菊

◆つぼの内に作り置たる菊の酒口をひらけば花の香ぞする

淵明は王弘が使来りてはじめて酒を得たり。此菊の酒は
手作のさま尤愚意の広きする所也。

紅葉

◇朱をまぜて漆（うるし）ぬるての紅葉ばも先秋風にまけてちる也

九月尽

◇秋の日のみじかき物を長月と云もつもごりてみゆる大小（134 オ）

初冬

◇偽の有世成けり神無月びんぼう神は身をもはなれず

時鳥〈時雨か〉

◇やよ時雨小猿の尻のなかりせば木の葉の後は何を染まし

慈鎮和尚の歌を本意にて詠ぜられけるに小猿の尻と
有ぞ。山の座主にておはしけん比の坂本などの跡にて興有。

霜

こしはりてさゆる夜しるき鉄砲のゑんせうのごとく霜やふるらん（134 ウ）

霞（あられ）

◇大空にはゞかる餅を切すぎて霞（あられか）となして冬や送らん

雪

かきみずは散を花とぞながめましつめたらんとても雪と見ましや

氷室の歌、此同本意をとり用られたり。無念と云べし。

寒蘆

乗ありくあしの葉風に達磨方下焦ひえてや冬は死にけん

千鳥（135 オ）

餌（ゑ）さしめがちやくとさすべき竿（さほ）の川無用心にもなく千鳥哉

氷（こほり）

◆水海の上こと##くはりにけん是や近江の二十四こほり

水鳥

◆泉（せん）水に立石ころび鳥の名のをしにうたれて死ぬる哀さ

網代（あじろ）

所がら其頼政がゆふれいもあらはれ出る宇治の網代木（135 ウ）

神楽

◇みこたちの神楽にけわふ唐の土さらに面は白々として

鷹狩

◇摂家（せつけ）まで供奉する君が御かり場にすべて出たるたかつかさ殿

炭竈（すみがま）

奈良油煙初瀬出ざまにおとしつゝ小野炭にてや手ならひの君

文は油煙にてこそ。小野炭の手習の所の
さま世を捨られたる心、尤可憐。(136 才)

埋火（うづみび）

灰の中に物のふすぼる埋火はもちをやくかと床しくぞみる

除夜

鬼は内福をば外（そと）へ出す共年ひとつづゝよらせずもがな

初恋

◇我に恋をさするもうるさあまのさかほこしうもなき事をし初て

忍恋

◇きいた事いわでこらへぬむくひにや忍ぶる中の名にも立劔（136 ウ）

不遇恋

◇我恋は拍子もきかぬ下手づゝみあふ事なしにあぢのわるさよ

初逢恋

しばらくはむなさわぎしてしづ++とふるひ声成新枕哉

後朝恋

あひ見ての後の朝にくらぶれば昔（むかし）はかつもやせぬ恋哉

遇不逢恋

一夜にてあかれこし身はそひぶしにゑりのうすさやさぐられにけん（137 才）

旅恋

旅人と又旅人と行あひて道のはたにて恋もする哉

思

◇恋ゆへに飯はえくはでわりかゆの思ひ内にあれば色やわるけん

是程の恋の趣向、愚意におゐていまだしり侍らず。

二日酔の時の事にやとぞおもひしられ侍る。

片思

びんぼうはかたにつきたるかた思ひおもひもつかぬ人は理り（137 ウ）

恨

◆別路のかたみの風（しらみ）とる度にわが恋衣うらみ++て

歌のすがた風流、詞のつゞき艶也。此一首の趣向、風（しらみ）

だになかりせば、重て思ひいづべき。われともきこえ侍らずこそ。

暁

今日立てへい下地かく弥勒堂其あかつちを待と見えたり

松

◆橋立の松のふぐりも入海の波もてぬらす文殊尻哉

竹（138 才）

竹の子をぬすまれじとてする警古藪（やぶ）から棒（ぼう）をつきだいてもて

苔（こけ）

君がかほ千世に一たび洗（あらふ）らしよごれ++て苔のむすまで

山

◆灸すへてふじのけぶりはたやさねど猶ちか++と足引の山

川

ぼうしこそながれ来にけれ其主やしづみて死ぬる此桂川（138 ウ）

鶴

和歌の浦や塩干の跡にさすわなの足にかゝりて田鶴しめころす

野

坊主たち紫野ゆくしめ野行蓮たい野にて経をこそよめ

関

ぬい目付て雲井のかりを染たるはたがかたぎぬのもちの関守

橋

君にかゝりおつ年までも威勢する御代にあふみのせたの長橋（139 オ）

海路

◇顔渚（がんゑんか）にひようたんをこそかりつらめ海にうかまんと思ふ孔子は
恋の山にはくしのおふれといゑども海にうかぶ用心には
顔渚に瓢箪をかりけるにや。尤興あり。

旅

草枕飯をばもたで推（きぢか）のはをすくひ物にししたる麦の粉

別

立別れいなばいねと思ふらんいつ帰れ共云人のなき（139 ウ）

山家

〈山へ入たるもあり。／やまいつたの心か〉

◇世にはなれかゝるさびしき目にあふを山入つたとや人のいふらん

懐旧

◆おうぢうばひうばひおうぢこと##く死なずにいらば何をくはせん
御母儀さまを入られざる所、尤作者の
御遠慮か。殊勝++。

夢（140 オ）

◆かねひろふ夢は夢にて夢の内にはこすると見し夢はまさ夢
化蝶翁の夢、いまだ夢を弁ぜず。此趣向まき（さか）夢を
わきまへられたる心、尤珍重++。

無常

一字おち申候哉、如本。

◇死ぬるとてこせぬ事をしたびたゞそも誰人の所行無常ぞ

述懐

◇大き成柿団（うちわ）がな二三本貧（びん）ぼう神をあふぎいなせん（141 ウ）

祝

やぶれじな理にくらからぬ君が代は天下泰平国土あんど
右如本随分念を入うつし申候者也。

此ゆふちやうろふと申上人は、京三条せいぐわん寺の
上人。天下一の作者、事外の智者也。

但、長岡越中守殿のおぢ、同長岡ゆふさいの弟也。

此ゆふさいは諸げい天下一の人、名乗を藤孝（ふぢたか）と云。（141 オ）

世上の人、げんしさまといふ人也。此ゆふ長老、
此兄のげんしへ右の狂歌、点を御とり被成候。

かゞみに水かねを用る時のかげん

○冬は水かね壺匁に上々のすゞ三ふん合て吉。

夏は水かね壺匁にすゞ四ふん合てよし。

○ようてう、此外、諸瘡別てうやく

何によらず出来物のいえぬに（141 ウ）

三国一の妙薬。

○きわたの黒やき

○ゆわふよくすりてかたきゆわふを用。

出来物の上にひねりかけよ。

あま味曾の事 すたてのやうに花を付る也。

○大麦一升二つきを又よくつきてぬかを取候

○大豆八合いりてあらごと引

○しほ三合 毎日つぎ入て後も能々

○水八合 日に干べし（142 オ）

〈寒山〉○ひきにげて峯に庵を結べし谷へは月のおそく出るに

〈十徳返歌〉○出るとも入とも月を思はねば心にかゝる山のはもなし

ある口伝云

右の出るともの歌を用て、なつての木の南へさしたる

枝を柳枝にして残一重をさしとをして

右の歌を三返となへよ。

そうかんのぢせい

○そうかんは何くへ行と人とはゞちと用有てあの世へといへ

○渾（にぎり）たる酒をすますの事、たとひざるごしでもすむ也。

○にぎりたる酒一升あらば、そばを三合程かわをむき取て

夕食の客人には朝より、朝食ならば前日の宵（よい）より入置也。（142 ウ）

△梅づけ日本一

●梅のいかにもかたくあをき吉。梅一升到やき塩

仁升也。とかくかげんは梅の見えぬほど塩をふる。

△竹の子づけの事、同明年の五日（月）も同前

●いかにもふとき竹の子こわき所も吉。丸ながら

是も梅のごとく竹の子の見えぬほどしほを入。

△山もゝづけ 同明年まであをし

●あをき時、山もゝ一升到やきしほ仁升

梅酢五合つぽでも桶でもよし。

越越路路水越中（143 オ終）